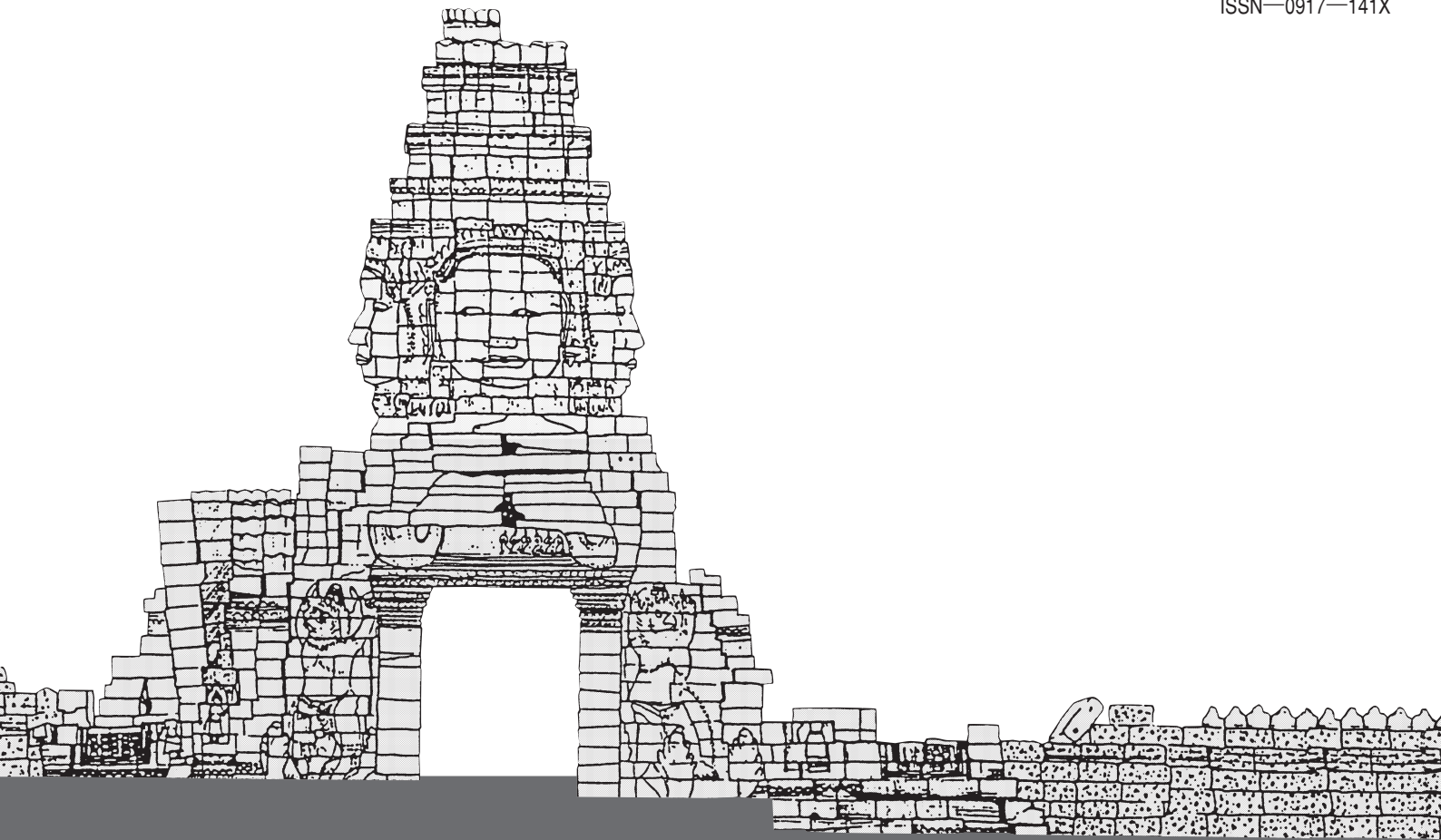




カンボジアの文化復興(32)

——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

RENAISSANCE CULTURELLE DU CAMBODGE (32)

2021年

上智大学アジア人材養成研究センター

Sophia Asia Center for Research and Human Development, Tokyo

The Publication of the Research Report “*La Renaissance Culturelle du Cambodge (32) (2021)*”
was supported by a grant from Sophia University

© Copyright 2021 by Sophia University. ISSN-0917-141X

Edited & Published by Sophia Asia Center for Research and Human Development

Editor in chief Dr. Yoshiaki ISHIZAWA

7-1, Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8554, Japan

Tel: (03) 3238-4136, Fax: (03) 3238-4138

カンボジアの文化復興 (32)

目 次

研究論文

1. 海域東南アジアにおける唐代の崑崙
(日本語)..... 深見純生 3
2. 7世紀の林邑交易圏 ——『新唐書』環王伝付伝の分析から——
(日本語)..... 深見純生 25

研究ノート

1. アンコール王朝で働いていた役職高官たち —碑文記載を立証する壁面浮彫り絵図考察—
(日本語 + 浮彫り絵図) 石澤良昭 47
2. アンコール地域における文化遺産教育 —学術分野から地域社会へ—
(日本語).....NHIM Sotheavin 71
3. シンガポールにおける「公共圏」の拡大 —市民運動が提起する「価値」とその活動の検証—
(日本語)..... 道傳愛子 89
4. The Historical Earth-fortified Highway of the Indo-Chinese Peninsula and *Pax Angkorika* (Peace in Angkor Empire)
(英語 + 調査を裏付ける地図および現場写真)
(English + Photographs + Maps) Yoshiaki ISHIZAWA 121

Renaissance Culturelle du Cambodge (32)

Contents

Articles

1. The Kunlun (崑崙) in Maritime Southeast Asia during Tang Period
(Japanese) Sumio Fukami 3
2. The Trade Sphere and the Tributary Business of Linyi (林邑) in the 7th Century:
An Analysis of the Additional Parts of the Huangwang-chuan (環王伝) of the Xintangshu (新唐書)
(Japanese) Sumio Fukami 25

Research Notes

1. High-ranking officials who worked in the Angkor Empire: According to the evidence
of inscriptions carving on the wall relief of the temples
(Japanese and Illustrated Relief) Yoshiaki Ishizawa 47
2. Cultural Heritage Education in Angkor: From Academics to the Community
(Japanese)Nhim Sotheavin 71
3. Singapore's Emerging Public Sphere: Implications of "Values" presented by
the Civil Society Movements for Social Change.
(Japanese) Aiko Doden 89
4. The Historical Earth-fortified Highway of the Indo-Chinese Peninsula and Pax Angkorika
(Peace in Angkor Empire)
(English, Photographs and Map) Yoshiaki Ishizawa 121

ការកកើតឡើងវិញនៃវប្បធម៌ខ្មែរ (៣២)
មាតិកា

អត្ថបទស្រាវជ្រាវ

១. គុនលុង (Kunlun) នៅពាណិជ្ជកម្មសមុទ្រអាស៊ីអាគ្នេយ៍ក្នុងសម័យកាលសន្តិវង្សតាង
(ភាសាជប៉ុន) Sumio Fukami
២. ដែនជំនួញ និងពាណិជ្ជកម្មនៃរដ្ឋចំណុះលីនយី (Linyi) នៅស.វ.ទី៧ ៖ ការវិភាគ
បន្ថែមផ្នែកមួយនៃ Huangwang-chuan [Xintangshu]
(ភាសាជប៉ុន)Sumio Fukami

របាយការណ៍ស្រាវជ្រាវ

១. ឋានៈមន្ត្រីជាន់ខ្ពស់ដែលធ្វើការនៅសម័យអង្គរ ៖ តាមរយៈត្រីកតាងសិលាចារឹកដែលចារ
នៅតាមប្រាសាទ
(ភាសាជប៉ុន)Yoshiaki Ishizawa
២. ការអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌នៅអង្គរ ៖ ពីអ្នកជំនាញ ទៅដល់សហគមន៍
(ភាសាជប៉ុន)ញឹម សុធាវិន្ទ
៣. ការលេចឡើងនូវឥទ្ធិពលជាសាធារណៈនៅសិង្ហបុរី ៖ ការជាប់ពាក់ព័ន្ធនឹង “តម្លៃ”
ដែលចលនាសង្គមស៊ីវិលសម្រាប់ការផ្លាស់ប្តូរសង្គម
(ភាសាជប៉ុន) Aiko Doden
៣. ផ្លូវបុរាណនៅឧបទ្វីបឥណ្ឌូចិន និងសន្តិភាពនៃអាណាចក្រអង្គរ (Pax Angkorika)
(ភាសាអង់គ្លេស រូបថត និងផែនទី)Yoshiaki Ishizawa

研 究 論 文

海域東南アジアにおける唐代の崑崙¹⁾

深見純生

The Kunlun (崑崙) in Maritime Southeast Asia during Tang Period

Fukami Sumio

Keywords:

Kunlun, Maritime Southeast Asia, Tang period, Curled hair and black skin, Maritime trade

Summary

The toponym Kunlun (崑崙) during Tang period had multiple meanings, of which the most important was a general name for the area that was approximately same as Nanhai (南海) or South Sea. The area covered Central Vietnam, Cambodia and Thailand in the North and the Malacca Strait and further East of Java and Bali in the South. Thus, Kunlun roughly coincides with the area Maritime Southeast Asia.

It is a mistake of the Chinese documents such as Jiutangshu (旧唐書) to depict the Kunlun people as curled hair and black skin, because Southeast Asian people is mostly straight hair and brown skin. The reason of the mistake can't be pointed out clearly, but as an important background for the prevailing of the misunderstanding we can suppose the confusion of Kunlun and Kunlunnu (崑崙奴) or Kunlun-slave during Tang times. Kunlunnu with physical feature as curled hair and black skin were slaves brought by Kunlun people or from Kunlun area, however, Kunlun and Kunlunnu gradually became not to be distinguished. The confusion was accelerated by that the Kunlunnu image was loved so much in literature and arts of the time. Even demonic images were added to. The influence of the image of the Kunlunnu was so strong that Yijing's testimony from the Nanhai that most of the Kunlun people were physically same as the Chinese was neglected by the compilers of Chinese historical documents and also by modern scholars.

Freed from the spell of the Kunlunnu image, this paper presents the real features of the Kunlun people. In the Buddhist world, they were more civilized than the Chinese. They were maritime merchants who brought wealth and prosperity to the port cities such as Guangzhou. They used Malay as a lingua franca. They were skilled in shipbuilding and navigation. Their ships were sewn boat big enough, it is said, for 1000 passengers and cargoes. They sailed not only to China but also to India. The Chinese in Guangzhou in the 9th century learned the skill to build the sewn ship from Kunlun people.

キーワード：崑崙、海域東南アジア、唐代、卷髪黒身、海上交易

はじめに

崑崙には西域の崑崙と南海の崑崙があり、前者が伝説に彩られた半ば想像上の山であるのに対して、後者はおもに南北朝期から唐代および宋代の史料に現れる、実在の国々とその人々である。したがって南海の崑崙は当該時期の海域東南アジア史を再構成するための重要な手がかりの一つであるのだが、その史料の記述には混乱あるいは錯誤を含むものがあり、歴史像再構成の妨げになっている。本稿はこの混乱を解きほぐして唐代の崑崙の実像に迫ろうとするものである。

崑崙全般に関する最も重要な研究はフェランの長大な論文である〔Ferrand 1919〕²⁾。この論文は非常に大きな時間的・空間的枠組みの中でのコンロンの語の分布と流布に主な関心があって、各々のコンロンがどのような人々、国々であるかを論じるわけではないので、本稿と問題意識を異にする。とはいえ、その論文の最初の部分で漢籍に現れる多様な崑崙の地理的な位置を次の七つに区分するのは本稿の出発点として有益である。a ガンジス川より東のインドとインドネシアのいくつかの島。b コンダオ島（南部ベトナム沖）。c クーラオチャム島（中部ベトナム沖）。d チャンパー、古代のカンボジア、ミャンマー、マレー半島（頓遜と盤盤）、スマトラ、ジャワの崑崙国。e 南詔近く of 崑崙国。f 広西の崑崙関。g アフリカ東岸とマダガスカル島。d が東南アジアの大陸部から島嶼部にかけての広域なのに対してその他はすべてその内外の個別の地名である。

このうち本稿の対象となるのは d である。ただしミャンマー（『新唐書』驃伝の小崑崙等々）は海域ではない（おもに雲南経由の内陸路で中国に通じる）ので本稿の対象外である。また王や高官の名前や称号の崑崙（南北朝期の扶南・頓遜・盤盤）も独自に扱うべき事柄であるので本稿の対象外としたい³⁾。この d の崑崙の内実に関する詳細な研究は桑田六郎「南洋崑崙考」「崑崙奴と僧祇奴」および松田寿男「崑崙国攷」である〔桑田 1993ab、松田 1987〕。いずれもたいへん参考になるとはいえ、後に述べるようにその議論と結論には従いがたい。

唐代の崑崙に関してまず検討すべきは、すべての論者が取りあげる『旧唐書』巻 197 林邑伝の末尾の「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙（林邑より南はみな巻き毛で色黒であり、崑崙と総称する）」という一文である。ここで問題は、卷髮黒身という形質の特徴が東南アジアにほとんど適合しないことである。桑田と松田はこの卷髮黒身の人々をマレー系と主張するが、これは筆者には受け入れがたい。マレー系は直髮褐身であるので、この一文に誤りが含まれているというべきである⁴⁾。

本稿では第 1 節で上記の一文の卷髮黒身について検討し、唐代に卷髮黒身の崑崙奴というイメージが広く共有されたことを確認したうえで、美術史家浅湫毅の指摘（浅湫 1996）と義浄の記述にもとづいて、そのイメージから崑崙を解き放ち、崑崙の概念を明確にしたい。そして第 2 節で唐代の南海の崑崙の実相を史料に即していくつかの側面から取りあげる。なお、標題の海域東南アジアは「海で結ばれた東南アジア」というほどの意味であるが〔生田 2004: 132 参照〕、本稿では上記のように海にベンガル湾を含まない。

1 卷髪黒身の再検討

(1) 南海諸国は卷髪黒身か

最初に『旧唐書』の上記の一文「自林邑以南、皆卷髪黒身、通号為崑崙」の前半が他の史書にどのように表現されているか確認しておく。表1は、正史では南蛮（南夷、海南）伝のある『晋書』から『新唐書』までそして南方諸国を多く取り上げる『通典』などの計13の史書において

表1 卷髪黒身の諸国

史書	林邑	扶南	真臘	婆利
『晋書』卷97	以黒色為美	人皆醜黒拳髪	伝なし	伝なし
『宋書』卷97	該当記事なし	該当記事なし	伝なし	伝なし
『南齊書』卷58	人色以黒為美、南方諸国皆然	該当記事なし	伝なし	伝なし
『梁書』卷54	其人深目高鼻、髪拳色黒	其国人皆醜黒拳髪	伝なし	該当記事なし
『隋書』卷82	其人深目高鼻、髪拳色黒	伝なし	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『南史』卷78	該当記事なし	其国人皆醜黒拳髪	伝なし	該当記事なし
『北史』卷95	其人深目高鼻、髪拳色黒	伝なし	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『通典』卷188	其人深目高鼻、髪拳色黒	人皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	其国人皆黒色、穿耳附璫
『旧唐書』卷197	其人拳髪色黒	伝なし	該当記事なし	其人皆黒色、男子皆拳髪
『唐会要』卷98・99	該当記事なし	伝なし	該当記事なし	人皆黒色、穿耳附璫
『太平御覧』卷786・787	其人深目高鼻、髪拳色黒	其国人皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	該当記事なし
『太平寰宇記』卷176・177	其人深目高鼻、髪拳色黒	皆醜黒拳髪	人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髪垂耳	其国人皆黒色、穿耳附璫
『新唐書』卷222下	髻髪	其人黒身髻髪	該当記事なし	俗黒身、朱髪而拳、鷹爪獸牙、穿耳傳璫

海域東南アジアに位置したと考えられる諸国の伝を見た結果を示すものである。卷髪黒身ないし類似の記事が見られるのは林邑・扶南・真臘・婆利の4国にすぎない⁵⁾。この他に婆利の東にあるという羅刹にも類似の記事があるが、羅刹は正史に伝がないので表に含まない。婆利と羅刹については後に取りあげる（(4)項）。これら以外の諸国は卷髪黒身とは無縁であるらしい。とすると、『旧唐書』のこの一文は根拠不明の誤解であるか、少なくともたいへん誇張されていることになる。

林邑はオーストロネシア系、扶南・真臘はオーストロアジア系の人々が中心と考えられており（扶南はオーストロネシア系説もある）、中国人と同じ直髪褐身のはずである。林邑・扶南・真臘は南海諸国のなかでは中国との交流が比較的盛んなので、この3国を卷髪黒身と誤るのは不思議である。林邑について『南齊書』に卷髪には触れずに、「人色以黒為美、南方諸国皆然（色

が黒いのが美しいとされる。南方諸国は皆そうである)」という独自の一文がある。それはともかく、『梁書』から『太平寰宇記』までの7件とも「髮拳色黒」と同文で、さらにそのうち6件では「深目高鼻（眼窩が窪み、鼻が高い）」という。この容貌は東南アジアには適合せず、不思議な記事である。扶南についても『晋書』から『太平寰宇記』まで6件が同文で「皆醜黒拳髮（みな醜く、黒く、巻き毛である）」という。真臘もまた『隋書』から『太平寰宇記』まで5件とも「人形小而色黒、婦人亦有白者、悉拳髮垂耳（人は小柄で色が黒く、女性には白い者もいて、みな巻き毛で耳が垂れている）」という同文である。以前の史書からの引用が繰り返されているのは明らかだが、それぞれの最初の記事が何を根拠にしているか筆者には不明である。

このうち扶南については、3世紀半ばに呉の孫権が朱応と康泰を扶南に派遣したことから直接の見聞が得られ、いくつかの書物が書かれた。それらはすべて逸書となったが、我々はこの書物に引用された断片的な文章を利用することができる。それらを見る限りでは扶南の人を巻髪黒身と表現するものはない。さらに、こうした書物のひとつ万震『南州異物志』（『太平御覧』巻790所引）には「扶南海隅、有人如獸、身黒若漆、齒白如素（扶南の海辺の一隅に獣のような人がある。漆のように色黒で歯は真っ白である）」という一節がある。巻髪とはされないが、黒さの目立つ少数派はおそらくいわゆるネグリティ系の人であろう。扶南の人は色黒と認識されていない可能性が高いといえよう。この記事との関係は不明だが、『通典』巻188に「薄刺国、隋時聞焉、在拘利南海湾中。其人色黒而齒白、眼正赤、男女並無衣服（薄刺国。隋代に知られた。拘利の南の海湾に位置する。その人は色黒で歯は白く、目は真っ赤であり、男女とも衣服はない）」という記事がある（『太平御覧』巻788、『太平寰宇記』巻177ほぼ同文）。巻髪には触れていないが色黒であるという。拘利はふつうマレー半島北部に位置比定されるので、この色黒の人々はタイ湾またはアンダマン海のネグリティ系であろう。

他方で4世紀の中国で崑崙は色黒というイメージが共有されていることは『晋書』巻32孝武文李太后伝の「時后為宮人、在織坊中、形長而色黒、宮人皆謂之崑崙（太后が宮中に入り、まだ織坊にいた頃、背が高くて肌の色が黒かったためまわりから崑崙と呼ばれた）」という記事から明らかである⁶⁾。また晋代の高僧道安は色が黒いため「崑崙子」「漆道人」などと呼ばれた（慧皎『高僧伝』巻5道安伝）。5世紀には崑崙奴の語が見える。『宋書』巻76王玄謨伝に「〔孝武帝〕又寵一崑崙奴子、名白主。常在左右（〔孝武帝は〕崑崙奴の子を寵愛し、白主となづけて、常に身近においていた）」という。5世紀の南朝には崑崙舶も来ていた。『南齊書』巻31荀伯玉伝に「又度絲錦、与崑崙舶營貨（また絹糸・錦をはかり、崑崙舶と取引した）」という。これが崑崙舶の初出である〔神田1931〕。

(2) 崑崙奴

南北朝時代に崑崙に言及する史料は多くなく、巻髪黒身とするのは史書では林邑伝と扶南伝である（表1）。林邑や扶南に崑崙と関わりのある記述があるとはいえ⁷⁾、林邑や扶南が崑崙と呼ばれたわけではなく、また崑崙は色黒ではあっても巻髪かどうか不明であるし、後の史料にいう「漆黒」は文字どおりなのか誇張なのか判然とせず、したがってどの程度黒いのかもわからない。しかし唐代になると、崑崙に関する記述だけでなく崑崙奴が資史料におおく登場するとともに、崑崙人は巻髪黒身さらには悪鬼羅刹のごとき容貌というイメージが定着していく。浅

湫によれば、こうした崑崙人に関する認識（誤解）は唐代に多くもたらされた崑崙奴を媒介として生じたのであった。崑崙奴は本来崑崙地域からあるいは崑崙人によって連れてこられた奴隷であるが、いつしか崑崙人と崑崙奴が区別されなくなり、崑崙人もまた巻髪黒身などの形質的特徴をもつとみなされたのである〔浅湫 1993: 64-68; 1996: 12-14〕。

崑崙奴は唐代には文学作品においてよく知られた存在であつたらしい。小説によく登場し、なかでも裴鏘「崑崙奴」はよく読まれたとのことで、わが国でも黒田真美子による原文、翻訳、解説がある〔黒田 2006: 436-451〕。磨勒という名の崑崙奴の縦横無尽の活躍を肯定的に描いており、家内奴隷の磨勒は主人思いで心優しく、明敏にして、強力、敏捷の人である。黒田の紹介を見る限り、磨勒の形質的特徴は描かれていないが、これは当然のこととして省略されたと思われる。それほどに崑崙奴には確立されたイメージがあるのだろう。そして黒田は解説において『旧唐書』林邑伝の「巻髪黒身」などを引いて身体的特徴や出身地などを説明している⁸⁾。

崑崙奴は詩にも詠まれた。張籍「崑崙児」（『全唐詩』巻 385）や蘇頲「詠崑崙奴」（同巻 74）といった詩が知られている。浅湫はそこに示される崑崙奴の身体的特徴を「肌色が漆黒で、耳が匙のように大きく、耳朶に穴をあけ金環を下げ、髪は縮毛である」とまとめている。浅湫はまた唐代の明器や壁画などの美術資料および日本の伎楽面の崑崙などの美術作品にもとづいて、崑崙奴の形質的特徴を分析している。それを要約的にいえば、背が低く色が黒く縮れ毛である⁹⁾。こうした形質的特徴は東南アジアの大部分に該当せず、浅湫はネグリティ系の人々と推測する。すなわち、南海諸国の総称である崑崙とそこから連れてこられた崑崙奴が混用されたと解釈するのである。伎楽の崑崙¹⁰⁾と呼ばれる面が鬼の形相で制作されたのは、この混用が背景にあって、崑崙奴のイメージに基づく面に崑崙の名が与えられたのである〔浅湫 1996: 11〕。ただし、肌色が文字どおり漆黒とするとネグリティ系ではなくアフリカ黒人かもしれない。次項で取りあげるように、崑崙奴の形質的特徴は単一でなかったかもしれない。

（3）悪鬼羅刹イメージ

崑崙奴が鬼形で描かれることと関連して、唐代の崑崙には悪鬼羅刹のイメージがあることを確認しておきたい。多くの論者が取り上げる慧琳『一切経音義』（807 年成立）が崑崙を悪鬼羅刹のイメージで捉える典型例であろう。その巻 81 において、義浄『大唐西域求法高僧伝』の大津伝に見える崑崙語（第 2 節（2）項参照）に次のような解説が施されている。

崑崙語。上音昆、下音論。時俗語亦曰骨論。南海洲島中夷人也。甚黒裸形。能馴伏猛獸犀象等。種類数般、即有僧祇・突弥・骨堂・閻蔑等。皆鄙賤人也。国無礼儀。抄却為活、愛啖食人。如羅刹惡鬼之類。言語不正異於諸蕃。善入水竟日不死。

崑崙語。上の音は昆、下の音は論。俗に骨論ということもある。南海の島々のなかの野蛮人である。たいへん色が黒くて裸体である。猛獸や犀や象などを飼ひ馴らすことができる。数種類に分かれ、僧祇・突弥・骨堂・閻蔑などがある。みな卑賤の人であり、国には礼儀がない。略奪を生業とし、人を食べるのをたいへん好む。羅刹惡鬼の類のようである。言うことが信用できないのは諸外国と異なる。潜水が巧みで一日潜っていても死なない。

これを検討する前に、いくつかの用語の意味を確認しておきたい。

崑崙は骨論と書くこともあるというが、慧琳は同書巻 61 の破舶の条では骨論を造船と航海に優れた人々として描いている（第 2 節（4）項参照）。義浄が『南海寄帰内法伝』で述べる骨崙もその異字であろうが、仏教世界における文明人として登場する（第 2 節（1）項参照）。悪鬼羅刹イメージは当てはまらない。

崑崙には僧祇・突弥・骨堂・閻蔑など数種類あるという。このうち僧祇は一般にザンジ Zangi / Zangi の音訳でアフリカ黒人のことと解されている。唐代の史書には室利仏逝と訶陵という南海の有力国が朝貢の際に僧祇奴を献じたことが記されている¹¹⁾。中国でおおいに好まれたのであり、朝貢だけでなく民間の交易によってももたらされたことであろう。

突弥は他の史料に見えないが、南インドのタミル Tamil とする説がある〔陳 1986: 612〕。中国人から見ればタミル人は色黒かもしれないが、字音の類似に基づく説であり、他に手がかりがないので、真偽定かでないとしておきたい。

骨堂も他の史料に見えないが、貞観十年（636）に朝貢した甘棠国に同定する説がある〔陳 1986: 250〕。南海の甘棠国と西域の朱俱波国が同日に朝貢してきたことを太宗がおおいに喜んだという¹²⁾。その位置などに関しては「甘棠国、在大海之南、崑崙人也」つまり南海の崑崙人というだけで他に手がかりがない。また骨堂は後述の元開『唐大和尚東征伝』に見える骨唐の異字かもしれない（第 2 節（3）項参照）。骨堂＝甘棠＝骨唐の同定が成り立つなら、骨堂は 636 年に朝貢した崑崙の一国であり、8 世紀半ばの広州に居住していた崑崙人の一種である。ここにも悪鬼羅刹イメージはない。

閻蔑は同じ『一切経音義』の巻 100 にある閻蔑の異字でクメール Khmer のこととされる。

閻蔑。（中略）崑崙語也。古名林邑国。於諸崑崙國中、此国最大。亦敬信三宝也。

閻蔑。（中略）崑崙語である。古くは林邑国を名とした。この国は崑崙諸国の中で最大である。仏教を篤く信じる。

林邑と混同されているのは奇妙だが、林邑を邑心とする版本があり、邑心の原音を伊奢、伊賞のそれと同音とみなして伊奢那城、伊賞那補羅つまり 7 世紀ころの真臘の都であるイーシャーナプラ（サンボール・プレイ・クックの都市遺跡）に同定する説がある〔陳 1986: 421〕。この邑心に関する説の当否はともかく、『旧唐書』真臘伝は冒頭で「崑崙之類」といい、また真臘国は吉蔑（クメール）国と呼ばれるというので、クメール＝真臘を崑崙とみなすことができる。真臘が崑崙諸国中の最大であるとするのは、崑崙が『旧唐書』林邑伝末尾にいうように林邑以南の総称であるとするれば、無理がないといえよう。

さて、慧琳の崑崙語の条は実際には崑崙語ではなく崑崙を説明している。崑崙は色のとても黒い野蛮人、卑賤な食人種で悪鬼羅刹の類とされる。また猛獣調教や潜水に秀でているといった異能があるとされる。これは崑崙人というより崑崙奴の説明というべきであろう。そして崑崙には数種類あってそのひとつが閻蔑であるという。閻蔑＝クメールという同定が正しいとすれば、クメール人は崑崙奴の形質的特徴を持たないのであるから、当然崑崙奴ではありえない。じじつ、閻蔑の条や『旧唐書』真臘伝では崑崙である真臘を（色黒、巻髪を別にすれば）悪鬼

羅刹の類とする記事はないばかりか、閼蔑の条は仏教を篤く信じるというから、いわば文明人の扱いである。慧琳の崑崙語の条では崑崙の説明において悪鬼羅刹イメージをめぐる混乱がある。とりわけクメールをめぐる崑崙語の条と閼蔑の条には明らかに矛盾がある。この混乱、矛盾は崑崙人と崑崙奴を区別しないことから生じていると考えられる。崑崙人を崑崙奴とみなしてしまう混乱は『旧唐書』林邑伝の「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙」にも受け継がれているといえよう。

(4) 悪鬼羅刹か——婆利国と羅刹国

崑崙と崑崙奴の混用に関わるかもしれないこととして、表1の史書の南蛮伝の諸国で卷髮黒身という以上に悪鬼羅刹のイメージをもたせる記述がわずかながらあることを確認しておきたい。それは婆利国とその東にあるという羅刹国である。ただし、いずれも崑崙とは明記されていない。

その一端は表1の『新唐書』婆利伝に表れていて、「俗黒身、朱髮而拳、鷹爪獸牙、穿耳傳瑠（人々は色が黒く、髪は赤くて縮れていて、鷹の爪と獣の牙をもち、耳に孔をあけて耳飾りを付けている）」という。この記事は『新唐書』巻222下環王伝の付伝である婆利伝に書かれているのだが、じつは婆利の東に位置する羅刹の記事が婆利の伝に入り込んだものである。「朱髮」「鷹爪獸牙」は他書の婆利伝に見えず、もっぱら羅刹伝に見える記事である。『通典』巻188の羅刹国伝の全文をあげる。

羅刹国在婆利之東。其人極陋，朱髮黒身，獸牙鷹爪。時与林邑人作市，輒以夜，昼日則掩其面。隋煬帝大業三年，遣使常駿等使赤土国，至羅刹。

羅刹国は婆利の東に位置する。人々の容貌はきわめて醜く、髪が赤くて色が黒く、獣の牙と鷹の爪をしている。時々林邑の人と交易するに、それは夜におこない、日中は顔を覆っている。隋の煬帝は大業三年（607）、常駿などを赤土国に使いに行かせ、羅刹に至った。

「其人極陋」から「掩其面」までは『唐会要』巻99の羅刹国の条、『太平御覧』巻788羅刹国伝、『太平寰宇記』巻177羅刹国伝もほぼ同文である。婆利の位置は東部ジャワに比定して大過ないであろう。バリ島を含んでいた可能性もある。この記事には林邑の交易圏が羅刹まで伸びていること、交易は夜におこなうことその他いくつか興味深い事柄があるが¹³⁾、本稿の論旨と直接の関係はないのでこれ以上立ち入らないことにする。筆者別稿（深見2022）を参照されたい。

羅刹という国名の由来は記されていないが、音訳だとしても他の文字を選ぶこともできるのであり、その面貌から発想した意識の可能性が高いだろう。いずれにせよ、南海には例外的とはいえ、慧琳の悪鬼羅刹イメージに通じるような国も記されているのである¹⁴⁾。またすでに記したようにネグリティ系とおぼしき色黒の人々の存在も示唆されている。

(5) 義浄にみる広狭2種の崑崙

崑崙奴と崑崙の人々は区別すべきであり、卷髮黒身は前者に限られるという浅湫の指摘は、同時代の義浄によって裏付けられる。その『南海寄帰内法伝』巻1の南海諸洲に関する原注に

次の記事がある。義浄は周知のように 671 年広州を発して海路インドに至り、ナーランダーで長年の研鑽の後、中国に直帰せずに 687～694 年の 7 年間室利仏逝（シュリーヴィジャヤ）すなわちスマトラのパレンバンに滞在して訳経と著述に従事した。この間の 692 年帰国する大津師に託して中国にもたらされたのが本書である。南海経験の長い義浄が当時の基軸的港市である室利仏逝において記した貴重な証言である。訳文は宮林訳を参照した〔宮林 2004: 14-15; 王 1995: 17〕。

諸国周囲、或可百里、或数百里、或可百馭。大海雖難計里、商舶慣者准知。良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉。唯此崑崙、頭捲体黒、自余諸国、与神州不殊。赤脚敢曼、摠是其式、広如『南海録』中具述。

これら（南海の）諸国の周囲は、ある場合は百里ばかり、ある場合は数百里、ある場合は百馭ばかりである。大海は距離を測るのが困難であるとはいえ、商船に慣れたものなら准（おおよそ）は知ることができる。良（まこと）に掘倫人が初めて交州・広州にやってきたことが、やがて（南海諸国を）すべて崑崙国と呼ばせることになった。ただこの崑崙（つまり掘倫人）だけが巻き毛で色黒であって、その他の諸国は中国と異ならない。裸足でサロンをまとうのがすべての式（きまり）であり、（そうしたことは）広（あまね）く『南海録』の中でつぶさに述べておいた。

巻髪黒身に関して論旨は明快である。南海諸国が崑崙国と総称されているが、その一部分だけが「頭捲体黒」であり大部分は中国と同じであるという。この論旨に照らして引用中程の「此崑崙」は掘倫をさしている。掘倫人が最初に交州・広州にきたとされるが、このことはここにのみ記され他書に見えないので確認の術がない。義浄は『南海録』において南海の風俗を詳述したというが、残念ながら逸書である。

義浄によれば、崑崙には南海諸洲の総称としての崑崙と、その一部分の巻髪黒身という形質的特徴をもつ崑崙という広狭 2 つの語義があるのである。とすれば、表 1 のように林邑・扶南・真臘を巻髪黒身と見るのは誤解であると指摘しているのと同じことである。

義浄のこの記事に関する研究史を少し確認しておこう。本書は国際的にはタカクス（高楠）の英訳によりよく知られている。タカクスは「良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉」の一文があまり明快でないとして崑崙の語にもとくに注釈を加えているが、「自余諸国、与神州不殊」については特段の解説はない〔Takakusu 1896: 11-12〕¹⁵⁾。

フェランは「良為掘倫」から「摠是其式」までを取り上げ、タカクスが崑崙を Kun-lun (Pulo Condore) と訳したことを問題視しコンドル島ではないことを論じるが、「自余諸国、与神州不殊」にはとくに注目しない〔Ferrand 1919 Mars-Avril: 243-244〕。

桑田は上記引用のうち「良為掘倫初至交広、遂使摠喚崑崙国焉」のみを取りあげ、これを崑崙という語の起源に関する一説として論じる〔桑田 1993a: 68-70〕。そして「義浄が崑崙と云ふ総称は掘倫州即ち Pulo Condore の名から起って居ると云って居る」という〔桑田 1993c: 178〕。これは「頭捲体黒」に関する義浄の指摘を崑崙起源論にねじ曲げるものであり容認できない。そして桑田は下記の松田論文を参照した上でなお義浄の「唯此崑崙、頭捲体黒、自余諸国、与

神州不殊」にまったく触れていない〔桑田 1993c〕。

松田は桑田が無視した部分を含めて「諸国周囲」から「摠是其式」までを引用したうえで、次のように述べる〔松田 1987: 263-264〕。

一見、南海諸洲を以て崑崙国と総喚したかに思われるが、そうではない。神洲（シナ）と似た諸国の間に「頭捲体黒」なる一群があり、それを崑崙と称したというのであって、旧唐書林邑伝の「自林邑已南、皆卷髮黒身、通号為崑崙」と全く同趣である。

松田の論文には当時の常として日本語訳がついていないので、この原文をどのように読んだのかわからないが、いずれにせよ、『旧唐書』林邑伝の一文と同趣であるというから、義浄の趣旨を取り違えているというべきである。そして松田は「いうまでもなく卷髮黒身はインドネシア或はマレーシア系の特色である」との前提のもとに崑崙をマレー系の人々をさすと断じる¹⁶⁾。

かくして義浄の指摘は史書に反映されず、後世の学者にも看過され、崑崙は卷髮黒身であるという誤解はおもに『旧唐書』林邑伝をとおして現在まで受け継がれてきた。

(6) 義浄の南海について

義浄のいう南海の範囲について確認しておきたい。周知のように義浄は『南海寄帰内法伝』の先の引用の直前の原注において次のように南海諸洲を列挙している。

従西数之、有婆魯師洲、末羅遊洲、即今尸利仏逝国是、莫訶信洲、訶陵洲、坦坦洲、盆盆洲、婆里洲、掘倫洲、仏逝補羅洲、阿善洲、末迦漫洲。又有小洲、不能具録也。

西からこれ（南海諸洲）を数えるなら、婆魯師洲、末羅遊洲、すなわち現在の尸利仏逝国である、莫訶信洲、訶陵洲、坦坦洲、盆盆洲、婆里洲、掘倫洲、仏逝補羅洲、阿善洲、末迦漫洲がある。また小さい島があるのだが、すべてあげることはできない。

これら地名の位置は参照しうる史料が少ないため比定困難なものが多い。ここでは異説もあるが次のようにしておきたい。婆魯師はスマトラ北部のバルス、末羅遊はスマトラ南部のマラユ（位置はパレンバン）、莫訶信は不明、訶陵と坦坦は中部ジャワ、盆盆は不明、婆里は前記の婆利と同じで東部ジャワ、掘倫については次に述べる。仏逝補羅、阿善、末迦漫は不明。概括的に見てスマトラからジャワを経てインドネシア東部におよぶといえよう。

掘倫は『南海寄帰内法伝』で3回述べられている（1回は堀淪）。第一に、上記の崑崙に関する混乱の元になったという掘倫、第二にこの南海諸洲の列挙のなかであり、その位置はジャワ島またはバリ島より東に求めることになる。第三は巻3第27章の先体病源の条において丁香（丁香子、クローブ）が掘淪国に生じるとする。丁香の産地は周知のごとく18世紀までマルク諸島に限られていた。かくして、掘倫はマルク諸島ないしその近辺の巻き毛で色黒の人々ならば、パプア系ないしメラネシア系が考えられるが詳細は不明である。

ここで義浄における南海概念を確認しておく必要がある。義浄は上の崑崙に関する引用に続く部分で、跋南国つまり元の扶南の位置を「瞻部南隅、非海洲也（瞻部洲の南の隅であって島

ではない)」と述べている。また『南海寄帰内法伝』の別の箇所（巻2第10章）で瞻部洲すなわちインドの地理的範囲を、莫訶菩提（Mahābodhiつまりボードガヤーにある大覚寺）を中心として四方を説明するなかで、東は臨邑（林邑、チャンパー）に至るまでという〔宮林2004: 122; 王1995: 91〕¹⁷⁾。義浄の地理観では林邑と扶南はインドであって南海ではないのである。今日の東南アジアを大陸部と島嶼部に分ける地理観に似ている¹⁸⁾。一般にはたとえば正史の南蛮伝の諸国が南海とみなされていたであろうから¹⁹⁾、林邑・扶南・真臘など大陸部諸国も南海に属する。義浄の地理観における南海は特異である。

ここで問題は崑崙が大陸部にも存在することである。すでに述べたように真臘は崑崙であり、崑崙諸国の中で最大とされる²⁰⁾。また貞観十二年(638)に朝貢してきた独和羅国(ドヴァーラヴァティー)を「南方荒外崑崙之類(南方の僻地の崑崙の類である)」とよぶ史料がある(『冊府元龜』巻970)。大陸部のクメール系を中心とする真臘やモン系を中心とする独和羅も崑崙であるから、崑崙の範囲は大陸部も含んでいるのである。義浄のいう南海は島嶼部に限定されるため前項(5)で彼がいう崑崙も島嶼部に限定されることになるが、一般には南海と崑崙は大陸部の一部を含んでいる。崑崙は今日の用語では海域東南アジアがふさわしいという示唆が得られる。

小結

南海諸国の人々を卷髪黒身とするのは史書の誤りである。彼らはオーストロネシア系(義浄のいう南海諸洲)やオーストロアジア系(真臘や独和羅)の人々であり、中国人と同じ直髪褐身である。卷髪黒身とみなす誤りが生じた要因としてネグリト系の人々やジャワ島より東方の悪鬼羅刹イメージの人々の存在があるのかもしれないが詳細は不明である。この誤りの背後に崑崙と崑崙奴の混用がある。崑崙からもたらされた奴隷である崑崙奴が崑崙一般と混同されたのであり、この混乱は鬼のような形象の崑崙奴のイメージが文学作品や美術作品で愛好されたために増幅されたのである。

『旧唐書』林邑伝末尾の「自林邑以南、皆卷髪黒身、通号為崑崙」は「皆卷髪黒身」を除外するなら、「林邑以南は崑崙と総称する」というのである。この一文はその前の林邑伝の文章と脈絡がなく、むしろ林邑に続く婆利、盤盤、真臘、陀洹、訶陵、墮和羅、墮婆登という南蛮の7国の伝の導入文のように見える。とすれば、まさに崑崙は南蛮と同義ということになる。なお『旧唐書』真臘伝は真臘を「崑崙之類(崑崙の類)」といい、また「風俗被服与林邑同(風俗や被服は林邑と同じ)」というので、林邑も崑崙に含まれると理解できる。かくして、崑崙は南蛮(南海)と同義の広域地名であり、その範囲はおおむねフェランのdと重なるが、個々の崑崙国の集合というよりはその全体の総称である。今日の用語では海域東南アジアに近いであろう。

2 崑崙の諸相

崑崙奴の呪縛から解放されて崑崙およびその異字と思われるものが史料にどのように登場するか検討し、その実相に迫ってみたい。史料に記される崑崙は、他に手がかりがないと海域東南アジアのどの国のことかわからないのだが、東南アジア史の再構成の素材としてその実態を確認しておく必要がある。

(1) 骨崙国の水時計とサンスクリット語——中国より優れた仏教国

まずは義浄を続ける。義浄は『南海寄帰内法伝』では既述の崑崙、掘倫のほか、骨崙を2回述べている。その巻3第30章の旋右観時（右繞論と計時法）では、インドの諸寺の漏水器（水時計）を解説した後に、次のように骨崙国の漏水器を紹介している〔宮林 2004: 312; 王 1995: 170〕。

若南海骨崙国、則銅釜盛水、穿孔下流、水尽之時、即便打鼓。一尽一打、四椎至中、齐暮還然。夜同斯八、惣成十六。亦是国王所施。

南海の骨崙国の如きでは、銅釜に水を盛り、孔を穿って下に流し、水が尽きた時に太鼓を打つ。1度尽きれば1度打ち、4回打つと南中になる。（午後）日の暮れるまでまた（午前中と）同様である。夜も（昼と）同じで8回であり、全部で16回である。（インドと同じく）国王の奉納したものである。

義浄は日時計のように天候に左右されずに正確に時を知ることができて出家者の生活規律に有益であるという水時計の長所を述べ、季節による水量の調節には高度な技術の必要なことなどを紹介する。そして彼はすべての寺に水時計を置くインドや骨崙国の優位性を主張している。インド以外で取りあげているのは骨崙国のみである。この骨崙国は具体的には彼が7年間滞在したシュリーヴィジャヤをさすのかもしれない。

次は同書の巻4第34章の西方学法（サンスクリット語文法学）の条の割注である〔宮林 2004: 343-344; 王 1995: 187〕。

然而骨崙速利、尚能摠読梵經、豈況天府神州而不談其本說。故西方讚云、曼殊室利現在并州、人皆有福、理應欽讚、其文既広、此不繁録。

ところで、骨崙・速利でさえ、みなサンスクリット語の經を読むことができる。いわんや天府神州（中国）にしてどうしてその（ブッダの）本来の説を（梵語で）談じないのであろうか。故（ことさら）にインドでも讃歎して言っている。「曼殊室利は現に并州にいませり、（中国の）人はみな福があり、理として欽讚すべし」と。その（中国讃歎の）文は既（みな）大きいので、ここには詳しく記さない。

速利は中央ユーラシアの商業民として有名なソグド Sogd とされる〔宮林 2004: 123, 136〕。論旨は明快で、中国人もサンスクリット語で經典を理解すべきであると主張している。南蛮の骨崙や西戎の速利にも劣るという。

仏僧義浄はこのように骨崙の中国に対する優位性を認識していた。これは義浄がシュリーヴィジャヤの仏教教学の内容や僧侶の規範がインドと同じと強調するのと符合する。すなわち、彼が訳した『根本説一切有部百一羯磨』巻5の割注の中で次のようにいう。

此仏逝廓下、僧衆千余、學問為懷、並多行鉢。所有尋讀、乃与中国不殊、沙門軌儀、悉皆無別。若其唐僧欲向西方為聽讀者、停斯一二載、習其法式、方進中天、亦是佳也。

シュリーヴィジャヤの都では僧侶が千人以上もいて学問にいそしみ、また托鉢にでる者が多い。彼らが究めようとする書物はすべて中国（インド）のものと異ならないし、出家者の儀式のやり方もまたすべて同じである。唐の僧侶で西方（インド）へ行行って学問をしようとする者がいれば、そこに1、2年滞在して、その仏法の方式を学んだ後に初めて中天（中インド）に進むのもよいことである。

義浄の他にもここに多年滞在する中国の僧侶がいたこと、彼らがサンスクリット語のみならず崑崙語にも通曉したことは次項に見るとおりである。なお『唐大和上東征伝』によれば、渡日に成功した鑑真に従ってきた24人のなかに軍法力という名の崑崙国人が含まれており、その背景にはおそらく崑崙の仏教教学の水準の高さがあるのだろう。

（2）崑崙語——海域東南アジアの共通語

『南海寄帰内法伝』と同じく692年に中国にもたらされた義浄『大唐西域求法高僧伝』には崑崙や掘倫、骨崙の語は見られないが、崑崙語・崑崙音が計3回述べられている。

その運期伝に次のようにいう〔足立1942: 73-74〕。

運期師、交州人也。与曇潤同遊。仗智賢受具。旋廻南海、十有余年。善崑崙音、頗知梵語。後便帰俗、住室利仏逝国、于今現在。既而往復宏波、伝経帝里。布未曾教斯人之力。年三十可。

運期師は交州の人である。曇潤と同遊し、智賢に従って受具する。南海に旋回すること10年あまり。崑崙音に通曉し、梵語をたいへんよく知っている。後に還俗して室利仏逝国に住み、今もそこにいる。すでに宏波を往復して、経を天子のもとに伝えた。未曾教を布くはこの人の力である。年齢は30ばかり。

運期はインドには至らなかったらしい。10年以上を南海各地に過ごし、崑崙語とサンスクリット語ともに通曉し、いまは還俗してシュリーヴィジャヤに住んでいるという。少なくとも1度は中国を往復している。なお、智賢は訶陵つまりジャワの人であることは同じ『大唐西域求法高僧伝』の会寧伝に記されている〔足立1942: 69-71〕。

大津伝に次のようにいう〔足立1942: 203-205〕。

遂以永淳二年（683）振錫南海。（中略）汎舶月余、達尸利仏逝洲。停斯多載。解崑崙語、頗習梵書。（中略）遂以天授三年五月十五日、附舶而向長安矣。今附訳雑経論十卷、南海寄帰内伝四卷、西域求法高僧伝兩卷。

ついに永淳二年（683）に錫を南海に振るう。（中略）舶を汎べること月余にして尸利仏逝洲に達する。ここに多年滞在し、崑崙語を解して、おおいに梵書を学ぶ。（中略）遂に天授三年（692）五月十五日に舶に乗り長安に向かう。いま訳雑経論十卷、南海寄帰内伝四卷、西域求法高僧伝兩卷を託す。

大津もインドには至らなかったらしい。シュリーヴィジャヤに10年近く滞在し、崑崙語とサンスクリット語に通じるようになった。692年の帰国に際して義浄から訳経や著書『南海寄帰内法伝』『大唐西域求法高僧伝』を託されている。

貞固伝は次のようにいう〔足立1942: 238-239〕。

又貞固弟子一人。俗姓孟、名懷業、梵号僧伽提婆。(中略)見師主懷弘法之念、即有隨行之心。割愛抽悲投命溟渤、至仏逝国。解崑崙語、頗学梵書、誦俱舍論偈。

また貞固は弟子の一人である。俗姓は孟、名は懷業、梵号は僧伽提婆という。(中略)師匠に会って仏法を広める志を抱き、隨行する気になった。愛を割き、悲を抽き、命を溟渤に投じて、仏逝国に至った。崑崙語を解し、頗る梵書を学び、俱舍論偈を誦する。

貞固は義浄が689年文具と助手を求めて広州まで一時帰国した際にシュリーヴィジャヤに連れてきた4人の弟子の1人である。やはり崑崙語を解しサンスクリット語を学ぶという。

この義浄のいう崑崙語は通説にいうようにムラユ語(マレー語、インドネシア語)のことである。これはいわゆるシュリーヴィジャヤ碑文の言語であり、それはパレンバンを中心にスマトラ南部で、一定の長さのあるものが少なくとも9点見ついている。うち3点には682、684、686年の紀年があり、その他も文字学的に同時期のものとされる〔深見2006: 58-59〕。すなわち、まさに義浄と同時代のものである。大津や貞固は広州からシュリーヴィジャヤに直航しており、その後に崑崙語を解するようになったが、運期の場合は南海各地を動いている間に通曉するようになったらしく、これは崑崙語が当時の海域東南アジアで共通語であったことを示すものであろう。ムラユ語刻文はスマトラ南部だけでなく中部ジャワでも7世紀から9世紀のものが少なくとも6点知られている〔Boechari 2012: 351-352〕。またフィリピンのマニラでも900年のムラユ語の銅板刻文が見ついている〔ポストマ1994〕。

『隋書』巻81の流求国伝によれば、隋の610年の流求遠征に南方諸国の人が従軍し、そのなかの崑崙人が流求との通訳を務めた。

初(陳)稜將南方諸国人從軍、有崑崙人頗解其語、遣人慰諭之。流求不從。

初め陳稜は、南方諸国の人の従軍するなかに現地の言葉がよくできる崑崙人がいて、派遣してなだめ諭そうとした。(しかし)流求は従わなかった。

この流求は沖縄ではなく台湾であり〔桑田1993a: 69〕、その言語はムラユ語と同じオーストロネシア語族なので相互理解が比較的容易だったのであろう。台湾の言語がよくできるというのであるから、7世紀初めまでにオーストロネシア系の崑崙人が台湾で活発な交易活動を行っていたことがわかる。

崑崙語はムラユ語以外に、状況次第では真臘のクメール語や墮和羅のモン語をさすこともありうると思われるが、筆者はそのような事例を知らない。またムラユ語が海域東南アジアの共通語として広く用いられていたとすると、真臘や独和羅でも用いられた可能性があるが、カンボジアやタイの刻文にはその証拠は知られていないようである。

(3) 崑崙の海商と広州

以下に義浄から離れて中国、具体的には広州にきた崑崙を取りあげる。

前項の最後で見た崑崙人がどこで隋軍に従軍したか不明だが、崑崙人の活動は7世紀初めまでに広東、福建に及んでいたと推測できる。つづいて7世紀後半から8世紀に崑崙の海商が広州の繁栄に貢献していることを示す史料がある。

「広州都督嶺南按察五府経略使宋公遺愛碑頌」なる碑文がある。広州都督などを務めた宋公つまり宋璟の離任に際して、その徳を慕う広州の人々が建てたものである²¹⁾。宋璟は『旧唐書』巻96、『新唐書』巻124に伝があり、清官として知られ治績もあったという〔中村1917(1):46;(2):47-48〕。『資治通鑑』巻212にも開元六年(718)正月に「広州吏民、為宋璟、立遺愛碑(広州の吏民が宋璟のために遺愛碑を立てた)」ことへの言及がある。都督というまでもなく広域の行政権と軍事権を兼務する官つまり広東地方の最高権力者である。広州の繁栄と宋璟の治績を讃える碑文に続く頌詩の中に崑崙が登場する(碑文の著者張説の『張燕公集』巻7から引用する)。

崑崙宝兮西海財。幾万里兮歲一來。舟如島兮貨為台。市無欺兮路無盜。

崑崙の宝と西海の財が幾万里を越えて毎年一度やってくる。舟は大きな島のように(堂々とやってきて)、商品が台をなす(店に溢れる)。取引に騙しあいはなく、道に盗っ人はいない。

崑崙の宝が西海の財と対をなしている。崑崙の船と西域の船が毎年運んでくる商品が町にあふれて広州の町が繁栄と太平を謳歌する様が表されている。この崑崙はもちろん個別の国ではなく南海と同義の総称である。

広州都督が清官ばかりだったわけではなく、むしろ外国商人がつねづね貪官汚吏の苛斂誅求にさらされたことはすでに様々に先学の指摘するところである〔桑原1989; 中村1917; 和田1961〕。その挙げ句、あまりの横暴に堪えかねた崑崙が広州都督を殺すという大事件が起こった。宋璟離任の30年ほど前、光宅元年(684)のことである。『新唐書』本紀(巻4)は簡潔に記している。

七月戊午、広州崑崙殺其都督路元叡。

七月戊午、広州において崑崙がその都督の路元叡を殺した。

『資治通鑑』巻203に詳しい説明がある。

秋七月戊午、広州都督路元叡、為崑崙所殺。元叡闇懦、僚属恣横、有商舶至、僚属侵漁不已、商胡訴於元叡、元叡索枷、欲繫治之。群胡怒、有崑崙袖劍直登聽事、殺元叡及左右十余人而去、無敢近者、登舟入海、追之不及。

秋七月戊午、広州都督の路元叡が崑崙に殺された。元叡は愚かで気が弱く、属僚たちがほしいままに悪事を働く。商船がやってくると、属僚たちの不法なむさぼりの止むことがない。外国商人たちは元叡に訴えたが、元叡は彼らを縛り上げて投獄しようとした。怒っ

た外国人がつめかけ、その中から崑崙人が袖に剣を隠し持って役所に乗りこみ、元叡と左右の10人余りを殺して立ち去った。あえて近づこうとする者はなく、舟に乗って海に出てしまい、追跡したが追いつけなかった。

小説「崑崙奴」の磨勒の活躍を彷彿させる活劇が展開されたようである²²⁾。

広州の外国商人たちはおおいに溜飲を下げたことであろう。その後彼らとくに崑崙人に対する処罰、弾圧があったかと想像されるが筆者にはそのような史料は不明である〔中村(1): 44-45; 和田1961: 1052 参照〕。『資治通鑑』では非は全面的に都督路元叡にあるとされており、そして後任の都督には清官として名高い王方慶が任命されているので報復はさほど厳しくなかったかもしれない。『旧唐書』巻89 王方慶伝も次のように述べて、路元叡(叡)の非を指摘する。

永淳中、累遷太僕少卿。則天臨朝、拜広州都督。広州地際南海、毎歳有崑崙、乗舶以珍物与中国交市。旧都督路元叡、冒求其貨、崑崙懷刃殺之。方慶在任数載、秋毫不犯。(中略)。当時議者、以為有唐以来治広州者無出方慶之右。

永淳(682-683)中、累遷して太僕少卿となった。則天が朝に臨み、広州都督を拜命した。広州の地は南海に面し、毎歳崑崙人が船に乗ってきて、珍物をもたらしで交易する。旧都督の路元叡がその商品をむさぼり求めたため、崑崙人が刃を隠し持ち元叡を殺した。方慶は数年におよぶ任期中にはほんの少しも悪事を働かなかった。(中略)。当時、唐の建国以来広州を治める者で方慶の右に出るものはいないと評判だった。

この王方慶伝でも毎年船に乗ってやってくる崑崙人が広州の繁栄の源であることが記されている。

船に乗って広州にやってくるのはもちろん崑崙だけではない。元開『唐大和上東征伝』が、日本渡航を企てた鑑真一行がはるか海南島に漂着した後の750年に広州で見た様子を次のように伝えているのが参考になる。

江中有婆羅門・波斯・崑崙等舶、不知其数。並載香藥珍宝、積載如山。舶深六七丈。師子国・大石国・骨唐国・白蛮・赤蛮等往来居住、種類極多。〔後略〕

川の中に婆羅門(インド)・波斯(ペルシャ)・崑崙等の船舶が無数にあり、みな香藥・珍宝を山のように積載している。その船舶は深さは六、七丈もある。師子国(セイロン)・大石国(=大食、アラブ)・骨唐国・白蛮・赤蛮²³⁾等が往来居住していて、その種類がたいへん多い。

南海交易の中心港市として繁栄する広州の町の様子が語られていて、それに崑崙舶も関わっていることがわかる。

(4) 崑崙舶

広州にくる外国船に婆羅門舶・波斯舶とならんで崑崙舶があがっている。文脈からすれば師

子船や大食船もあったことだろう。それらの多寡や優劣について手がかりは限られている。そのなかで8世紀末ころの広州の様子を伝えるといわれる李肇『唐国史補』巻下によれば師子国船が最も大きい。

南海船、外国船也。毎歳至安南・広州。師子国船最大、梯而上下数丈。

南海の船は外国船である。毎年安南（交州、ハノイ）や広州にやってくる。師子国の船が最大で、梯子で数丈を昇り降りする。

引用の冒頭は、南海を往来するのは外国の船であるという。中国の航洋船はまだ登場していないのである。師子国の船が最大という。唐代の丈は3メートル余ということなので、船倉は2丈で6メートル、3丈で9メートルをこえる深さがあることになる。

この少し前の天宝二年（743）、高名な密教僧の不空が玄宗の勅書を奉じて僧俗21人を従えて広州から師子国と五天竺に向かったが〔藤善 2013〕、その乗船は賛寧『宋高僧伝』巻1不空伝などによれば崑崙船であった。崑崙船は中国だけでなくインド方面でも活動していることがわかる²⁴⁾。この国家使節の船が崑崙船であったのが仮に偶然であったとしても、崑崙船が他の外洋船（天竺船・師子国船・大食船・波斯船など）より少なくとも劣っていないことの証左であろう。このことは次の史料からもうかがえる。

崑崙船の構造をうかがわせる史料がある。先にもあげた慧琳『一切経音義』の巻61の破船の条である〔神田 1931〕〔ニーダム 1981: 100-101 参照〕。

破船。下音白、司馬彪注莊子云、海中大船曰船。広雅、船海舟也。入水六十尺、駟使運載千余人、除貨物。亦曰崑崙船。運動此船多骨論為水匠。用椰子皮為索連縛、葛覽糖灌、塞令水不入。不用釘鑠、恐鉄熱火生。梲木枋而作之、板薄恐破。長数里、前後三節、張帆使風、亦非人力能動也。

破船。第2字は白と発音する。司馬彪は『莊子』の注で、「海船の大きなものを船という」と述べる。『広雅』（辞典）によれば、船は航洋船である。水中に60尺（？）沈む。速くて、積み荷の他に1000人以上を乗せる。崑崙船とも呼ばれる。この船を動かすにはたいいてい骨論人を船長にしている。ヤシの外皮（の繊維）を紐にして（船の各部を）縛ってつなぎ、（隙間は）葛覽の糖でふさいで水が入らないようにする。釘やかすがいをを用いない。鉄が熱して火事になるのを畏れるからである。側板を張り重ねて作る。板が薄いために船が壊れるのを恐れるからである。長さは数里（？）、前後に3つに分割されている。帆を張って風を用い、人力で動かすことができるものではない。

破船なる語の解説であるが、実際には船とくに崑崙船の説明になっている。航洋船がすべて崑崙船ではないはずだが、外国船のなかで崑崙船がとくに多かったのであろうか。いずれにせよ、崑崙船のいくつかの特徴が明らかになる。

大型帆船である。貨物の他に1000人以上を乗せるという。ただし原文の「六十尺」は誤りと思われる。六十尺は不自然で、六丈とすればよいし、20メートル近いのは深すぎるであろう。「六七

尺」なら2メートルほどである。長さについて「数里」はあまりに長すぎるので、何らかの間違いが含まれているであろう。

縫合船である。釘やかすがいなど鉄を用いないのは火事を避けるためという。板を紐で縛り、隙間は糖でふさぐ。なお「椰子皮」は次項参照、また「葛覧」は次項の橄欖の誤りまたは同義語と思われる。

隔壁がある。「前後三節」というから2枚の隔壁があったと考えることができる。後に登場するジャンク船の特徴とされる隔壁の原型かもしれない。「櫓木枋而作之」もジャンク船の特徴である。

崑崙人が動かす。この船を動かすのは骨崑（崑崙の異字）である。「水匠」を訳文では船長の意味で解したが乗組員の意味かもしれない。船大工たちも崑崙だっただろう。

この史料から、8世紀後半ないし9世紀初めの中国人に縫合船の概略が知られていたことがわかる。それが崑崙船と呼ばれており、中国人僧侶が崑崙船をとおして縫合船の知見を得たのは、彼らの南海往来がとくに崑崙船と関係が深かったからかもしれない。

(5) 中国人に縫合船を教えた

少し時代が下って9世紀末ころの広州で縫合船が建造されている目撃情報がある。そのころ広州に滞在した劉恂の見聞録『嶺表録異』である、その巻上の賈人船の条にいう²⁵⁾。

賈人船不用鉄釘、只使枕榔鬚繫縛。以橄欖糖泥之、糖乾甚堅、入水如漆也。

商人の船は鉄釘を用いず、ただ枕榔の鬚を使って束ねて繋ぎ、橄欖の糖でこれに塗りこむ。その糖は乾くと非常に堅くなり、水に入れるとちょうど漆のようである。

広州で建造する商船は鉄釘を用いず、枕榔の紐で縛り、橄欖の糖で隙間を埋めるという。枕榔と橄欖については同書の巻中に枕榔樹の条、橄欖の条がある。

枕榔樹。枝葉並蕃茂、与棗檳榔等小異。然葉下有鬚、如羆馬尾。広人採之、以織巾着子。其鬚尤宜鹹水浸漬、即羆脹而靱。故人以此縛舶、不用釘線。

枕榔樹。枝葉がまとまって繁茂するのは棗や檳榔などに似る。しかし葉の下に粗い馬の尾のような鬚がある。広州の人はこれを採取して織り頭巾を作る。その鬚の最も都合がよいのは潮水に漬けると大きく膨れてしなやかなことである。それゆえ人々はこれで船を縛り釘や針金を用いない。

橄欖。(中略)樹枝節上、生脂膏、如桃膠。南人採之、和其皮葉煎之、調如黒錫。謂之橄欖糖。用泥船損、乾後堅于膠漆、著水益乾耳。

橄欖。(中略)枝の節に桃の樹から出るヤニのような樹脂が生じる。華南の人々はこれを採取して、この樹の皮や葉と一緒に煮詰めてタール状のものを作る。これを橄欖糖とよぶ。船の損傷箇所に詰めると、乾いたら膠や漆より丈夫であり、水に漬かると水をはじく。

枕榔はシュロの一種かと思われる。他の用途もあるがとくに縫合船に用いられることが記されている。先の慧琳の崑崙船の説明では「椰子皮」の紐が用いられる。椰子皮の紐はココヤシの

実の中果皮の繊維を搓ったものと思われるが、サトウヤシの幹の繊維ならばシュロとよく似ている。橄欖の糖についてはその作り方と船体の充填剤に用いることが記されている。慧琳の崑崙舶の説明で葛覽糖とされるのとおそらく同じものであろう。

枕榔の紐を用いるのは「広人」つまり広州の人であり、橄欖の糖を用いるのは「南人」つまり華南の人あるいは嶺南の人である。縫合船の造船技術が広州の中国人に移転されたのである。桑原隲蔵は劉恂の見たものを当初シーラーフ船と考えたが〔桑原 1989: 134〕、後の論文で見解を変えて「南人」つまり華南の中国人の造船術であるとする。その根拠は第一に、劉恂が広州にいたころシーラーフ船は来航せず、第二に、同じ『嶺表録異』が枕榔樹の髭と橄欖糖の利用を「南人」²⁶⁾の技術としていることである〔桑原 1968 3: 504-505〕。桑原は技術移転によるものか独自発生か不明とする。他方和田久徳は中国側が西アジアの造船術を受容したものにちがいないと断じる〔和田 1985: 8〕。和田が移転元を西アジアとする理由は不明である。上記（4）項の崑崙舶の説明も踏まえて崑崙舶の可能性が大きいというべきであろう²⁷⁾。

おわりに

崑崙の人々は形質的に直髪褐身であり、彼らを卷髪黒身とするのは史料の誤りである。この誤りが生じた原因はよくわからないが、その背景には崑崙と崑崙奴の混同がある。この混同は、唐代に鬼のような形象の崑崙奴のイメージが文学作品や美術作品で愛好されたため増幅されたのであった。義浄の指摘は看過され、この誤りはおもに『旧唐書』林邑伝の一文によって今日まで維持されてきた。

崑崙奴や悪鬼羅刹イメージの呪縛から離れて唐代南海の崑崙を見るならば、崑崙は海域東南アジアの国々、人々をさす総称である。史料には総称である崑崙が用いられる場合と真臘や室利仏逝など個別の国名が用いられる場合がある。本稿では総称の崑崙を検討した。彼らは仏教世界では中国以上の文明を有し、ムラユ語という共通語を用い、造船と航海に秀で、大型船を駆使して各地に富と繁栄をもたらす海商であった。広州都督らを殺した崑崙のように武術に秀でた者もいた。崑崙舶の活動は中国にもインドにも及んでいた。彼らの船は縫合船であった。南海を歴遊する中国人僧侶が崑崙舶に乗ることも多かったようであり、広州の中国人に縫合船の造船術を教えたのは崑崙人の可能性が高い。

こうして真臘や室利仏逝など南海諸国の個別の国ごとの記述からは見えない海域東南アジアの崑崙の姿が浮かんできた。唐代には崑崙という語で海域東南アジアがひとつの世界として把握されていたことがわかる。このことは、海域東南アジアの各地域を個別にのみ捉えるのではなく、海域東南アジアをひとつの歴史的世界として認識する必要性あるいは根拠を提示するものである。

今後の課題としてさしあたり3点述べておきたい。第一に唐代の崑崙に関する史料のいっそうの収集と分析である。第二に総称の崑崙と個別の国との関係をどのように捉え、海域東南アジア史像をどのように描くか検討する必要があるだろう。そして、崑崙の活躍は次の時代に継続されるかどうかである。

文献

漢籍（正史など通有のものは除く）

『大正新修大藏經』100巻、大蔵出版、1924-1934年

慧皎『高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2059

慧琳『一切経音義』、『大正新修大藏經』巻54、No.2066

道宣『続高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2060

義浄『大唐西域求法高僧伝』、『大正新修大藏經』巻51、No.2066（足立1942参照）

義浄『南海寄帰内法伝』、『大正新修大藏經』巻54、No.2125（宮林2004、王1995参照）

義浄訳『根本説一切有部百一羯磨』、『大正新修大藏經』巻24、No.1453

元開（淡海三船）『唐大和上東征伝』、『大正新修大藏經』巻51、No.2089

賛寧『宋高僧伝』、『大正新修大藏經』巻50、No.2061

李肇『唐国史補』3巻、上海古籍出版社、1957年

劉恂『嶺表録異』3巻、芸文印書館、1969年（百部叢書）

張説『張燕公集』25巻、5分冊、芸文印書館、1969年（百部叢書）

研究

浅湫毅1993「薬師寺金堂本尊台座の異形像について」『佛教藝術』208: 53-71.

浅湫毅1996「伎楽面の崑崙をめぐり一考察」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』539: 4-19.

足立喜六訳注1942『大唐西域求法高僧伝』岩波書店

生田滋2004「海域東南アジア史研究の回顧と展望」『東洋史研究』63-3: 132-143.

石田幹之助1945『南海に関する支那史料』生活社

伊東利勝2001「綿布と旭日銀貨——ピュー、ドヴァーラヴァティ、扶南」『岩波講座東南アジア史1』岩波書店：199-226.

神田喜一郎1931「崑崙舶」『南方土俗』1-2: 127-128.

黒田真美子2006「崑崙奴 裴綱撰」黒田真美子『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他』明治書院：436-451.

桑田六郎1993a「南洋崑崙考」（原著1934）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：63-72.

桑田六郎1993b「崑崙奴と僧祇奴」（原著1939）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：107-110.

桑田六郎1993c「日南、林邑に就いて」（原著1942）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院：151-181.

桑原隲蔵1968『桑原隲蔵全集』5巻、岩波書店

桑原隲蔵1989『蒲壽庚の事績』（原著1935）平凡社（東洋文庫）

駒井義明1932「崑崙考」『歴史地理』59-4: 86-92.

中村久四郎1917「唐時代の広東（1）-（4）」『史学雑誌』28、3-6: (1)28-3: 36-52; (2)28-4: 28-48; (3)28-5: 67-75; (4)28-6: 1-24.

ニーダム、ジョセフ著、坂本賢三他訳1981『中国の科学と文明 第11巻 航海技術』思索社

深見純生2006「バレンバン再考——1400年の都市」東南アジア考古学会編『東南アジア考古学会研究報告』4: 57-71.

深見純生2016「南海の崑崙再考」深見純生編『東南アジア古代史の複合的研究』桃山学院大学総合研究所（科研報告書）：13-25

深見純生2019「七世紀の東西回廊を行く——玄奘・那提・義浄——」肥塚隆編『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版：63-88.

藤善真澄（訳注）1991『諸蕃志』関西大学出版部

藤善真澄2013「金剛智・不空渡天行釈疑」藤善真澄『中国仏教史研究——隋唐仏教への視角』法蔵館：369-384.

ポストマ、アントン著、小川英文訳1994「ラグナ銅板の発見」宮本勝・寺田勇文編『アジア読本 フィリピン』河出書房新社：179-184.

松田寿男1987「崑崙国攷」（原著1941）松田寿男『松田寿男著作集第四巻』六興出版：251-275.

宮林昭彦、加藤栄司訳2004『現代語訳 南海寄帰内法伝——七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館

- 家島彦一 1993『海が創る文明』朝日新聞社
- 家島彦一（訳注）2007『中国とインドの諸情報』2巻、平凡社（東洋文庫）
- 和田久徳 1961「唐代における市舶使の創置」『和田博士古稀記念東洋史論叢』講談社：1051-1062.
- 和田久徳 1985「前近代アジアの海上交通」『南島』5: 1-19.
- 陳佳榮・謝方・陸峻嶺 1986『古代南海地名彙積』中華書局
- 費瑯（Ferrand）著、馮承鈞訳 1931『崑崙及南海古代航行考』商務印書館
- 王邦維（校注）1995 義浄原著『南海寄帰内法伝』中華書局
- Boechari 2012: “Preliminary Report on the Discovery of an Old Malay Inscription at Sojomerto”, Boechari, *Melacak Sejarah Kuno: Indonesia Lewat Prasasti*, Jakarta: 349-360.
- Ferrand, G. 1919: “Le K’ouen-louen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du sud”, *Journal Asiatique*, Mars-Avril, 1919: 239-333; Mai-Juin, 1919: 431-492; Juillet-Août, 1919: 5-68; Sept-Oct., 1919: 201-241.
- Reid, Anthony 1993: *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume Two : Expansion and Crisis*, Yale University Press.
- Stein, R. A. 1947: “Le Lin-yi: Sa localisation, sa contribution à la formation du Champa et ses liens avec la Chine”, *Han-hiue: Bulletin du Centre d’Études Sinologiques de Pékin*, 2, 1-3: 1-476.
- Takakusu, J. (高楠順次郎) tr. 1896: *A Record of the Buddhist Religion as Practiced in India and the Malay Archipelago (A.D. 671-695)*, Oxford.
- Yule, Henry and A. C. Burnell, New Ed. By William Crooke 1969: *Hobson-Jobson A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*, London.

注

- 1) 本稿は旧稿「南海の崑崙再考」(深見 2016) を大幅に加筆修正したものである。旧稿にご意見いただいた方々に感謝申し上げる。とりわけ名古屋大学大学院東洋史研究室の林謙一郎教授には『蛮書』の崑崙（「はじめに」で取りあげるフェランの e）や広州都督宋璟の碑文などについて貴重なご教示をいただいた。
- 2) フェラン論文については石田幹之助の解説、松田寿男の研究史略説、馮承鈞による抄訳を参照〔石田 1945: 90-93; 松田 1987: 252-254; 費瑯 1931〕。フェランが取りあげていない史料もあり、フェランの訳文に誤りがあることは桑田六郎が指摘している〔桑田 1993a〕。
- 3) 林邑の民俗学的、言語学的側面についてのスタインの論文〔Stein 1947〕も崑崙に言及するが、唐代の崑崙と直接関係しないので本稿の枠外である。
- 4) 南海関係の漢籍に造詣の深い桑原隲蔵は「この記事に従えば、崑崙とは主として Negrito のごとき巻髪黒身の種族を指すべきも、実際としては支那の記録に見ゆる崑崙国は、いま少しく広義に、直髪褐身の Malay 種族の蟠居せる南海諸国をも包有すること疑惑を容れず」と指摘する〔桑原 1989: 120〕。ただし桑原はこの問題にこれ以上立ち入らない。また、崑崙をマレー系に限定すると、後に述べるように、クメール系（真臘）やモン系（独和羅、ドヴァーラヴァティ）が崑崙から除外されるという不都合も生じる。
- 5) このうち『旧唐書』林邑伝では、伝の中程で表 1 のように「拳髪色黒」とあり、末尾で「巻髪黒身」とする。巻と拳は同義であり、また髻や捲という異字もある。本稿では引用を除き巻を用いる。
- 6) ネグリティ系は背が低いのでこの崑崙には適合しない。一般に崑崙は背が低いとされ、背が高いというのはこの史料だけである。ただしこの「長」は面長の意味かもしれない。
- 7) 南北朝期には既述のように扶南・頓遜・盤盤の王や高官の名前や称号としての崑崙がある。また南朝の宋が林邑を攻めたときの記述のなかで 2 回崑崙に言及されるが（酈道元『水経注』巻 36）、崑崙人に直接関わるものではない。
- 8) 黒田は崑崙奴の供給源のひとつとして戦争捕虜をあげ、具体例として『旧唐書』巻 184 楊思勗伝を示すが、同伝には崑崙の語は見られない。黒田はまた奴隷交易により連れてこられた人々に関する史料として周去非『嶺外代答』巻 3 をあげている。その「崑崙層期国」の条をさしていると思われるが、この国はアフリカ東海岸に位置する〔藤善 1991: 199-200〕。唐代にアフリカ黒人（後述の慧琳のいう僧祇）が連れてこられ

- たことを示すには、宋代の『嶺外代答』よりも『旧唐書』『新唐書』などの訶陵伝や室利仏逝伝が適している（注 11 参照）。
- 9) 表 1 の 4 国のうちこの形質の特徴が該当するのは色黒・拳髪・垂耳の真臘である。真臘伝には崑崙奴イメージが反映しているのであろうか。
 - 10) 伎楽における崑崙は、「呉女」すなわち漢民族の女性に懸想して痴態を繰り広げ、「力士」に成敗されるという道化の役回りである〔淺湫 1996: 11-12〕。
 - 11) 室利仏逝が「侏儒、僧祇女各二」を献上したことは『新唐書』巻 222 下室利仏逝伝に見え、それが開元十二年（724）であったことは『冊府元龜』巻 971 などから明らかになる。また訶陵が元和八年（813）に「僧祇奴四」（『新唐書』巻 222 下）、元和十年（815）に「僧祇童五人」（『旧唐書』巻 197）、元和十三年（818）に「僧祇女二人」（『唐会要』巻 100）を献上したことが諸書の訶陵伝に見える。
 - 12) 『唐会要』巻 99 甘棠国伝、『太平寰宇記』巻 177 甘棠国伝、『太平御覧』巻 788 甘棠国伝にはほぼ同文がある他、『冊府元龜』巻 970 に関係記事があり、『新唐書』は巻 222 下環王伝の付加部分で「（貞観）九年、甘棠使者入朝、国居海南」という。この九年は他の史書に照らして十年の間違いである。
 - 13) 羅刹国では火珠（ある条件下で発火する水晶のような珠）を産し、林邑が貞観四年（630）の朝貢の際にこれを献上したこと（『新唐書』巻 222 下環王伝ほか）、また同年中国の使節が羅刹国まで至っていること（『唐会要』巻 99 婆利国伝ほか）。
 - 14) 9 世紀半ばのアラブ史料『中国とインドの諸情報』にはアンダマン・ニコバル諸島に「黒く、ちぢれ毛で、人を欺くような卑屈な顔と目」の裸体の食人種がいるとか、「黒人種の裸族」の食人種がいて異能（潜水）の主であるとか語られている〔家島 2007-1: 29, 42, 99-101, 146〕。海域アジアの船乗りや海商達のあいだにこうした鬼畜羅刹の類の異能の主といった驚異譚が共有されていたのであろう。ただし、『大唐西域求法高僧伝』中の義浄自身のニコバル諸島の目撃証言では、裸体としつつも食人とは述べず「其人容色不黒、量等中形（その人の容色は黒くなく、背格好は中程度である）」とする〔足立 1942: 139, 142〕。アラブ史料には驚異譚に仕上げるための誇張があるのだろう。
 - 15) ついでながら、タカクスは南海録を独自の書とはみなさず後に第 11 章で述べるとするが、第 11 章には対応する記事はないので、明らかに誤訳である。義浄に『南海録』という著作があることは学界にほとんど知られていないのである。宮林は「この書は散逸して現在に伝わっていない」と注記する〔宮林 2004: 14〕。王は『宋史』巻 204 芸文志が記す、著者名なく「地理書類」に分類される「南海録」1 巻かもしれないとする〔王 1995: 18〕。
 - 16) 松田はその一方で、「崑崙国と南海諸国との間に区別を認めず、漠然と同じ意味に使用したものがあり、恐らく一般にはそう考えられていたろうと察せられる」と認め、また「崑崙は、ややもすれば南海と混用された」という。つまり崑崙は南海と同義で用いられる場合があったこと認めている〔松田 1987: 270〕。
 - 17) 義浄『南海寄帰内法伝』にはまた「東裔諸国」すなわち（インドの）東のはての諸国という語があってナランダーから東、臨邑までをいう〔宮林 2004: 12-13; 王 1995: 12〕。
 - 18) 義浄がインドの往復とも立ち寄った羯荼（マレー半島のクダ）や『大唐西域求法高僧伝』で 3 回言及する郎迦戌（ランカスカ、マレー半島のパタニ）が先の南海諸国列挙にあがっていない。これがマレー半島もまた瞻部洲に属し南海ではないという地理観にもとづくのであれば、今日の島嶼部と大陸部の区分とはずれがある。しかし義浄は『大唐西域求法高僧伝』で羯荼に 5 回言及するうち初回は「南海羯荼国」と記している〔足立 1942: 114〕。
 - 19) ただし南蛮伝の範囲は東南アジアにとどまらずインド洋方面にはみだすこともある。たとえば『梁書』『南史』の中天竺国と師子国、また『新唐書』の瞻博国。
 - 20) 真臘が崑崙諸国の一つであることは道宣『続高僧伝』巻 4 の那提三藏伝にも示されている。インド出身の学僧那提は「南海諸国」を歴遊の後、655 年長安に至り大慈恩寺に入ったもののふさわしい立場を与えられず、翌 656 年「勅往崑崙諸国、採取異薬。既至南海云々（勅命をえて崑崙諸国に往き、異薬を採取することになった。すでに南海に至ると云々）」という。そして 663 年再び大慈恩寺に入ったが、やはり冷遇され、同年「南海真臘国」の求めに応じてその国へと去った〔深見 2019: 70-73 参照〕。ここでは南海と崑崙は同義語として用いられている。なお、那提伝でその具体名がわかるのは真臘だけである。
 - 21) 碑文自体には年月が記されていないが、『資治通鑑』などから開元四年（716）十二月の離任後まもなく建

- てられたと考えられる〔中村 1917 (1): 46; (2): 47-48〕。
- 22) 和田久徳は唐代の市舶使の設置と改廃に関する論文の中でこの史料を引用し、また広州都督の路元叡と王方慶にふれるが、開元二年（714）に初めて市舶使が任命されたこととこの事件との関係はとくに論じない。おそらくその関係を直接示唆する史料は見当たらないのであろう〔和田 1961: 1051-1053〕。以下は想像だが、取引や課税の適正な管理の他に治安対策も市舶使任命につながったかもしれない。犯人は逃げおおせたらしいが旧暦 7 月から南への航海時季まで 3 カ月ほど置かれてから出航したかもしれないとすると、治安対策として外国船と外国人の管理が重要になる。
- 23) 骨唐は先に見たように（第 1 節（3）項）『一切経音義』の崑崙語の条の骨堂の異字かもしれない。とすると、骨唐は貞観十年（636）に朝貢した崑崙人の甘棠国かもしれないが、それ以上のことはわからない。白蛮と赤蛮は内陸の少数民族と思われるが詳細不明である。
- 24) 崑崙船のインド航路は義浄も利用している。義浄は 672 年羯荼（マレー半島のクダ）から耽摩立底（ガンジス河口のタームラリプティ、現タムルック）まで「王舶」に乗っている〔足立 1942: 139, 142〕。王舶とは羯荼国王の船だが、崑崙船ということもできよう。
- 25) 訳文は家島彦一を参照した〔家島 1993: 78〕。なお家島は枕櫛をシュロの一種とし、橄欖を熱帯に産する果樹の一種とする。
- 26) 桑原は枕櫛の紐を用いるのも「南人」とするが、正しくは「広人」である。
- 27) ここにあげた史料とおそらく直接は無関係だが、中国語のジャンク junk の語源をジャワ語やムラユ語のジョン jong やアジョン ajong（船または大型船）に求める説がある〔Yule 1969: 472; cf. Reid 1993: 36-43〕。

7 世紀の林邑交易圏

——『新唐書』環王伝付伝の分析から——

深見純生

The Trade Sphere and the Tributary Business of Linyi (林邑) in the 7th Century: An Analysis of the Additional Parts of the Huangwang-chuan (環王伝) of the Xintangshu (新唐書)

Fukami Sumio

Keywords:

Campā, Maritime Southeast Asia, Kunlun, Tributary business, 7th century

Summary

Based on an analysis of the additional parts of the Huangwang-chuan (環王伝) of the Xintangshu (新唐書), this paper shows that the sphere of the trade activity of Linyi (林邑) or Campā spread in the 7th century from Thailand and Cambodia in the North to the Malacca Strait and further East of Java and Bali in the South. The sphere corresponds roughly to the area called Kunlun (崑崙).

Linyi in the 7th century not only paid tribute most frequently to China, but also seemed to be engaged in tributary business that was bilateral. Linyi organized and guided the tributary missions of the countries in that region to China and Linyi also guided Chinese Imperial envoys to the countries to call for tributes.

キーワード：林邑，海域東南アジア，海上交易、朝貢ビジネス，7 世紀

はじめに

唐代（618 – 907）の東南アジア諸国の朝貢一覧表をみると〔深見 2001: 277-281〕，最初の 50 年間にとくに多いこと，またその中には林邑や盤盤のように前代以来数多く朝貢している国のほかに，1 度限りの朝貢国の多いことがわかる。かつて和田久徳が指摘したように，未知の国からの朝貢があるときには何らかの背景があると考えるべきであり，そうした事情のひとつとして唐からの使節の派遣が推測される〔和田 1950〕。

和田によれば，唐代における南海遣使に関して，三国時代の朱応・康泰の扶南派遣や隋代の常駿らの赤土派遣のような，明示的な史料がないというものの，その可能性はある。すなわち，達奚通（または達奚弘通，達奚洪）『海南諸蕃行記』一卷という書物があり，唐代から宋代にかけてよく読まれたらしい。逸書となり現在では具体的な内容はまったく不明だが，「自赤土至虔艸，凡經三十六国，略載其事（赤土から虔艸に至るまで，合計 36 国を経て，その概略を記す）」ものであるという（『玉海』巻 16「唐西域記」の項）。この旅行報告は上元年間の著述だが，唐

代に上元という年号は2回ある。和田は、海外との関係の多寡からみて、また赤土国の存在が確実なのが7世紀初めであることから、肅宗の上元（760－762）ではなく高宗の上元（674－676）と判断する。したがって、遣使はそれ以前の遠くない時期であるが、和田はこの遣使と関係あるかもしれないものとして、次の18の諸国の朝貢を指摘する。ただし和田はこれらの朝貢を検討しているわけではない。

太宗期の貞観二年（628）の殊奈，貞観十年（636）の甘棠，貞観十二年（638）の僧高・武令・迦牟・鳩密，貞観十八年（644）の摩羅遊，高宗期の顕慶元年（656）の拘婁密・婆岸，顕慶二年（657）の膽博，顕慶三年（658）の千私弗・舍利君・磨臘，顕慶五年（660）の哥羅舍分，竜朔元年（661）の多福，竜朔二年（662）の于支勿・脩羅分・甘畢¹⁾。

筆者前稿は『新唐書』巻222下南蛮伝下の瞻博伝とその付伝の諸国の朝貢を分析した〔深見2019〕。それは結果として、この後半（顕慶・竜朔年間）の11国のうち、拘婁密と多福以外の9国を取りあげている（第1節（4）項参照）。前稿ではまた那提三蔵というインド出身の仏僧が竜朔二年（662）の諸国朝貢の招諭使つまり朝貢を呼びかける使者（またはその随行者）であった可能性を指摘した。本稿では同じ南蛮伝下の環王伝の付伝の諸国を検討するが、それは前半（貞観年間）の7国のうち、摩羅遊以外の6国を取りあげることになる。以下、第1節で南蛮伝下にみえる海域の10国の本伝とその付伝を通観し、本伝の国と付伝の国がどのような関係であるかを明らかにする。第2節では環王伝の付伝諸国の位置や朝貢そして林邑との関係について検討する。第3節ではこれら付伝諸国との関係における林邑の役割について考える。

1. 『新唐書』南蛮伝の海域諸国

（1）本伝と付伝

『新唐書』南蛮伝（巻222、列伝147）は上・中・下3部分に分かれ、上・中は南詔伝であり、その他の諸国を扱う下には『新唐書』冒頭の目録によれば環王から西原蛮まで14の伝がある。このうち11～14番目の驃、両爨蛮、南平獠、西原蛮は中国との関係が基本的に内陸ルートによるものなので、海上ルートによる諸国を扱う本稿の枠外としておきたい。対象となる10国の伝のうち7には付伝がついている。つぎの表1はこれらを列举し、付伝国の本伝国との関係を示すものである。関係は本伝国と直接ではなく他の付伝国との関係を経由する場合もある²⁾。

『新唐書』南蛮伝がこのような本伝と付伝という、人物の伝では一般的だが、それまでの南蛮（南夷、海南）伝にはない構成をとった理由は筆者には不明である³⁾。付伝諸国の総数は24におよび、中でも環王伝は計9国と多い。『旧唐書』巻197南蛮伝には林邑・婆利・盤盤・真臘・陀洹・訶陵・墮和羅・墮婆登という海域の8国があり、付伝を伴うものはない。したがって、『新唐書』では『旧唐書』よりはるかに詳細な南海諸国の姿が示されることになる。もっとも、短い伝が多いので全体として情報量がおおきく増えるわけではない。

表1から本伝国と付伝国の関係の大部分は属国、近隣、同俗といった地理的近接性に求めることができる。地理的に近い諸国のグループを作るのは驚くべきことではない。その他に同時朝貢そして関係不明がある。次節で検討する環王伝の諸国を除いて、同時朝貢は訶陵伝と瞻博伝に記され、関係不明は瞻博伝の哥羅舍分・脩羅分・甘畢、そして単伝の羅越である。瞻博伝についてはまとめて説明することにし、その前に訶陵伝と単伝の場合を検討しておく。

表1 『新唐書』南蛮伝下における海域10国の本伝と付伝、その関係（注2参照）

本伝	付伝	本伝国と付伝国の関係
環王	婆利	本伝中に婆利・羅刹とともに朝貢したという。
	羅刹	同前。
	婆羅	本伝中に言及なし。婆羅伝に環王とともに朝貢した。
	殊奈	本伝中に言及なし。殊奈伝に環王の南にあり婆羅と同俗。
	甘棠	関係不明。
	僧高・武令・迦乍・鳩密	本伝中に言及なし。付伝で僧高は環王と同俗。
盤盤	哥羅	本伝中に言及なし。哥羅伝冒頭に盤盤の南に哥羅がある。
	拘婁蜜	本伝中に言及なし。拘婁蜜伝冒頭に哥羅の東南に拘婁蜜がある。
扶南	白頭	本伝に白頭人2人を献上した。白頭伝に白頭は扶南の西にある。
真臘	参半	本伝中に言及あり。参半伝に文単（陸真臘）の西北の属国が参半。
	道明	本伝中に言及あり。道明伝では道明もまた属国である。
訶陵	墮和羅	本伝中に訶陵が墮和羅・墮婆登とともに朝貢した。
	曇陵	墮和羅伝においてその属国である。
	陀洹	墮和羅伝においてその属国である。
	墮婆登	本伝中に、訶陵の西に位置し、訶陵・墮和羅とともに朝貢した。
投和	付伝なし。	
瞻博	千支	本伝中に同時に朝貢したという千支伝のことであろう。
	哥羅舍分・脩羅分・甘畢	関係不明。
	多摩婁	本伝中に言及なし。千支伝に北は多摩婁を隔てる。
室利仏逝	付伝なし。	
名蔑	付伝なし。	
単単	羅越	関係不明。

（2）訶陵と墮和羅・墮婆登

『新唐書』訶陵伝に次のようにいう。

貞観中、与墮和羅・墮婆登、皆遣使者入貢。太宗以璽詔優答。

貞観中（627－649）、墮和羅・墮婆登とともにみな使者を遣わして入貢した。太宗は御璽を押した詔書を与えて手厚く対応した。

3国同時の朝貢があり、太宗はこれをおおいに喜び優遇したと受けとれる。

墮婆登は訶陵伝に「西墮婆登」といい、付伝の墮婆登伝にも「東訶陵」という。そして墮婆登伝に「俗与訶陵同（風俗は訶陵と同じ）」というから地理的近接性は明らかである。訶陵はふつう中部ジャワに位置比定される。墮婆登は中部ジャワ（または西部ジャワ）に位置したのであろう。同時朝貢については訶陵伝にいうだけで墮婆登伝には記されない。

付伝である墮和羅伝には朝貢に関する記事はないが、訶陵伝では上記に続けて「墮和羅丐良馬、帝与之（墮和羅は良馬を乞い、帝はこれを与えた）」という。喜んだ太宗が墮和羅の願いどおりに良馬を与えたというこの一文は、墮和羅伝で述べるべきものが訶陵伝に入った（残った）のかもしれない⁴⁾。墮和羅（または独和羅）はふつうドヴァーラヴァティーに同定され、その位置は中部タイであり、下ミャンマーを含んでいた可能性もある。遠く離れた訶陵と墮和羅が同時

に朝貢したとすると、その背後には特別の事情があったかもしれない。同時入貢は朝貢使が同道してきたことまで意味するのかを含めて検討してみたい。

3 国の貞観年間（627 - 649）の朝貢を『新唐書』以外の諸書によって確認する。訶陵のこの時期の朝貢は 640 年、647 年の 2 回、墮和羅は 638 年、640 年、643 年、649 年の 4 回、墮婆登は 647 年の 1 回である。したがって、訶陵と墮和羅が 640 年、訶陵と墮婆登が 647 年に朝貢しているが、3 国同時の朝貢はない。もう少し詳しくみると、640 年の訶陵と墮和羅は『冊府元龜』巻 970 に「（貞観十四年）五月、訶陵・独和羅・罽賓、並遣使貢方物」といい、同年同月なので朝貢使が帯同しての同時朝貢の可能性はある。しかしながら『冊府元龜』は同年あるいは同月の朝貢を一括して記すものであり、その諸国に関係があるとは限らず、単なる偶然の可能性もある。じじつ罽賓は周知のように内陸アジアのカシミール方面の国であるので、訶陵や墮和羅との関係は考えにくい。

『旧唐書』墮和羅伝は 638 年の朝貢の次に、640 年の朝貢は記さず、649 年のこととして「又遣使献象牙・火珠、請賜好馬、詔許之（また使者を遣わして、象牙・火珠を献上し、良い馬を賜りたいと請うた。詔してこれを許した）」という。『新唐書』訶陵伝にいう墮和羅が馬を賜与されたのは両国が朝貢した 640 年ではなく、649 年なのである（第 3 節（3）項参照）。『冊府元龜』巻 970 はこの貞観二十三年（649）二月「墮和羅国遣使、献象牙・火珠」といい、献上品は同じであるが馬の件にはふれない。

647 年の墮婆登の朝貢については『旧唐書』巻 197、『通典』巻 188、『唐会要』巻 100、『太平寰宇記』巻 177 のそれぞれの墮婆登（または婆登）伝および『冊府元龜』巻 970 に記されるが、『旧唐書』以外は簡略である。『唐会要』がこの年の六月というのは『旧唐書』にはない情報である。『旧唐書』は次のようにいう。「貞観二十一年、其王遣使献古貝・象牙・白檀。太宗璽書報之、并賜以雜物（貞観二十一年（647）、その王は使者を遣わして古貝・象牙・白檀を献上した。太宗は御璽を押した詔書でこれに報い、あわせて様々なものを賜った）」。647 年の訶陵の朝貢について年次を特定した記事はわずかに『太平寰宇記』巻 177 訶陵伝に「貞観二十一年、遣使、献金花等物（貞観二十一年（647）、使者を遣わし、金花などのものを献上した）」というだけである。朝貢記事の多い『冊府元龜』にもこの年の訶陵朝貢はみえない。『通典』巻 188 の訶陵伝が「貞観中、献金花等物」というのはこの年のことであろう。かくして 647 年に訶陵と墮婆登の朝貢があったとはいうものの、それが両国同時かどうかかわからない。なお太宗がこの時墮婆登に璽書を与えたというので、『新唐書』訶陵伝の「太宗以璽詔優答」は墮和羅と墮婆登の両方にかかるのであろう。

このようにみえてくると、『新唐書』訶陵伝は「貞観中、与墮和羅・墮婆登、皆遣使者入貢」というが、実際には貞観十四年（640）五月に訶陵と墮和羅、二十一年（647）に訶陵と墮婆登の朝貢があったことは確認できるが、それぞれ朝貢使同道による同時朝貢かどうかは不明である。かくして墮和羅と訶陵の関係（墮和羅伝が訶陵伝の付伝である理由）は同年同月の朝貢以外にみあたらないことになる。『新唐書』の編者は同年あるいは同じ年号の時期の朝貢を重視しているらしいのである。これは下記の瞻博伝の場合にもっと明瞭に現れる。

(3) 単単と羅越

単単（丹丹）の位置は異説もあるが最も有力な中部ジャワ説（訶陵の東）に従っておきたい。その朝貢は梁・陳・隋代に何度か記録され、唐代ではこの単単伝の末尾に「乾封・綏章時、献方物（乾封（666－668）・綏章（668－670）の時に方物を献上した）」という。乾封の朝貢は『冊府元龜』巻970に「乾封元年七月、単単国・訶陵国各遣使献方物（乾封元年（666）七月、単単国・訶陵国はそれぞれ使者を遣わして方物を献上した）」とあるが、綏章の朝貢は他の史料に記されていない。

羅越は『新唐書』の羅越伝と同書巻43下地理志にみえるだけで他の史料に記されない。その位置は地理志（いわゆる賈耽『皇華四達記』）ではマレー半島南部と思われる記述があるが、ここでは羅越伝自体によってマレー半島北部としておきたい。次がその全文である。

羅越者、北距海五千里、西南哥谷羅。商賈往来所湊集。俗与墮羅鉢底同。歲乘舶至広州、州必以聞。

羅越は、北は海から五千里隔たっていて、西南は哥谷羅である。商人が往来して多く集まる。風俗は墮羅鉢底（ドヴァーラヴァティー）と同じである。毎年船に乗って広州にやってくる。広州は必ず朝廷に言上する。

海から五千里はあまりに距離がありすぎるので五里あるいは五十里の間違いであろうか。哥谷羅はふつうマレー半島北部に位置比定される。そしてドヴァーラヴァティーと同俗というから、羅越の位置はマレー半島の付け根あたり、アンダマン海に面する下ミャンマーであろう。毎年広州にくるといのが朝貢の記録はない。

かくして、本伝と付伝に単単と羅越を結びつける記述はなく、地理的に近いとはいいがたく、他の史料によってもつながりは明らかにならない。関係不明としておきたい。ついでながら、中部ジャワの訶陵と単単にそれぞれ、タイ中部か下ミャンマーの墮和羅と羅越が結びつけられているのは何か背景があるのかもしれない。

(4) 瞻博伝

瞻博伝とその付伝の諸国の位置比定や朝貢について筆者はすでに史料をあげて検討しているので〔深見2019〕、ここではその結果に基づいて概略を記すことにする。表2はその検討結果を示すものである。ここで特徴的なのは瞻博と付伝諸国の関係をたどることはできるが希薄であること、そして何より竜朔二年（662）五月に6国の同時朝貢があったこと、しかもその6国が南インド2、東南アジア大陸部3、ミャンマー・中国の内陸部1と地理的にずいぶん離れていることである。

表2 『新唐書』瞻博伝諸国の概略位置と朝貢年月〔深見 2019: 81〕

婆岸	中印度／南天竺か	顕慶元年（656）五月
瞻博	中印度	顕慶二年（657）六月
舍跋若	南天竺	顕慶三年（658）八月
千支仏	南天竺	顕慶三年（658）八月・竜朔二年（662）五月
磨臘	南天竺	顕慶三年（658）八月・竜朔二年（662）五月
多摩婁	南天竺	顕慶四年（659）二月
哥羅舍分	墮和羅の西か北	竜朔二年（662）五月
脩羅分	真臘の西	竜朔二年（662）五月
甘畢	林邑の西	竜朔二年（662）五月
三濮	ミャンマー～雲南内陸部	竜朔二年（662）五月

瞻博伝は簡略で次がその全文である。

瞻博、或曰瞻婆。北距兢伽河。多野象群行。顕慶中、与婆岸・千支仏・舍跋若・磨臘四国、並遣使者入朝。

瞻博はまた瞻婆ともいう。北は兢伽河をへだてる。野生の象がたくさん群れをなしている。顕慶年間（656－661）に婆岸・千支仏・舍跋若・磨臘の4国とともにみな使者を遣わして朝貢した。

瞻博がチャンパーの音訳であり兢伽河がガンジス川であることは疑いが無い。この国の位置は玄奘『大唐西域記』に従って中印度とよんでおく。チャンパー国の都は現ビハール州バーガルプルにあった。グプタ朝の都があったパトナの200キロほど下流である。「顕慶中、与婆岸・千支仏・舍跋若・磨臘四国、並遣使者入朝」というので、瞻博とこの4国が同時に朝貢したかと受けとれるが、他の史料（とくに『冊府元龜』巻970）を参照すると、実際は表2のように、4国の朝貢は顕慶年間ではあっても瞻博と同年ではない。このうち千支仏・舍跋若・磨臘の3国は三年八月なので同時朝貢の可能性が高い。婆岸の位置比定は手がかりがない。瞻博と同じ中印度か千支仏などと同じ南天竺かと想像されるがインド以外の可能性も排除できない。

『冊府元龜』は千支仏・舍跋若・磨臘の3国の位置を南天竺とする。付伝の千支は瞻博伝の千支仏の仏を脱したものと思われる。千支仏はパッラヴァ朝の都カーンチープラムの音訳であり、舍跋若と磨臘はそれぞれその南と北に位置したと考えられる。

付伝の多摩婁と本伝の瞻博の関係は、顕慶年間の朝貢という共通点があるが上記のように瞻博伝には多摩婁は記されないの、その位置が千支仏の北であるという、千支仏を介したものということになる。

付伝の哥羅舍分・脩羅分・甘畢の3国については、付伝自体に位置情報が王名などとともに記されている。3国ともに南海にあり、哥羅舍分は墮和羅の西、脩羅分は真臘の西、甘畢は林邑の西に位置するという。この3国は東南アジア大陸部に位置したのである。この3国は本伝の瞻博と直接の関係がなく、付伝の千支仏（および瞻博伝の中の磨臘）と同じ竜朔二年（662）に朝貢したことから瞻博伝に付されたことになる。

『冊府元龜』巻970が竜朔二年（662）の6国の朝貢を記している。

五月、于弗国・磨臘国・三濮国・哥羅舍分国・修羅分国・甘畢国、並遣使献方物。

五月、于弗国・磨臘国・三濮国・哥羅舍分国・修羅分国・甘畢国がみな使者を遣わし方物を献じた。

続けて哥羅舍分・脩羅分・甘畢3国の位置や国情などを記す。このうち于弗は千支仏を誤ったものである（千を于に誤り、支を脱し。佛を弗に誤った）。三濮は『新唐書』南蛮伝の南平獠伝の付伝として三濮伝がある。その位置はミャンマー・雲南方面のはるか内陸であり、通常なら朝貢は内陸ルートによるはずだが、三濮伝の末尾に「竜朔中、遣使与千支弗・磨臘同朝貢（竜朔年間に使者を遣わして千支弗・磨臘とともに朝貢した）」という。かくして、南インドの2国、東南アジア大陸部の3国、そしてはるか内陸の1国という遠く離れた6国が同年同月に朝貢したのである。これは偶然とは考えにくく、背後にどのような事情を想像するかはともかく、6国の朝貢使が同道した同時朝貢であろう。

三濮が南平獠の付伝とされるのであるから、東南アジアの3国の場合も地理的關係から、哥羅舍分は墮和羅の、脩羅分は真臘の、甘畢は林邑の付伝とするのが自然と思われるが、実際には千支仏との同時朝貢により一括して瞻博の付伝とされている。

(5) 小結

本伝国と付伝国の関係はほとんどの場合それらの伝自体に記されている。他の付伝を介しての間接的つながりの場合もある。少数ながら関係不明もある（単単と羅越）。その関係のほとんどは属国、隣国、同俗など地理的近接性であるが、地理的近接とはいいいがたく朝貢による場合がある（訶陵と墮和羅、瞻博伝）。瞻博伝の諸国は非常に広範囲なので特殊な事情の存在を想像させる。同年同月の朝貢であれば朝貢使が同道しての同時朝貢が想定されるが、訶陵伝や瞻博伝のように貞観や顕慶という同じ年号の異なる年次の朝貢を一括して扱っている場合もある。

2. 環王伝の付伝の諸国

この節では『新唐書』環王伝の付伝の諸国の位置や唐への朝貢、そして林邑との関係について検討する。環王は周知のように、現地の碑文ではチャンパーという名前のベトナム中部の王国の、漢籍における8世紀半ばから9世紀半ばの時期の名前であり、それ以前は林邑、以後は占城とよばれる。7世紀を扱う本稿ではおもに林邑を用いる。

(1) 婆利

環王伝において婆利と羅刹は次のように言及される。

貞観時、王頭黎献馴象・鏐鎖・五色帯・朝霞布・火珠、与婆利・羅刹二国使者偕来。

貞観年間（627－649）に、（林邑）王の（范）頭黎が、訓練された象・美しい金鎖・五色の帯・朝霞布・火珠を献上し、婆利・羅刹の2国の使者とともにきた。

貞観何年か記されていないが、引用末尾の「偕」は「いっしょに行動する」の意味なので、林邑・

婆利・羅利3国の使者が帯同してきたという。林邑の朝貢は3世紀から数多く記録され、唐代に入っても武徳六年（623）、八年（625）に続いて、貞観年間には二年（628）、四年（630）を含めて十六年（642）までの間に少なくとも6回記録されている。

付伝の婆利伝と羅利伝は後に全文をあげて検討することにしてまず婆利の位置などの概要を確認しておきたい。婆利伝は『新唐書』以前に成立した諸書、正史では『梁書』から『旧唐書』まで、また『通典』や『唐会要』などにある。朝貢は少なくとも梁の天監十二年（517）と普通三年（522）、隋の大業十二年（616）、唐の貞観四年（630）の4回記録されている。周知のように隋の煬帝は大業三年（607）に常駿らを赤土に派遣し、彼らは婆利と羅利まで至った（後述）。『隋書』南蛮伝は林邑・赤土・真臘・婆利の4国をあげるだけなので、婆利はそれだけ重視されており、梁代以来の南海の有力国といえよう。

その位置は『隋書』婆利伝に「婆利国、自交趾浮海、南過赤土・丹丹、乃至其国」と『新唐書』（後述）とほぼ同文であり、他書の婆利伝も同様である。赤土の位置については諸説あるがいにせよマレー半島南部から西部ジャワの間であり、丹丹は中部ジャワ（訶陵の東）、婆利は東部ジャワ（おそらくブランタス川流域）とする説に従っておく〔cf. Wolters 1967: 197-206; 陳 1986: 211, 408-409, 730-731〕。『旧唐書』婆利伝に次のようにいう。

穀一歳再熟。有古貝草、緝其花以作布、粗者名古貝、細者名白氎。

穀物は年に2回実る。古貝草がありその花を紡いで布を作る。粗製のものを古貝といい、細密なものを白氎という。

稲作が盛んで綿花を栽培して綿布を生産する豊かな農業社会の存在をうかがわせる。これに適合する自然環境は東南アジア島嶼部ではジャワ島中部からバリ島の間にはほぼ限られる。『隋書』は国の広さを東西4ヶ月、南北45日の行程といい、『通典』は東西50日、南北20日の行程という。数字の意味を明確に把握しかねるが、東西に長いので東部ジャワだけでなくバリ島（やさらに東の島々）を含んでいたと思われる。婆利の字音にバリ島が反映している可能性もある。

婆利の朝貢は『旧唐書』婆利伝に「貞観四年、其王遣使、随林邑使、献方物（貞観四年（630）その王は使いを遣わし、林邑の使者に随って方物を献上した）」という。また『冊府元龜』卷970もこの年「五月（中略）婆利国遣使、随林邑使、献方物」とほぼ同文であり、林邑と婆利の朝貢使が帯同してきた同時朝貢であることが明記されている。地理的に遠く離れた林邑と婆利が同時に朝貢した背後には特別の事情があったと推測される。これについては次項で取りあげる。なおこの『冊府元龜』の五月は原文では五年であるが、ここでは五月の誤りと解釈している⁵⁾。

次は環王伝付伝の婆利伝である⁶⁾。少し長いが全文をあげる。

婆利者、直環王東南，自交州汎海，歷赤土・丹丹諸国乃至。地大洲、多馬、亦号馬礼。袤長数千里。多火珠，大者如鷄卵，円白，照数尺，日中以艾藉珠，輒火出。産瑇瑁・文螺。石埧，初取柔可治，既鏤刻即堅。有舍利鳥、通人言。俗黑身、朱髮而拳、鷹爪獸牙。穿耳傳璫。以古貝横一幅繚于腰。古貝草也、緝其花為布。粗曰貝、精曰氎。俗以夜為市。

自掩其面。王姓刹利邪伽，名護路那婆，世居位。繚班糸貝，綴珠為飾。坐金榻，左右持白扠、孔雀翬。出以象駕車，羽蓋珠箔，鳴金、擊鼓、吹蠡為樂。

婆利は環王の東南に当たり、交州（ハノイ）から海に出て、赤土・丹丹の諸国を経て至る。大きな島であり、馬が多く、馬礼ともいう。数千里の大きさがある。火珠が多く、大きなものは鶏卵くらいあり、丸くて白く、数尺を照らし、日中にもぐさを珠に敷くと火が出る。玳瑁・文螺を産する。石柑は取り出した初めは柔らかくて形を作ることができるが、彫り刻むと堅くなる。舍利鳥がいて、人の言葉が通じる。人々は色が黒く髪が赤くて巻いていて、鷹のような爪、獣のような歯をしている。耳に穴をあけて耳飾りをしている。古貝を横にして腰に巻いている。古貝は草であってその花を紡いで布を作る。目の粗いものを貝といい、細かいものを氎という。風俗は夜に取引をおこない、自ら顔を隠す。王は刹利邪伽を姓とし護路那婆を名とする。王位を代々受け継いでいる。班糸貝をまとい、珠を綴って装身具とし、黄金の椅子に座り、左右は白い扠と孔雀の団扇をもつ。外出には象や車に乗り、その座所には羽の屋根と珠の簾がある。鉦を鳴らし鼓を打ち蠡を吹いて音楽とする。

これに簡略な羅刹伝が続く。

其東即羅刹也。与婆利同俗。隋煬帝遣常駿使赤土，遂通中国。

その（婆利の）東は羅刹である。婆利と同じ風俗である。隋の煬帝が常駿に赤土に使いに行かせ、ついに中国にその存在が知られた。

婆利伝に3か所下線を施してある。下線のない部分は他の諸書の婆利伝にほぼ同文があるが、下線の部分は他書にみえない。『通典』や『唐会要』の羅刹伝（次項）を参照すれば下線部がじつは羅刹伝から取り込んだものであることがわかる。羅刹伝の「与婆利同俗」は下線部にのみ適合し、その他の部分に適合しないことは明らかである。『新唐書』の編者がこうした編集をした意図は不明である。

（2）羅刹

羅刹に関する史料は多くない。正史では上記の『新唐書』環王伝とその付伝の他には『隋書』が言及するだけである。羅刹の初出は隋代の常駿らの赤土への遣使である⁷⁾。『隋書』卷3本紀に大業四年（608）三月に「遣屯田主事常駿、使赤土国、致羅罽（屯田主事の常駿をして赤土国に使いせしめ、羅罽に至る）」といい、卷24食貨は「使屯田主事常駿、使赤土国、致羅刹」とほぼ同文である。「致」は「到」の意味であり、前者の羅罽は羅刹を誤ったと思われる。常駿らが羅刹に至ったことを否定する意見もあるが〔桑田1993a: 10-11; 1993b: 193〕、明確な根拠があるわけではなくあえて否定する必要はない。少なくとも後の諸書にそのように記されている。ただしこの時の羅刹の産物や風俗などの情報は伝わっていない。なお『隋書』赤土伝によれば常駿と赤土の使者が大業六年（610）春に煬帝に拝謁しているので、常駿が羅刹に至ったのはおそらく609年であり、同年の夏季モンスーンで帰国したであろう。

『通典』巻188 羅刹伝と『唐会要』巻99 婆利伝の付伝が羅刹についてわかるすべてである。『太平御覧』巻788と『太平寰宇記』巻177にも羅刹伝があるがこれらを越える内容はない。次は『通典』羅刹伝の全文である。

羅刹国在婆利之東。其人極陋，朱髮黑身，獸牙鷹爪。時与林邑人作市，輒以夜，昼日則掩其面。隋煬帝大業三年，遣使常駿等使赤土国，至羅刹。

羅刹国は婆利の東にある。その人々は容貌がきわめて醜く，赤毛で色が黒く，齒は獣のようであり，爪は鷹のようである。時々林邑の人と取引する。取引は夜におこない，日中は顔を覆っている。隋の煬帝は大業三年（607）常駿らを派遣して赤土国に使いさせ，羅刹に至った。

『唐会要』婆利伝に，本伝より長い付伝がある。その内容は羅刹、火珠、獅子国と遷移する。獅子国の部分は省略する。

貞観四年四月，使至婆利界。有羅刹国，其人極陋，朱髮黑身，獸牙鷹爪。時与林邑人作市，市以夜而自掩其面。其国出火珠，状如水晶，日正午時，以珠承影，取艾承之，即火出。其年，林邑国貢献，云羅刹得之。或云出獅子国。（下略）

貞観四年（630）四月に（中国の）使者が婆利の外まで至った。（そこに）羅刹国があり，その人々は容貌がきわめて醜く，赤毛で色が黒く，齒は獣のようであり，爪は鷹のようである。その時林邑の人と取引をおこなった。取引は夜に自ら顔を覆っておこなう。その国に火珠を産する。形状は水晶のようであり，毎日正午になり，珠で影を作り，もぐさに受けると火が出る。その年林邑国がこれを献上してきて，羅刹で手に入れたという。また獅子国（スリランカ）にも産するともいう。（下略）

『唐会要』の記事は3つの意味で重要である。第一に貞観四年（630）に中国の使者が羅刹まできている⁸⁾。隋代の常駿らに続く2回目の使節が羅刹まで至ったのである。この使節については後にあらためて取りあげる（第3節（3）項）。第二に林邑人が羅刹に交易にきている。これは林邑の交易先がわかる貴重な記述である。第三にその年林邑が火珠を献上し，羅刹で手に入れたと言上したという。その年は貞観四年（630）をさす。630年に林邑と婆利の同時朝貢があり林邑が火珠を献上したことは上でみたとおりである。とすると，林邑はおそらく前年の629年にも羅刹にきているのであり，林邑の羅刹来航は常態であるか，少なくとも特異な例外ではないことがわかる。そして629年の林邑の帰国船に婆利の朝貢使が同乗したか，婆利の船が同行したと推測できよう（第3節（2）参照）。

羅刹の位置は婆利（東部ジャワやバリ）の東で林邑船が往来するという以上の手がかりはない。羅刹という国名の由来は記されていない。この語はサンスクリット語のラクシャサ rākṣasa つまり畏怖すべき鬼類あるいは食人鬼のことなので，音訳ならわざわざこの文字を選んだことになる。意識なら，上述のような顔貌醜悪・朱髮・黒身・獸牙・鷹爪が悪鬼羅刹の類を想起させたのかもしれないが，インド文化を摂取している林邑や婆利からみて異界つまり文明圏外の野

蛮人という含意があるのだろう⁹⁾。

羅刹の朝貢は『新唐書』環王伝以外には記されない。羅刹の朝貢があった、それも林邑・婆利・羅刹3国同時であったとするのは環王伝の誤りと考えざるをえない¹⁰⁾。その原因は推測の域を出ないが、元テキストの誤読が考えられる。『冊府元龜』巻970に例をとるなら、(貞観四年)「五月林邑献火珠状如水精日正午時以珠承景取艾衣之即火見云得於羅刹国婆利国遣使随林邑使献方物」の如き文章かもしれない(訳文は注5参照)。火珠の説明に続いて羅刹国で手に入れたという。婆利国の前に句点(。)をおいて読むべきところ、羅刹国と婆利国が使者を遣わして林邑の使者に随って方物を献上したと誤ったのかもしれない。

婆利と羅刹が環王伝の付伝とされたのは両国が林邑と同時に朝貢したからである。婆利の朝貢使が林邑の朝貢使と帯同してやってきたが、羅刹の場合は『新唐書』編者の誤りによるもので、じつはその朝貢はなかった。しかしながら、林邑の交易先が羅刹まで及んでいること、中国の使者が羅刹に至っていることが明らかになった。

(3) 婆羅

婆羅の朝貢は貞観十六年(642)と総章二年(669)の2回記録されている¹¹⁾。ただし前者を記すのは『冊府元龜』巻970だけであり、同年正月の朝貢国14の列举の中に婆羅の名があるが、詳細は不明である。そこでは「婆羅国・曇陵・参半」と列举される。表1にもあるように曇陵は墮和羅の属国、参半は真臘の属国である。この3国の同年同月の朝貢に、林邑の介在と使者の同時朝貢といった特別の事情の可能性はあるが断定はできない¹²⁾。

次は環王伝付伝の婆羅伝の全文である。総章二年(669)に使者が環王(林邑)の使者とともに至ったことが記されている。

赤土西南入海，得婆羅。総章二年，其王旃達鉢遣使者，与環王使者偕朝。

赤土から西南の方向へ海に入ると婆羅がある。総章二年(669)，その王の旃達鉢が使者を派遣し，環王の使者とともに参内した。

婆羅の位置は赤土の西南とされる。赤土がマレー半島南部であればマラッカ海峡方面となるが、正確な位置比定は困難である。『冊府元龜』巻970はこの年の婆羅の朝貢について次のように記す。ここでは婆羅が羅婆と転倒し、王の名は称達鉢とされている。

総章二年八月林邑王鉢伽舍跋摩，羅婆王称達鉢等、十一月倭国、並遣使献方物。

総章二年(669)八月に林邑王の鉢伽舍跋摩と羅婆王の称達鉢ら、十一月に倭国、みな使者を遣わして方物を献上した。

この同年同月の朝貢は付伝によれば朝貢使帯同しての同時朝貢である。630年の婆利と同様に林邑の交易先がマラッカ海峡に延びていたのであろう。

環王伝の付伝ではこの次に殊奈伝があり(次項)，その中で「与婆羅同俗(婆羅と同俗である)」と婆羅への言及がある。婆羅に関する史料は事実上以上で尽きている。正史にも『太平寰宇記』『太

平御覧』などにも伝はない。2回の朝貢がありながら、正史などに伝がなく、史料が少ないのは、桑田が示唆するように¹³⁾、婆利と同一視されたためかもしれない。630年の婆利と669年の婆羅がどちらも林邑とともに朝貢したと明記されているのも同一説に味方するようである。しかしながら、婆利が赤土の東なのに対して婆羅が赤土の西南とされ、両者の位置情報は一致せず、そもそも『新唐書』は両者を別物として扱っている。本稿では『新唐書』に従って別物としておきたい¹⁴⁾。

(4) 殊柰

環王伝付伝の殊柰伝は次のように述べる。

環王南有殊柰者，汎交趾海三月乃至。与婆羅同俗。貞觀二年使者上方物。

環王の南に殊柰なるものがある。交趾から海に浮かんで3ヶ月で到達する。婆羅と同俗である。貞觀二年（628）に使者が方物を献上した。

『唐会要』巻98に次のような殊柰伝がある。

殊柰，崑崙人也。在林邑南，去交趾海行三月余日。習俗文字与婆羅門同，絶遠未嘗朝中国。貞觀二年十月，使至朝貢。

殊柰は崑崙人である。林邑の南に位置し、交趾から海行3ヶ月あまりである。習俗と文字は婆羅門（インド）と同じである。絶遠の地でいまだかつて中国に朝したことがないが、貞觀二年（628）十月に使者がきて朝貢した。

殊柰についてはその他の書物にも言及があるが¹⁵⁾、その内容は『唐会要』と次に取りあげる『冊府元龜』で尽きている。すなわち、崑崙人であること、林邑の南に位置し、交趾から海行3ヶ月あまりであること、習俗文字が婆羅門（インド）と同じであること、絶遠の地で中国に通じることがなかったが貞觀二年（628）十月に朝貢したことである。

崑崙と崑崙人については筆者別稿〔深見2022〕で検討しており、ここでは南海とほぼ同義の広域の地域概念と理解しておきたい。したがって位置や特徴を特定する手がかりにならない。崑崙については後にあらためて取りあげる（第3節（1）項）。習俗と文字が婆羅門（インド）と同じというが、漢籍が南海諸国の文字について述べるのは一般的ではないうえに、「絶遠の地」の習俗と文字がインドと同じというのは違和感がある。環王伝付伝の殊柰伝は上記のように婆羅と同俗とする。婆羅門を婆羅に誤ったとも考えられるが、逆に『唐会要』等々が婆羅を婆羅門に誤ったとも考えられる。同じ環王伝付伝の国どうしが同俗であるのが自然なので、婆羅門は婆羅を誤ったものとみなしておく。

殊柰の貞觀二年（628）の朝貢は『冊府元龜』巻970では「（貞觀二年）十月、林邑・真臘・参半・殊柰並遣使朝貢」と記されている。4国が同年同月に朝貢したのである。さらに真臘の朝貢について『旧唐書』真臘伝は次のようにいう。

貞観二年，又与林邑国俱来朝献。太宗嘉其陸海疲勞，賜賚甚厚。

貞観二年（628），また林邑国とともに朝献してきた。太宗はその陸海の労苦をねぎらい、たいへん手厚く賜り物をくださった。

真臘と林邑の使者が同道して朝貢したのである。とすると、参半と殊奈も含めて4国の使者が同道しての同時朝貢の可能性がある。付伝の文章の流れからすると、殊奈と婆羅が同俗であることが殊奈伝を環王伝に付した理由と思われるが、殊奈と林邑の同年の朝貢が理由であったかもしれない。

周知のようにカンボジア内陸から台頭した真臘はこの時期ちょうど扶南を圧迫して有力になっていく。参半は後に真臘の属国と記されるが（表1）、ここでは真臘と並んで朝貢しているので、この時期にはまだ服属関係はなかったのであろう。参半の位置は諸説あって定めがたいが、いずれにせよカンボジアかタイである〔陳1986: 548 参照〕。この時期の真臘と周辺諸国の関係は関係する国が多く複雑なので、環王伝付伝諸国を中心テーマとする本稿では立ち入らないことにする。

（5）甘棠

甘棠に関する史料も多くない。朝貢は貞観十年（636）に記録されている。環王伝付伝の甘棠伝は次のように述べる。この九年は他の史料がすべて十年なので、十年の間違いと考えられる。

（貞観）九年，甘棠使者入朝，国居海南。

（貞観）九年（635），甘棠の使者が朝廷に至った。この国は海南にある。

『冊府元龜』巻970の貞観十年（636）十二月の条に次のようにいう。「疏勒・朱俱波・甘棠並遣使朝貢（疏勒・朱俱波・甘棠がいずれも使者を遣わして朝貢した）」『唐会要』巻99と『太平寰宇記』巻177の甘棠伝、『太平御覧』巻788の甘棠伝はほぼ同文である。ここでは『唐会要』をあげる。太宗が喜んだことが記事の大部分を占め、その部分は省略する。

甘棠，在大海之南，崑崙人也。貞観十年，与朱俱波国朝貢同日至。太宗謂群臣曰、南荒・西域，自遠而至，其故何哉。房元齡曰（下略）

甘棠は大海の南にあり，崑崙人である。貞観十年（636），朱俱波国と同じ日に朝貢してきた。太宗は臣下たちに申された。「南の辺境と西域が遠くからやってきた。なにゆえか」。（宰相の）房元齡が申し上げるに（下略）

すなわち，甘棠は南海にある崑崙人の国であり，貞観十年（636）に朝貢したことがわかるだけである。林邑との関係は不明であるが，他の付伝諸国とは殊奈（および婆羅）と同じく崑崙人とされる。表1では関係不明としてあるが，ここでは崑崙人という共通性によるものと考えておきたい。

(6) 僧高など4国

最後の僧高など4国についても史料は多くない。環王伝の付伝は次のように述べる。

(貞観)十二年, 僧高・武令・迦乍・鳩密四国使者朝貢。僧高直水真臘西北, 与環王同俗。其後鳩密王尸利鳩摩又, 与富那王尸利提婆跋摩等, 遣使来貢。僧高等国, 永徽後為真臘所并。

(貞観)十二年(638), 僧高・武令・迦乍・鳩密の4国の使者が朝貢した。僧高は水真臘の西北にあたり, 環王と同俗である。その後、鳩密王の尸利鳩摩又(又は衍字か)は, 富那王の尸利提婆跋摩等(等は衍字か)とともに, 使者を派遣して来貢した。僧高などの国は, 永徽年間(650 - 655)の後に真臘に併合された。

『冊府元龜』巻970にもこの年の4国の朝貢が記される。

(貞観)十二年正月, 僧高・武令・迦乍・鳩密等四国使者朝貢。並南荒之小国也。朝中国, 自是始通。衣服言音与林邑同俗。

(貞観)十二年(638)正月, 僧高・武令・迦乍・鳩密など4国の使者が朝貢した。いずれも南の辺境の小国である。中国の朝廷に参ることは, ここに初めて実現した。衣服や言語は林邑と同俗である。

『冊府元龜』巻970には咸亨二年(671)の鳩密と富那の朝貢が記されている。

(咸亨)二年八月, 鳩密国王尸利鳩摩・富那国王尸利提婆跋摩, 各遣使来朝貢其方物。

(咸亨)二年(671)八月, 鳩密国王の尸利鳩摩・富那国王の尸利提婆跋摩がおのおのの使者を派遣してそれらの方物を朝貢した。

史料は事実上以上で尽きている。付伝で鳩密の2回目と富那の朝貢が記されるが、これが永徽年間(650 - 655)以前なのか、それとも『冊府元龜』のいう咸亨二年(671)なのか明らかでない。前者の場合、鳩密は3回、富那は2回の朝貢があったことになる、

僧高など4国および富那の位置比定とそれらの朝貢の歴史的位置づけに関してはウォルターズおよび石澤良昭が論じている〔Wolters 1974; 石澤 2013: 190-200〕。これに従って5国の位置はカンボジア北西部としておき、ここでは両者とも論じていないことがら、すなわち僧高など5国が『新唐書』において真臘伝ではなく環王伝に付されていることを取りあげたい。

僧高などはカンボジア北西部に位置したのであるから、地理的には林邑より真臘に近いが、真臘伝ではなく環王伝の付伝とされている。ここで注目されるのが付伝に「与環王同俗」といい、『冊府元龜』に「衣服言音与林邑同俗」ということである。カンボジア北西部の諸国が真臘ではなく林邑の同俗とさるのは一見奇妙であるが、貞観十二年(638)の朝貢のときにそのように記録されたのであり、同俗であることが環王伝に付された理由と考えられる。この4国の朝貢と林邑の関わりについては後にあらためて取りあげる(第3節(2)項)。

(7) 小結——林邑交易圏

林邑と環王伝の付伝諸国には地理的近接性はなく、海を介したつながりである。

付伝諸国には林邑の朝貢使と同道しての同時朝貢の場合がある。婆利、羅刹、婆羅についてはこれが史料に明記されている。ただし羅刹は環王伝編者の誤解による。殊奈にはその可能性がある。甘棠は殊奈（および婆羅）と同じ崑崙人という。僧高など4国については、林邑との同時朝貢は記されていないが、「林邑（環王）と同俗」という。この同俗という記事の背後に林邑が関与した可能性をみることができる（第3節（2）項参照）。なお羅刹は実際には朝貢していないが、林邑が羅刹に交易にきていることが明らかになった。

かくして付伝諸国は林邑が交易関係をもった海域すなわち林邑交易圏とでも呼ぶべきものに属していたとみることができる。その範囲は、僧高など4国（5国）がカンボジア北西部ないしタイであり、婆利は東部ジャワ、羅刹はその東、婆羅はおそらくマラッカ海峡地域なので海域東南アジアの広い範囲にわたっている。殊奈は交趾から海行3ヶ月を要し、甘棠は大海の南というが、この範囲内に収まるのであろう、

3. 林邑の役割

この節では林邑交易圏において林邑が環王伝の付伝諸国との関係において担った役割についてさらに検討する。

(1) 崑崙と林邑交易圏

まず崑崙の語義を確認しておきたい。『新唐書』環王伝付伝の諸国のうち、殊奈と甘棠はともに崑崙人である。殊奈は婆羅と同俗というので、婆羅も崑崙人といえよう。唐代の崑崙には個別の地名を含めて多様な用例があるが、筆者別稿で示すように〔深見 2022〕、そのなかでも重要な語義として南海とほぼ同義の地域総称がある。たとえば松田寿男「崑崙国攷」が「崑崙国と南海諸国との間に区別を認めず、漠然と同じ意味に使用したものがあり、恐らく一般にはそう考えられていたろうと察せられる」と述べ、また「崑崙は、ややもすれば南海と混用された」という〔松田 1987: 270〕のがそれである。崑崙は南海とほぼ同義であり、現在の用語では海域東南アジアつまり海でつながる東南アジアが最も近い。

この点で重要な史料に、崑崙を論じる際にならず取りあげられる『旧唐書』林邑伝の末尾の一文がある。「自林邑以南、皆卷髮黒身、通号為崑崙（林邑より南はみな巻き毛で色黒であり、崑崙と総称する）」という。このうち「皆卷髮黒身」は東南アジアに適合せず、これは私見では『旧唐書』の誤りである。この誤りが生じた原因はわからない。この部分を除外すると「林邑より南は崑崙と総称する」というのであり、崑崙は南海（南蛮）と同義であるというに等しい。

この一文は林邑伝にあっては、その前の文章との脈絡がなく、唐突な印象を受ける。むしろ林邑に続く婆利から墮婆登まで南蛮の7国の導入文のようにみえる。このようにみるならば、まさに崑崙は南海あるいは南蛮と同義なのである。あわせて『旧唐書』真臘伝は真臘を「崑崙之類（崑崙の類）」といい、また「風俗被服与林邑同（風俗や被服は林邑と同じ）」というので、林邑自体も崑崙に含まれると理解できる。なお、『旧唐書』の墮和羅伝にはこの国を崑崙と呼ぶ記述はないが、『冊府元龜』巻970は貞観十二年（638）に朝貢してきた独和羅を「南方荒外崑

崑崙之類（南方の僻地の崑崙の類）」とよんでいる。島嶼部だけでなく大陸部の南部もひろく崑崙に含まれているのである。

林邑交易圏の広がりとはほぼ崑崙と同じとみることができよう。

（2）林邑の役割 1

林邑と環王伝付伝諸国の関係をあらためて検討したい。婆利と林邑は630年に朝貢使が帯同して同時に朝貢している。第2節（2）項で指摘したように、その前年に林邑船が羅刹に至り、その帰国船に婆利の朝貢使が同行したと考えることができる。婆利が独自に船を出したかもしれないが、婆利の朝貢使が林邑の船に便乗したかもしれない¹⁶⁾。

林邑と朝貢使同道しての朝貢（669年）があった婆羅の場合、婆利と同様に、婆羅に至った林邑船の帰国便が利用された可能性はあるだろう。628年に朝貢した殊奈は交趾から海行3ヶ月を要する絶遠の地でそれまで中国にきたことがないといい、635年の甘棠は大海の南という。こうした遠方から1度限りの朝貢使が独自に至るよりも林邑（あるいはその他）に先導されて中国に至るのが自然と思われる。

僧高など4国の同時朝貢（638年）と林邑の関係について、第2節（6）項では4国が林邑と同俗であることが真臘伝ではなく環王伝の付伝とされた理由と考えた。カンボジア北西部に位置する4国が地理的に近い真臘ではなく林邑と同俗とされるのは一見奇妙である。しかしながら、中国側が林邑と真臘の衣服や言語、風俗の違いをどのように把握していたかという問題がある。先にも指摘したように『旧唐書』真臘伝は「風俗被服与林邑同」といい、『唐会要』真臘伝は「風俗与林邑同（風俗は林邑と同じ）」というので、真臘と林邑が同俗とみられている。とすれば、これら4国と真臘・林邑の風俗に明瞭な違いはなかったのである。「南の辺境の小国」である4国がそれぞれ独自に朝貢使を派遣しそれが同年同月という偶然は考えにくい。組織者があっての同時朝貢と考えるのが自然であり、それが林邑であったので「与環王同俗」や「衣服言音与林邑同俗」という記録が残ったと推測できよう。638年に林邑の朝貢は記録されていないが、真臘が有力になる以前の小国分立状態のカンボジア北西部において林邑先導による4国の同時朝貢があったと考えておきたい。真臘が有力になってきた671年の2国朝貢にも林邑が関与していたと推測できよう¹⁷⁾。

第2節（3）項でみたように貞観十六年（642）の婆羅・曇陵・参半3国の朝貢も林邑の先導による同時朝貢の可能性はある。

林邑が小国の朝貢に関わったと思われるものがもう1例ある。『冊府元龜』巻970に次のようにいう。

竜朔元年八月、多蔑国王摩如失利、多福国王難修強宜説、耽羅国王儒李都羅等、並遣使来朝各貢方物。三国皆林邑之南、辺海小国也。

竜朔元年（661）八月、多蔑国王の摩如失利、多福国王の難修強宜説、耽羅国王の儒李都羅などがみな使者を遣わし来朝し方物を貢いだ。三国はみな林邑の南の辺海の小国である。

『新唐書』は多蔑を名蔑と誤る（表1参照）。『通典』や『唐会要』その他にも多蔑伝があるが位

置比定は困難である〔陳 1986: 359 参照〕。多福は他書にみえない。耽羅は済州島にあった耽羅とは同名異地であろうか。3 国とも位置比定が困難であるが、林邑の南の小国とわざわざ注記するので、林邑先導による朝貢の可能性はある。

7 世紀の前半から中葉の林邑交易圏においても盤盤や単單、訶陵などの有力国は独自に朝貢使を派遣したことであろうが、有力国と思われる婆利や真臘も林邑と朝貢使同道の朝貢をおこなっており、小国の朝貢が林邑の案内に依存したことは十分ありうるであろう。すなわち、林邑は自身中国に朝貢するほかに、交易圏内諸国の対中朝貢を組織し先導することで利益を得る、いわば朝貢ビジネスを展開していたと考えられる。

(3) 林邑の役割 2

ひるがえって、朝貢使を先導するだけでなく招諭使を案内した可能性を検討したい。

第 2 節 (2) 項の『唐会要』婆利伝の付伝における「貞観四年 (630) 四月、使至婆利界。有羅刹国」に戻ると、唐の招諭使が婆利と羅刹まで至ったのであり、隋の常駿らに続いて 2 回目である。常駿らが至ったのは 609 年、約 20 年前なので関係者の間にはまだ記録と記憶が存在したであろうから、羅刹まで至ったのはけっして偶然ではないであろう。明確な史料の根拠はないが、武徳九年 (626) クーデタにより帝位につき、翌 627 年貞観と改元した太宗が威徳を輝かせるために南海に招諭使を派遣したと想像できよう。

貞観四年 (630) 四月に羅刹に至るには遅くとも 629 / 630 年の冬季モンスーンで中国を出発したはずである。経由地が多ければ (本稿冒頭でみた達奚通は計 36 国という) 出発は 1 ~ 2 年早かったかもしれない。そして 630 年の夏季モンスーンで帰国したことであろう。一般に中国船が南海に乗り出すのは早くも 9 世紀と考えられており、それ以前の中国の使節の往来は外国船に依存していた。この招諭使は、林邑の人が羅刹で交易する様子を目撃しているので、林邑船を利用したと推測できる。おそらく隋の常駿らも同じであろう。

つぎに第 2 節 (4) 項で取りあげた貞観二年 (628) 十月の林邑・真臘・参半・殊奈 4 国の朝貢に注目してみたい。4 国の同年同月の朝貢であり、林邑と真臘は朝貢使帯同が明記されており、4 国とも朝貢使帯同の可能性はある。殊奈についてわざわざ「絶遠未嘗朝中国」と断っている。交趾から海路 3 ヶ月といい、遠いことが強調されている。『旧唐書』真臘伝ではこの朝貢について「太宗嘉其陸海疲勞，賜賚甚厚」という。太宗がおおいに喜び手厚く賜り物をしたのは真臘だけでなく他の 3 国も含めた 4 国に対してかもしれない。皇帝が朝貢を大いに喜んだとわざわざ記す史料はけっして多くない。この記事の背景には、即位直後に派遣した招諭使が 4 国の朝貢使を連れ帰ったことが想像される。この場合、招諭使は太宗即位直後の 626 / 627 年の冬季モンスーンでなくても貞観に改元後の 627 / 628 年の冬季モンスーンで出発すれば、貞観二年 (628) の夏季モンスーンで帰国し十月の朝貢は可能であろう。自前の航洋船をもたない中国にとって招諭使や朝貢使の円滑な往来のために林邑の積極的な関与が不可欠であっただろう。

唐代の南海遣使については、本稿冒頭でみたように達奚通の南海遣使を和田が明らかにした。和田はこれを上元 (674 - 676) 以前の高宗時代 (位 649 - 683) と考えている。和田はまた那提三蔵が顕慶元年 (656) 高宗により崑崙諸国に派遣された勅使であることを指摘している〔和田 1950: 72〕。その目的は「異菓の採取」であるが、筆者前稿は那提が招諭使であったあるいは

招諭使を案内した可能性を指摘した〔深見 2019〕。

この他に少なくとも 3 件の南海遣使がある。第一に義浄の『大唐西域求法高僧伝』大乘灯禅師伝によれば、大乘灯は杜和羅鉢底（ドヴァーラヴァティー）で出家し、「唐使の郊緒」に随って長安に至り大慈恩寺に入ったという〔足立 1942: 77-81〕。いま詳述しないが、貞観二十三年（649）の墮和羅の朝貢（第 1 節（2）項参照）に対する答礼使として（また馬の引き渡しのために？）郊緒が派遣されたと考えられる。これは墮和羅の貞観年間の 4 回目の朝貢なので、墮和羅は林邑船に依存せずとも中国を往来できたであろう。第二に義浄同書の大津師伝によれば、大津は永淳二年（683）に南海に旅立ち、「与唐使相逐、汎舶月余、達戸利仏逝洲（唐使と同行し、船旅 1 ヶ月あまりでシュリーヴィジャヤに着いた）」という〔足立 1942: 204-205〕。唐使の目的地は史料にいう戸利仏逝（室利仏逝）かもしれないが詳細は不明であり¹⁸⁾、この船の帰属についても手がかりがない。第三は有名な密教僧の不空が僧俗 21 人を従えて玄宗の勅書を伴う国家使節として、天宝二―五年（743―746）に師子国と五天竺を往復したことである〔藤善 2013: 369-384〕。彼らの乗船は賛寧『宋高僧伝』巻 1 不空伝などによれば崑崙船であった。この崑崙船は林邑の船かもしれないが、室利仏逝や訶陵など他の崑崙の船かもしれない。

唐の南海遣使はどうやら和田が当初考えたほど少なくはないらしい。そして我々はここにもう 1 例、貞観四年（630）四月の婆利と羅刹への使者の到来を加えることができる。さらにもう 1 例、明確な史料的な根拠はないが、貞観二年（628）十月の 4 国の朝貢をもたらしした招諭使が考えられる。この 2 回の招諭使の往来には林邑船が用いられたことであろう。先の達奚通と那提の場合には手がかりになる史料がないが、林邑船が用いられた可能性は大きいであろう¹⁹⁾。

おわりに

林邑と『新唐書』環王伝の付伝諸国の関係は地理的近接性ではなく海をとおしたものであった。その諸国の範囲は地域総称として南海（南蛮）と同義の崑崙にほぼ相当する。具体的には北はタイ・カンボジアから、南はマラッカ海峡そして東部ジャワとその東におよび、海域東南アジアをひろくカバーしている。林邑がこの海域で交易活動をおこなっていたことは明らかで、林邑交易圏と呼ぶことができよう。

林邑はこの交易圏において真臘・婆利・婆羅などと朝貢使帯同による対中同時朝貢をおこない、また僧高など小国の対中朝貢を先導する役割を担っていたと思われる。林邑は自ら中国に朝貢するだけでなく、諸国の朝貢の組織役、朝貢使の案内役を務めることで利益をえる、いわば朝貢ビジネスを展開していたのである。このビジネスには逆の方向の使者の動きも含まれていた。すなわち林邑は中国の招諭使を諸国に案内した。自前の航洋船をもたない中国が南海に使者を派遣しようとするとき、南海の入り口にあたり、かつ広い交易圏を有する林邑に依存したのは当然というべきであろう。

和田が指摘したとおり 7 世紀の南海からの 1 度限りの朝貢に唐からの招諭使の派遣が関わっているだけでなく、招諭使と朝貢使の往来に林邑が貢献し、林邑はいわば朝貢ビジネスを積極的に展開していたのである。

謝辞

本稿は科研費「東南アジア史における相対年代の統合に関する研究：7-10 世紀を中心に」基盤研究 B 課題番号 25284140（代表者深見）2013-2015 年度の研究成果の一部である。

参考文献

- 足立喜六訳注 1942『大唐西域求法高僧伝』岩波書店
- 生田滋 2004「海域東南アジア史研究の回顧と展望」『東洋史研究』63-3: 132-143.
- 石澤良昭 2013『新・古代カンボジア史研究』風響社
- 伊東利勝 2001「綿布と旭日銀貨——ビュー、ドヴァーラヴァティ、扶南」山本達郎編『岩波講座東南アジア史』第 1 巻、岩波書店: 199-226.
- 桑田六郎 1993a「赤土考」（原著 1919）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院: 3-33.
- 桑田六郎 1993b「三仏考」（原著 1945）桑田六郎『南海東西交通史論考』汲古書院: 183-275.
- 桑原隲藏 1989『蒲壽庚の事績』（原著 1935）平凡社（東洋文庫）
- 弘末雅士 2014『人喰いの社会史——カンニバリズムの語りと異文化共存』山川出版社
- 深見純生 2001「マラッカ海峡交易世界の変遷」山本達郎編『岩波講座東南アジア史』第 1 巻、岩波書店: 255-283.
- 深見純生 2019「七世紀の東西回廊を行く——玄奘・那提・義浄」肥塚隆編『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版: 63-88.
- 深見純生 2022「海域東南アジアにおける唐代の崑崙」『カンボジアの文化復興』32: 3-24.
- 藤善真澄 2013「金剛智・不空渡天行釈疑」藤善真澄『中国仏教史研究——隋唐仏教への視角』法蔵館: 369-384.
- 松田寿男 1987「崑崙国攷」（原著 1941）松田寿男『松田寿男著作集第四巻』六興出版: 251-275.
- 宮林昭彦・加藤栄司訳注 2004『現代語訳南海寄帰内法伝——七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館
- 和田久徳 1950「唐代の南海遣使」『東洋学報』33-1: 64-74.
- 和田久徳 1985「前近代アジアの海上交通」『南島』5: 1-19.
- 陳佳栄・謝方・陸峻嶺 1986『古代南海地名彙釈』中華書局
- Coedès, G. 1968: *The Indianized States of Southeast Asia*, Honolulu.
- Krom, N. J. 1931: *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*, 2nd. ed., 's-Gravenhage.
- Wolters, O. W. 1967: *Early Indonesian Commerce*, Cornell University Press.
- Wolters, O. W. 1974: "North-Western Cambodia in the Seventh Century," *BSOAS*, 37-2: 355-384.

注

- 1) このうち磨臘は 662 年に 2 回目の朝貢があり、また哥羅舍分の朝貢を 660 年とするのは『通典』巻 188 哥羅舍分伝に引きずられた間違いで 662 年が正しい（第 1 節（4）項参照）。
- 2) 外国伝は通常国名で始まるが、本稿の付伝には国名以外で始まるものもある。とりわけ第 2 節で検討する環王伝の付伝では国名で始まるのは最初の婆利だけである。羅利以下は独自の伝として扱っていないような、あるいは婆利で始まるひとつの付伝の中で主題が婆利・羅利・婆羅・殊奈・甘棠、そして僧高など 4 国と遷移するような印象を受ける。本稿では国（または国のまとまり）の数だけ付伝があることにしている。
- 3) 『梁書』巻 54 扶南伝は冒頭に扶南の位置や産物を記した直後に頓遜、毘騫、東の大海中の諸薄、馬五洲、自然火洲について記述し、その後に本来の扶南伝に戻る。『新唐書』ならば頓遜などは扶南伝の後に置かれたであろう。『隋書』巻 82 婆利伝の末尾に「于時南荒有丹丹、盤盤二国、亦来貢方物、其風俗物産、大抵相類云（その時南の僻地に丹丹と盤盤の 2 国があり、これらも方物を貢いできた。その風俗や物産はだいたい（婆利と）似ている）」と付加されているのは付伝といえるかもしれない。
- 4) 墮和羅伝に続いて、その属国の曇陵と陀洹の伝がある。陀洹伝の末尾に「貞観時、並遣使者再入朝」といい、「因弓馬・銅鐘、帝与之」という。貞観年間に曇陵と陀洹の 2 国あるいは墮和羅と陀洹の 2 国が 2 度朝貢し、太宗が求めに応じて馬と銅鐘を与えたらしい。馬を与えられたのは墮和羅かそれとも陀洹か分明でなく、

記述に混乱がある。なお堕和羅と陀洹の関係を含むドヴァーラヴァティーの消長については伊東〔2001〕参照。

- 5) 原文は次のとおりである。

五年、林邑献火珠、状如水精、日正午時、以珠承景、取艾衣之、即火見、云得於羅利国。婆利国遣使、随林邑使、献方物。

五年、林邑が火珠を献上した。形は水晶のようで、毎日正午に珠で景を受け、もぐさを敷くと火が出る。羅利国で得たという。婆利国が遣使し、林邑の使者に随って方物を献上した。

ここで五年を五月の誤りと解釈する根拠は、四年二月の行の次にこの五年で始まる行があり、ついで七月の行、十二月の行、是年の行があつて、五年九月の行に続くことである。しかし五年は正しいがそれを置くべき位置を間違えた可能性もある。この場合、『旧唐書』婆利伝と『太平寰宇記』婆利伝の四年は五年の間違い、さらに次項で述べる『唐会要』の四年とも矛盾することになるので、五年は五月の誤りと解釈しておく。

- 6) 注2で述べたように、羅利以下は独自の伝ではないかのような印象を受ける。またすぐ後に取りあげる『唐会要』の羅利伝も、婆利伝が終わりきる前に羅利伝が始まる印象である。なお環王伝付伝の羅利伝以下を通読すると、羅利伝末尾近くに赤土があり、婆羅伝は赤土で始まり、婆羅伝末尾近くに環王があり、殊奈伝は環王で始まり、殊奈伝末尾近くに貞観二年があり、甘棠伝は九年、僧高等伝は十二年で始まるという、意図的な文章の流れがあることに気づく。
- 7) 常駿らの赤土遣使に関しては桑田〔1993a; 1993b〕に詳しい。しかし桑田は羅利にほとんど関心を払わない。なお常駿らの赤土出使の年次を『隋書』の本紀は大業四年（608）とし、赤土伝は三年（607）とするという明らかな矛盾がある。
- 8) ウォルターズもこの引用冒頭の「使至」を中国の使者が至ったと読んでいる〔Wolters 1967: 198〕。
- 9) 海域東南アジアにおける異界伝承とその意義については弘末〔2014〕参照。
- 10) 「はじめに」に記したように、和田が列举する1回限りの朝貢国に羅利は含まれない。和田も『新唐書』環王伝という羅利の朝貢を間違いと考えたのであろう。
- 11) このほか『冊府元龜』巻969によれば、北魏正始四年（507）九月にも、朝貢国の列举の中に婆羅がある。南朝ではなく北朝の北魏への朝貢であり、時代が離れており、詳しい情報はないのでここでは扱わない。
- 12) 曇陵と参半の位置は正確には不明だがいずれにせよタイからカンボジアにかけてである。次項の貞観二年（628）十月の林邑・真臘・参半・殊奈4国の朝貢および（6）項の貞観十二年（638）正月の僧高等4国の朝貢の背景を参照すれば、この貞観十六年（642）正月の3国の朝貢に林邑が介在した可能性がある。なお『冊府元龜』巻970には同年五月の林邑の朝貢が記されている。
- 13) 桑田は婆羅を婆利の異字とみなしている〔桑田 1993a: 9〕。なお、桑田は『冊府元龜』巻970によって婆羅の4回の朝貢がいずれも林邑の使者とともにくると記すが、実際には婆羅の朝貢は2回であり、林邑とともにくると明記されるのは懿宗二年だけである。しかし桑田は後に婆羅について根本的に異なる意見を述べる〔桑田 1993b: 205〕。
- 14) 煩雑なので詳論しないが、婆羅と字形や字音の似た地名はマラッカ海峡方面にいくつもみつかるといえる〔陳 1986: 731-738 参照〕。周知の史料から3件だけあげる。『隋書』赤土伝で赤土の四囲をいうときの西の婆羅沙、義浄『南海寄帰内法伝』が南海諸洲を列举する冒頭の婆魯師、賈耽『皇華四達記』の婆露。
- 15) 『太平寰宇記』巻177と『太平御覧』巻788に短い殊奈伝があるほか、『冊府元龜』巻957外臣部国邑、同巻960外臣部土風、同巻970外臣部朝貢に言及される。
- 16) 後者の場合、婆利の朝貢使の帰国も林邑船に依存したであろうから、林邑船は629年と630年に続いて631年にも、したがって3年連続で婆利にきたことになる。
- 17) これら4国と2国の朝貢も内陸ルートではなく海路によるであろうが、メコン水系経由かチャオプラヤー水系経由かはわからない。
- 18) 室利仏逝の直近の朝貢は、その初回の朝貢である咸亨年間（670－673）である。
- 19) 仮に達溪通と那提が林邑船を利用したとすれば、明示的史料はないものの、林邑交易圏はベンガル湾を越えてインドに及んでいた可能性がある。和田も達溪通が南インドまで至った可能性を指摘している〔和田 1950: 69-70〕。

研 究 ノ ー ト

アンコール王朝で働いていた役職高官たち

—碑文記載を立証する壁面浮彫り絵図考察—

上智大学教授・上智大学アジア人材養成研究センター所長

石澤良昭

1. アンコール・ワット建立は「功德を積む」宗教活動

アンコール・ワットは巨大な石造の大伽藍である。天空にそびえ立つその尖塔、急斜面の大階段、大回廊、本殿まで続く 540 メートルの長い参道に、私たちはある種の畏怖に似た衝撃と感動を覚える。アンコール遺跡の崩壊した祠堂や大伽藍を見ていると、現在の私たちの時間の感覚では到底計りきれない、悠久の時間を感じる。当時は建設機材もなく、すべて手仕事であった。私たちは崩れた石材の山や放置された廃墟を見る時、かの昔の「時代」という圧力を感じる。

アンコール王朝が終わり、数多くの寺院がその役目を終え、そして、ただの「石ころ」となった時、その石材はどこから来たのか、いつの時代のものか、などという新たな疑問を呼び起こし、そこから「探索」と「遺跡科学」が始まる。滅び去った寺院から、その魂が抜け出し、これは何であるかを探す新しい魂が吹き込まれ、それがアンコール王朝時代の人々が託した無言の使者となって、現代の私たちに問いかけてくるのである。

アンコール遺跡は観光の面では知名度が高く、多くの来訪者に感動を与えてくれる。しかし、どんな王朝であって、いつの時代に栄えたかについては、あまり知られていない。それは当時の王朝の歴史を伝える史料がヤシの葉の「貝葉」に記されていたため、消え失せてしまったのである。そして、1930 年代に、当時の文字で書かれた古クメール語碑文の解読に成功し、石壁などに刻まれた碑文を読み込み、遺跡の建立年代の確定や王の在位の確認に使用してきた。

アンコール遺跡そのものには、篤信の証と、それが造られた当時の最先端の土着の技術およびその時代精神が盛り込まれている。それら都城や王宮、そして、国家鎮護の大寺院等を建造するためには長期間にわたり、数千人から数万人に及ぶ建寺作業員が必要であったと推測される。すべて人力によりこれら巨大伽藍を構築したのであった。当時のカンボジアの人々のひたむきな寺院への奉仕活動は「功德を積む = punya, K.124 碑文」行為でもあったと思われる。しかし、その建設現場では実際にはカンボジア人以外の作業員たちも手伝っていたと考えられる。

それは当時のカンボジア人たちにとって寺院の造営は涅槃 (= nirvāṇa) に向けての第一歩であったと推察される。人々は輪廻転生を信じていた。あれだけ巨大な伽藍を、なぜ短期間のうちに建立できたのか、その民族エネルギーとは何か、石造伽藍を造営できた当時の社会活動の構造を探ってみたい。しかし、今までにこうしたアンコール王朝の歴史の基本的枠組みなど、貝葉史料の消失のため歴史解明が遅れている。

一つの仮説として往時のカンボジアでは、太陽と雨水と高い気温に恵まれ、肥沃な大地が広がり、豊かな生産活動により村人は日常の衣食住に満ち足りていた。その次は「来世」について考える必要があった。当時の社会においてはそれなりに宗教的奉仕活動が高く評価されていた。王を中心とした諸儀礼を通じて神がかり的政治活動が機能し、満ち足りた日常の食糧が生

産されていたのであった。実際には村人のひたむきな神仏への篤信と、深い信仰と、来世への救済を願い、それに加えて輪廻転生への篤い気持ちが高まり、それを実現するために村人は喜捨を行ない、時間を見つけて自発的労働奉仕として寺院造営に参画していたと思われる。特に乾季には村人は田植えの仕事などの農作業がないので、建寺作業を手伝っていた。その現場では、たくさんの建寺作業員や数百人の単位の石積み石工たち、各地からの篤信家の村人たちが来ていた。謀叛を起して奴隸身分に落ちた人たち、さらに、無名のたくさんの戦争捕虜のチャム人たち、それに身体を拘束され、奴隸として売られたシャム人や山岳民族たちが、建寺作業員としてアンコール・ワットの石積み作業を手伝っていた。その結果約 32 年間かけて、65 メートルの大尖塔を完成させたのである。これを実現した王と大臣たちの篤信の時代精神とは、一体何だったのであろう。こうした諸史料の欠落を補いながら碑文史料を中心に再検討いたし、同時に碑文の記載を立証する壁面浮彫り絵図を証拠として提示してみたい。

2. アンコール王朝時代の社会・経済・文化を検証する一文字の起源から

碑文というのは、政治と宗教色の強いアンコール時代の史実を後世へ伝える「^{なま}生」の史料であり、物貨や土地の寄進碑文が中心である。雄弁に物語るこの碑文史料に耳を傾け、眼光紙背（看破する力）に徹する方法論とそれに伴う研ぎ澄まされた炯眼をもって解説を試みたい。碑文は往時の人たちが伝えたい最も重要な自分の篤信の気持ちとそれを証明する奉納品のリストを記している。だから寄進者たちは、消えることのない石壁や、石柱の表面にその篤信の気持ちを刻み込み、永久に後世に伝えたいと願ったのであった。その碑文を作成し、奉納しようとした意図や目的は何か、来世に向けての輪廻転生が目的なのか、どうしても書かずにいられない功德の気持ちを伝えたかったのかわからないが、本当に切実な事実が背景にあったと思われる。人々は超自然的な存在への畏れ、また逆に戦勝を祈願しての奉納もあった。

碑文はこうした特定の目的をもって奉納されていた。その碑文を「生」の史料として捉えなおし、寄進の記録と施主の篤信の語り部集録として、原本の記録通りに解題を加え、再評価しながら、新しい碑文の読み込み方法論にもとづき、碑文史料を私なりに深く読み込んでみたい。

カンボジアの古クメール語碑文は南インドの起源の字母（パルラヴァ文字の改字でラピタ文字）で綴られている。もともと碑文は5世紀ごろからインドのサンスクリット語文に添文的に併記されて始まった。この文字の使用はインド系文化やそれに伴いヒンドゥー教と仏教がカンボジアに浸透してくる一つの証拠となっている。どの碑文もほとんどが厚い石板や石柱、もしくは建物入口の側壁や門柱に刻まれている。

碑文は左上から横書きではじまる。いわゆるカンボジア碑文(K.の印で碑文番号が付けられる)の種類には、古クメール語、サンスクリット語、パーリ語、近世クメール語、モン語で書かれており、1970年の段階で登録碑文1050個のうち、ほぼ半数が古クメール語、あとはサンスクリット語およびサンスクリット語・古クメール語併記碑文である。

碑文を通常の史料として扱うには、いくつもの難点がある。①その記載内容は多くの場合、前後のつながりがなく、突然に寄進目録のみが揭示され、それらは篤信する個人から喜捨された動産や不動産のリストでもある。それに加えて、②砂岩の石質からくる表面剥離や破損により判読できない個所が多い。③碑文の数量の割には当時の一般社会の状況や社会通念などにつ

いて貧弱な内容しか判明しない。そして、④ほとんどの碑文が宗教的喜捨および王権に関する言及であるために、多くの場合王を頂点とする一握りの人たちの社会活動しか知ることができない。⑤それ故に、こうした史料上の記載内容の偏向から、古代・中世・近世カンボジア史の著述は、どうしても王（族）およびその政治や祭儀に直接関与する高位実務者たちの歴史が中心に描かれてしまう。⑥現存する碑文は、これまで少数の限られた人たちが奉納した特殊な文書ではあると考えられ、史料的限界があることもこれまでに指摘されてきた。

3. アンコール時代の村落社会と経済活動

①碑文作成を命じた人は誰かについて調べてみる。碑文はサンスクリット語と古クメール語で書かれており、両語併記の碑文もある。この碑文作成を命令したのは、王、王族、グル（＝王師）、大臣、高官、バラモンと称する祭儀官や儀典担当者、冠称タイトルを持つ地方の有力者、地方の長などである。碑文には必ず作成時の王名が明記されており、王名が欠落の場合は、王の不在または王権が弱体化していた時代であると考えられる。

②サンスクリット語碑文は神へ奉仕する言葉である。サンスクリット語は宗教的色彩が強く、神々や仏への希求文、王と王族の系譜、王の事跡、王への賛美、神仏への帰依、そして文末は呪詛の言葉で終わる。

③古クメール語碑文は、主として寄進財貨目録である。が、裁判の記録や祭儀担当の世襲一族の伝記もある。古クメール語碑文は、寄進の不動産や動産を掲げ、より日常の具体的な生活状況について多く言及している。王の命令、田地の境界、土地の売買、土地紛争の裁判、そして寄進財貨が一つの神仏だけの専有物なのか、他の寺院との共有物なのかが明示されている。当時の権利関係は古クメール語で書かれていて、私有財産が認められていた。だから村落には世俗の村人の住む村落と隣接もしくは離れたところに結界的世界の寺院（神の区域）がはっきり区分されていたことがわかる。

④碑文には豊穡な農村風景が載っていると思われる。寄進された家産、不動産などのリストを見ると、稲田・田地・園地・圃地・栽培地などがあり、周辺には椰子や檳榔樹、砂糖椰子、バナナ・マンゴーなどの果樹も植えられていた。その村落や寺院の近くには、深い森（ジャングル）、丘、低地、池、沼、灌漑用水路、牧場、崩れた田地があり、二輪牛車が通るなど田園風景が広がっていた。そこでは豊穡な土地が広がり、村ではゆったりとした時間が流れ、近くの寺院では来世に向けての敬虔な祈りが捧げられていた。

⑤村の生業は主食の米を生産する稲作である。村に住む人たちは稲田をつくり、田畑を耕し、農業を基盤とした生業形態であったと思われる。そうした寄進リストの中には、とりもなおさず当時の村の中で副業として製作された手作りの仏具や法具など、それに日常生活や経済活動の中で最も高級な物品が寄進されている。また、広い田地が寺院に寄進され、その寺の荘園では寺男・寺女が耕作していた。この寄進リストを丹念に検析することにより、村の日常の副業的生産活動と村落経済の実態が判明してくる。

4. 約 600 年にわたる「栄華」を語る「記録（史料）」が消えてなくなった

アンコール王朝時代の人たちは、いくつもの荘厳な大遺構の遺跡を私たちに残してくれた。

私たちはその大伽藍に感服し、納得する説明のないまま、その栄夢を語り継いできたのであった。それは当時の栄華の記録「史料」が消えてなくなり、遺跡を創り出した当時の人たちのことを考察する手がかりが限られてしまったからである。アンコール王朝時代の当時の記録は、貝葉に書かれていた。カンボジアでは紙が手に入らなかったのである。貝葉は植物の葉紙であるから、時間が経つと虫害や乾燥で消滅してしまった。結局、唯一の当時の記録は、石壁や石柱に刻みこまれた約 1,200 あまりの長短の碑文だけになってしまったのである。

アンコール王朝約 600 年の繁栄を創り出したのは、どんな役職者や高官たちであったのだろうか？アンコール王朝の隆盛はこれまで遺跡として現存する大都城と国家鎮護寺院と大王宮を検証しながら語られてきた。B.Ph. グロリエの論文が提唱しているが、アンコール地方とその都城は広大な扇状地上に建設され、おおまかに言って 1 キロ行って約 1 メートル下がる大傾斜地であった。現地のバライ（貯水池）は少し高いところに盛土堤防で造られ、そこに雨季の雨水が貯水され、自然の傾斜地を利用して下位の田地に導水されるのである。試算では約 7 万ヘクタールが田越灌漑され、年 2 回以上の籾米の収穫があり、それにより約数 10 万人の人たちを扶養できたという。以下のページに挙げた官職に就いていた王宮内の人たちや建寺作業員、一部の村人や関係する役職たちはこの 2 期作がこの食糧の恩恵を受けていたと思われる。その結果として、各地から人が集まることで人口密度が高まり、主として建寺作業員たちにより大都城が造営され、石造の大寺院や木造の大王宮が建設されたのである。建築機材がない当時としては、人力だけが頼りであった。そのためには結論として大人口の集中が必要であった。

5. 最初のシャム人（タイ人）の記録は？

それでは建設作業員と推定される当時のシャム人（現在のタイ人祖先）はどのようにアンコール地方へやってきたかを考察する。シャム人については、唐時代（618－907 年）に雲南地方の南詔国（649 頃－902 年）および大理国（937－1254 年）と交流しながら、8 世紀頃よりメコン、エーヤワディー、チャオプラヤーなどの大河川に沿って南下し、13 世紀前後からは、東南アジア大陸部の山間盆地や河岸段丘などに小王国を建て、高床式住居、焼畑陸稲や水稻耕作、守護精霊を護持し、均分相続などを基本とする人たちである。これらのタイ系諸族は海へ向かって流れるいくつもの大河川に沿って、緩慢な南下と移動を続けてきた。そのタイ系諸族の中でシャム（タイ）人はその一分派であり、ミャンマーのシャン人やラオスのラオ人も同一分派である。

このシャム人たちは 13 世紀ごろには、チャオプラヤー川流域方面にまで進出し、先住のモン人、クメール人、ビルマ人、チャム人の間に混住していたと思われる。シャム人は各地で村落を造り、小規模な村・共同体（ムアン）を形成しながら、『真臘風土記』の記載史実のように、各地で地元先住民族と争いながら、居住地を拡大していったと思われる（後述）。

彼らがチャオプラヤー川流域方面およびその近隣に定住し始めた時代がいつであったかを示す明確な記録は未だ見つかっていない。しかしながら、シャム人が混住していた地域でクメール人、ビルマ人、チャム人の記録の中にシャム人の記録を断片的に見つけることができる。

①最も古いシャム人の記録がベトナム南部ニャトランで発見された。1050 年のチャム語のポ・ナガル碑文の中に、シャム人奴隷の記録がある。当時のシャム人が、チャオプラヤー川流域から遠く離れたカンボジアやベトナムおよびメコン川流域まで、陸路または雨季の小河川を川舟

で乗り継ぎ、その足跡を残している。こうした断片的な記録はシャム人がカンボジアや東北タイなどに広く混住しながら、各地へ進出していた史実がいくつも伝えられている。さらに、②シャム人奴隷達の件について1120年頃ビルマのパガン碑文にも載っている。彼らは寺院奴隷の寺男・寺女であった。シャム人はエーヤワディー川流域方面各地にも分住していた。③12世紀前半のアンコール・ワット第1回廊南側の浮彫りの絵図に「傭兵シャム人」がシャーム・クック (Syām Kuk = その意味は「羽根飾りをつけたシャム人」の意 (K.298. (2)、後出の13-G項参照碑文)) と大きく描かれ、王の行幸に随伴などしていた。この傭兵は数千人以上に及んでいたと推定される。12世紀にはシャム人がアンコール王朝の兵員として各地を転戦していた旨、その史実を伝えている。さらに王宮内外では馴象の使い手として重宝がられ、特に戦象軍を編成し、各地を転戦していた。④1296年の『真臘風土記』の記録の中では「暹人」(シャム人) が村落を荒らし、シャム人と交兵したために、遂に地方の村落はみな広々とした荒地となる」と伝えている。シャム人が13世紀末頃にアンコール地方のカンボジア領まで入ってきて、勝手に生活の場を広げていたとの報告である。こうした記録から、シャム人はインドシナ半島のイラワジ川からメコン川流域の広い地域にわたって先住の現地人たちと混住しながら活動していたことが判明した(後出の13-I項参照)。

6. チャオプラヤー川流域近隣に居住するシャム人とアンコール王朝の「灯明の家」の設置

当時のインドシナ半島の政治地図からいうと、チャオプラヤー川流域にかつては先住民族のモン人が居住していた。おそらく6世紀(～11世紀)にチャオプラヤー川下流域のドヴァーラヴァティ (Dvāravatī) 国と上流域のハリプンジャヤ (Haripunchai) 国(11世紀-13世紀)(ランブーン)の2王国に分立していた。このモン人たちはシャム人たちとの抗争に敗れ、数回の戦闘の結果、敗戦により少数民族となってしまった。

11世紀前半にはスーリヤヴァルマン1世(1002-1050年)がロップリー地域まで攻略し、ここはアンコール王朝の西方の軍事と政治の拠点として機能していた。カンボジア人たちは、ロップリーからさらにチャオプラヤー川流域沿いに北上し、森林の産物を求めて上流のスコタイ地方まで進出していた。

東南アジア史上の全体から考えるならば、13世紀後半はフビライ(元朝初代皇帝・在位(1260-1294))の元朝軍が東南アジアに来攻し、インドシナ半島北部トンキン湾に面したベトナムの陳朝、ミャンマーのパガン朝、インドシナ半島南部沿岸を拠点としたチャンパー国、メコン川とトンレ・サーブ湖を結んだ内陸のアンコール王朝などの諸国に衝撃を与えた時代であった。このタイ系諸族は、この13世紀から14世紀にかけての間に、チャオプラヤー川流域方面において小王国もしくは地方の政治勢力として地歩を固めつつあった。タイ北部のチェンマイ王国(13世紀ランナータイ王国の首都)、中部のスコタイ王国(1240年シーインタラーティット王が即位)、メコン川中流域のラオスのランサン王国(1353年立国ルアンパバーン)、そして古くから水運の拠点として拓けていたチャオプラヤー川下流域の前期アユタヤ王国(1351年立国)、そして、ビルマには同じタイ系諸族のシャン人の国々などがあった。これらはみな広義のタイ系諸族の人たちであった。

スコタイは、アンコール王朝の西方の拠点ロップリーからさらに西北に336キロのヨム川

河畔に建設された地方都城であり、そこは1220年頃までカンボジア人太守が統治する地方であった。その北方約60キロの副都城シーサッチャナーライには、ジャヤヴァルマン7世（1181－2018？）が12世紀末ごろ設置した121ヵ所の「灯明の家」のうち、その最北端の「灯明の家」が設置されていた。アンコール王朝最北の拠点となった。

7. 「歴史人口学」と比較検討による建寺作業員たちの人数

(1) 一つ参考になる人口推計である「歴史人口学」研究の成果を引用したい。1000年を区切りとして、当時の世界の都市人口の研究がなされたが、諸説ある中で、大雑把に言って、コルドバ（現スペイン）で約60万人、コンスタンチノーブル（現トルコ）約50万人、北宋の開封（中国）約40万人に次いで、アンコールは第4位の約25万人の人口であったという。その時カンボジアでは、プノンバケン寺院を建立しつつあったヤショヴァルマン王（889-910）の時代下にあった。その約200年後の12世紀初期から13世紀にかけてアンコール王朝は最盛期を迎え、人口が増加し、仮説ながら、約40万人からそれ以上の50万人、60万人の人口が集中していたと推定される。

(2) その証拠となる資料の一つを掲げると、碑文には東北タイのピーマイ寺院方面から毎年数百人の人たち（寺男・寺女）がダンレック山脈を越えてアンコールへやってきたという。各地の村々から牛車を仕立て、この地方の特産品と思われるインゴット（鋳塊）、岩塩や奉納する荘厳を携えていたという。彼らは建寺を手伝う関係者といわれている。明確な数字の記録ではないが、カンボジア人たちは功德を積むため国内各地から建寺の手伝いにやってきた人たちであった。そして、乾季の6ヵ月間は村では畑仕事がなく、来世に向けた積善のため建寺作業を手伝っていた。

(3) バイヨン寺院の浮彫りの兵員の中に、独特の風貌と装束をまとった非カンボジア人一団が描かれている。各地から連行された戦争捕虜や王位継承戦争で敗れ、奴隸的身分に落された謀叛者たちが、建寺作業を手伝っていた。それに身体的に拘束されたシャム人やモン人、それに山岳民族出身者がいた。みんなアンコール都城に連行されてきた人たちであった。

(4) 王の建寺熱の命令を、実現するために大臣や担当の役職高官は、どのように人手と作業員を確保したか考えてみたい。①各時代の王は国内各地遠征により、その捕虜と家族をアンコールへ連れて、労役に使っていた。これらカンボジア人は奴隸身分であったが、彼らに農作業や道路建設・寺院造営を手伝わせていた。③一般のカンボジア人は王への奉仕活動（ラージャカーヤ）の税金奉納するため働いていた。②何度も攻防戦を戦ったチャム人捕虜たちは奴隸身分の建寺作業員であった。④雨季のサンパン（川舟）で居住地を求めてやってきたシャム人小集団の人たちは身柄を強制的に拘束され、寺院建設の現場で働かせられていた。拘束されて寺院作業員となった。彼らは寺院建設現場で働いていたが、何らかの形で日常の粳米の配給があったと思われる。

(4) 粳米の寄進と配給の事例として13世紀のプリヤ・カーン碑文（K.908）を再検討する。プリヤ・カーン寺院内で働く寺男・寺女に粳米が供与されていた記録がある。その粳米の重量計算単位がサンスクリット語の「カーリ（khāri）」で表示されており、どれくらいの重量の粳米なのか、アンコール時代の度量衡については当時の貝葉史料消失のためはっきり判らない。し

かし、一つの仮説として、このカーリ (khāri) の単位そのものがサンスクリット語であることから、逆に古代インド史研究の成果を参照し、考えてみたい。それで、インド古代史研究参考文献として L. レヌーと J. フィリオザ両氏の著書 *L'Inde Classique*, (tome II) (p.758) (Hanoi, 1953, EFEO) を参照し、インド古代の度量衡の中から「カーリ (khāri)」の数値を計算いたしたい。計算式によれば「1 khāri = 16 dṛoṇa であり、1 dṛoṇa = 16 prastra の計算となる」岩本氏の結論は 1 カーリ (khāri) は約 96 キロであるという。

(5) さらに、プリヤ・カーン碑文 (K.908) の関係箇所を訳出してみたい。プリヤ・カーン寺院では寺院内で働く寺男・寺女に対して粃米や食べ物の配給があったという記録である。

- ①「高僧と見習い僧の許にいる召使い (寺男・寺女) に対して、無料で配給される粃米は 22 カーリ (khāri) である。」(碑文 L II) : 換算すると =2,112kg の粃米 (米俵にして 35 俵) が届いていたという。
- ②「高霊 (仏) のために働いている人 (寺男・寺女) の決められた分量は (合計) で毎日 97 カーリ (khāri) であった。」(碑文 L III) : 換算すると =9,312kg となり、米俵に 155 俵である。
- ③「高僧と見習い僧の許に住み込む召使い (寺男・寺女) を毎年働き続けるために (供給される) 粃米は 183 カーリ (khāri) であった。」(碑文 CXXV III・CXXI Z) : 換算すると =17,568kg となる (米俵で約 293 俵)。

こうした外国人建寺作業員を常時数千人、あるいは数万人確保することで、アンコール地域では次々と大寺院が造営されていた。国内各地の寺院内で働く寺男・寺女たちもアンコール地方まで常時動員されていた。

(6) アンコールの出稼ぎから生きて戻った人または逃げ帰ったシャム人はたくさんいた。その中の有力者は、功德のため寺院建立を、地元の有力者や土豪に進言していた。そして、自分自身のアンコールにおける建寺の経験を活かして、地元の寺院や祠堂の建設を手伝った。それ故に、チャオブラヤー川流域のスコタイ、アユタヤ、ロップブリー、それにマレー半島のタイ南部のプラサット・ムアンシン、南シナ海に面したチャンパ王国のミソン (ベトナム南部) に、アンコール建築様式系の影響を受けた石造り寺院や祠堂の建築が建っているのである。

(7) 建寺作業員の主力は乾季に王への奉仕税 (ラージャカールヤ) のために動員されたカンボジア人農民の数万人の作業員たちであったと思われる。建設現場ではたくさんのシャム人やチャム人、それにモン人、山岳少数民族などがいた。しかし、逃げ帰ることも多かったと思われる。

8. バライ (貯水池) の粃米を食べていたのは誰か

B.Ph. グロリエの計算によれば、実際には、ハリハラーヤ都城 (9 世紀後半) に初めて貯水池が建設され、それは平地上に土塁堤防で囲い、貯水していた。10 世紀初めには東バライ貯水池 (ヤショダラタターカ) が造られ、11 世紀にはさらに大きな西バライを造り上げた。この西バライは 4,200 万から 7,000 万 m³ の貯水能力を持ち、1,400ha の稲田を潤すことができたという。やがてアンコール都地域内に縦横に張り巡らされた水利網は、全盛期には 7 万 ha を灌漑していたという。しかしながら、当時のバライについての詳しい史料が欠落し、さらに、これら水路網の整備による米穀の生産高は正確にはわからない。しかし、誰がその粃米の恩恵を誰が受けていたのか、誰が食べていたのか、これらの記録が消え、沈黙したままである。それでどんな

人たちが粳米の配給を受けていたかを碑文史料の中から考察してみたい。

仮説ではあるが、バライ（貯水池）による二期作の集約農業の粳米を食べていた人たちは誰か、配給を受けていた人たちは誰か、考えてみたい。具体的に碑文史料から挙げていく。

- (A) 碑文に載った役職者や高官、その家族と召使い（奴隸的身分の人たちも）であった。彼らは称号と位階をもっている人たちであった。さらに宗務関係者とその家族、そして、下級官吏の人たちとその召使い（奴隸的身分の人たち）であった。
- (B) 建寺に関係する現場の特別職の人たち、それは石工を含めて石切場の採石人、石材加工技術者たち、建寺作業員たち、合計で数千人から数万人に及ぶと思われる。その工期が10年または20年に及ぶこともあった。アンコール・ワット建設の場合は32年に及ぶ。
- (C) 『真臘風土記』に載るカンボジア人もそれなりの担当部署があり、米穀をもらいうけていたと思われる。

9. 「碑文」に刻まれた人たちとは、どんな人たちか？

1860年博物学者 H. ムオがアンコール遺跡を訪れ、「高い文化をもっていた王国」と看破したが、しかし、アンコール遺跡についての謎は深まるばかりであった。1867年のドラポルト調査団に医師として参加した J. アルマン (J. Harman, 後に駐日フランス大使) は、石柱に刻まれた碑文を拓本に取り、フランスへ持ち帰った。そして専門雑誌に報告として拓本を載せた。それを読んだオランダのライデン大学 H. ケルン教授がすぐに碑文を解読した。それはサンスクリット語の碑文であった。しかし、併記された古クメール語碑文は解読不可能であった。かねてアンコール王朝の歴史に関心を寄せ、論文を書いていた少壮の若手研究者 G. セデスは、1930年代に全碑文の解読に成功した。セデスの解読により遺跡の建立年代が明らかになると同時にアンコール王朝の全貌が徐々に明らかになった。セデスは1050点の碑文を全点8冊の碑文集に収載し、1967年までに全碑文を訳出し、出版した。そこには官職名や職称名などが載っている。以下、セデス碑文集を検分した結果、こうした以下の役職者と高官の人たちがアンコール王朝を機能させ、繁栄を担っていた史実が判明している。「役職」そのものの地位付けについての考察は別稿とする。

- 1) 高官 (サムダッチ) Samtec
- 2) 都域の長 (クロン・ナガラ) Khloñ Nagara
- 3) 都域の長老 (グラマヴルダ) Grāmaṇṛddha
- 4) 州の長 (プラターナ / クロン・ヴィシャヤ) Pradhāna/Khloñ Viśaya
- 5) 王への奉仕税査察官 (タムルヴッチ・ラージャカールヤ) Tammrāvāc Rājākāra
- 6) 主馬頭 (クロン・アセス) Khloñ Aseḥ
- 7) 漕ぎ手の長 (クロン・ドーク) Khloñ Dok/Dūk
- 8) 大臣 (マントリ・アーマートヤ) Mantrin=āmātya
偉大な大臣 (ラージャ・クラマハーマントリ) Rājakulamahāmantri
- 9) 家畜小屋の長 (クロン・トパル) Khloñ Tpal
- 10) 象捕獲の長 (クロン・ダルメアック / ム / ドルヴァン) Khloñ Dalmakk/Mu/Drvañ
- 11) 服飾業務の長 (クロン・チャンルヤク / チャンヤーク) Khloñ Canlyak/Canlyāk

- 12) 世襲家系の長 (プラダーナ・サンタァナ) Pradhāna Santāna
- 13) 国庫の長 (クロン・グラーン) Khloñ Glāñ
- 14) 米の長 (クロン・ロンコ) Khloñ Rañko
- 15) 油の長 (クロン・パルヤン) Khloñ Paryyañ
- 16) 塩の長 (クロン・アムプヤル) Khloñ Ampyal
- 17) 穀粒の長 (クロン・ヴリーヒ) Khloñ Vṛīhi
- 18) 蜜蠟の長 (クロン・カルムン) Khloñ Kalmon
- 19) 賦役の長 (クロン・バル) Khloñ Bala
- 20) 土地登記担当者 (ブラフ・パンニャジイナー) Vraḥ Pañjina
- 21) 葬祭を司る集団の長 (クロン・カルマーンタラ) Khloñ Karmmāntara
- 22) 職能別集団の長 (クロン・クムック・ヴォラッフ・クララー・アルケッナー)
Khloñ Khmuk Vraḥ Kralā Arccana
- 23) 王警護の新兵募集担当者 タムルヴァチ・ヴラッフ・ラーンヴァン
(ナー・エカ・ドゥ・トリニー・チャトヴァーリ)
Tamrvāc Vraḥ Rañvāñ (nā eka, do, trīṇī, catvārī)
- 24) 首都法廷の長 (サバアーパティ・ナガラ) Sabhāpatī Nagara
- 25) 地方法廷の長 (サバアーパティ・ヴィシャイヤ) Sabhāpatī Viṣaya
- 26) 長所・短所の検査官 (グナドサダルシイン) Guṇadoṣadarśin
- 27) 陪席判事 (サバアサタ) Sabhāsata
- 28) ダルマシヤストラ吟踊者 (スモート・ダルマシヤストラ) Smūt Dharmmaśāstra
- 29) 司法調査官 (予審判事) (チャレーブラッフ・サバー) Cāre Vraḥ Sabhā
- 30) 法廷記録者 (ナム・ヴラフ・アーラクサヤナ・ヴラフ・サバー)
Nām vraḥ ālakṣana vraḥ sabhā
- 31) 司法事務の長 (ヴィヤヴァハーラーディカーリン) Vyavahārādhikarin
- 32) 不動産調査官 (ランヴァーン) Rañvāñ
- 33) 登記簿担当者 (ヴラフ・パーンジーニア) Vraḥ pañjīña
- 34) 鉄儀礼のシャーマン (クイ族儀礼継承者・コンボン・トム州)
- 35) 寺院所属の踊り手・歌手・楽器奏者 (ルマン、チャムリヤン、トムン)
Rmām, Cammryāñ, Tmiñ
- 36) 楽隊 (トランプリア) (トーリヤ) Tūryya
- 37) 中央軍隊の長 (セナーパティー・カンダル・ヴァラ) Senāpatī Kantāl Vala
- 38) 村人 (サーマーンヤシャナ) Sāmānyajana
- 39) 軍隊の長 (セナーパティー) Senāpatī
- 40) 郡長 (クロン・スロック) Khloñ Sruk
- 41) 王命を地方へ伝達担当者 (プラトヤヤ) Pratyaya
- 42) 僧侶 (ピクシュ) Bhikṣu
- 43) 高僧 (マハーテラ) Mahāthera
- 44) 苦行僧タパスヴィ (タパスヴィナ) Tapasvī (Tapasvīna)

- 45) 大商人 (シュレスティムクヤ) Śreṣṭhi mu khya
 46) 王への奉仕職監督 (タムルヴァチ・ヴラフ・ラージャカルヤ)
 Tamrvāc Vraḥ Rājākārya
 47) 行商人 (クロン・ヴァリク) Kloṇ Varik
 48) 商売の長 (クロン・ジュンヴァ) Khloṇ Jnvāl
 49) 2週間ごとに月の満ち欠けを観察する部署の長 (クロン・カンドウヴァーラ・パクサ・クネット)
 Khloṇ kandvāra pakṣa khnet (K.205)
 50) 村の地主 (アチャー・スロック) Acās Sruk
 51) 村の守護者 (グラーマパール) Grāmapāla
 52) 長老 (グラーマヴァルダ) Grāmaṇḍha
 53) 告訴者 (アルチン) Arthin
 54) 拳闘家 (ムスディユタ) Muṣṭiyudha
 55) 刑罰執行人 (カーリ) Kāri
 56) 貝葉製作者 (パートラカーラ) Pātrakāra / patrakāra
 57) 総監 (サルヴァーディカーリー) Sarvādhikāri
 58) 秘書長 (ブーターシャ) Bhūtaśa
 59) 職工の長 (シルピーンドラ) Śilpīndra
 60) 扇持参者 (ヴァジャナダラ) Vyajanadhara

10. アンコール王朝の役職者たちの冠称号と位階の考察

アンコール王朝時代のカンボジアでは、「本名」の前位置に、何らかの社会的地位や位階を示す冠称が前置されていた。

1) 王および王族の冠称号とその位階

steñ, mratāñ, mratāñ cloñ, kamsteñ añ, kamrateñ añ, vraḥ kamrateñ añ, dhūlī jeñ kamsteñ añ, dhūlī jeñ vraḥ kamrateñ añ… (冠称号のあとに + 個人の名前が入る)
 ..varma deva (順序は称号・位階 + 個人の名前 + …varma deva)

2) 宗務関係者（バラモンと僧侶）の冠称号と位階

steñ, mrateñ, mratāñ, mratāñ cloñ, vraḥ kamsteñ añ, vraḥ kamrateñ añ, dhūlī jeñ kamsteñ añ, bhagavata pāda kamrateñ añ, dhūlī jeñ vraḥ kamrateñ añ… (冠称号のあとに + 個人の名前が入る)
 paṇḍita (称号・位階 + 個人の名前 + …paṇḍita)

3) 下級官職の冠称号・位階

teñ, tāñ, vāp, loñ, mrateñ, mratāñ, mratāñ cloñ, mratāñ kuruñ, kamsteñ añ, vraḥ kamsteñ añ, vraḥ kamrateñ añ, dhūlī jeñ kamsteñ añ, dhūlī jeñ vraḥ kamrateñ añ (冠称号・位階 + 個人の名前)

4) 村人・非奴隷の自由人たちなどの冠称号・位階

tai, sī, gho, teñ, tãñ, vāp, loñ (冠称号・位階 + 個人の名前)

5) 身体が拘束された人たち・奴隷といわれる階級の人たちの冠称号

pao tai, pao si, tai ratn, lap, gvāl, tai yā, siya tā, tai, gho, sī (冠称号 + 個人の名前)

6) アンコール王朝の役職者および高官の冠称号

- (1) (kuruñ= クロルン) = 地方の長(知事) および王の称号ともなる(冠称号 + 個人の名前)
(事例) kuruñ sī rudravarman (Rudravarman 王)
- (2) (saṃdāc= サムダーチ) = 高官、実務高官、役職者の長など(冠称号 + 個人の名前)
(事例) saṃdāc vraḥ guru (王の顧問、ヴラッフ・グルー)
- (3) (anak sañjak= ネアック・サンジャック) = 王の侍従、王の一番近くにいる大臣、特別顧問、王が重用する高官(国庫の長、警備の長、軍隊の長等の職務を担当)(冠称号 + 個人の名前)
- (4) (kaṃsteñ= カムステン) = (高位高官、軍隊の長、王子たち、高位の僧侶たち)(冠称号 + 個人の名前)

参考文献

1. Cœdès, G. *Inscriptions du Cambodge*, Vol. I-VIII, EFEO, 1937-1966, Hanoi-Paris
2. 石澤良昭「冠称者たちが活躍する前アンコール社会」(『新』古代カンボジア史研究』風響社 2013, pp.327-419)

11. 寺院建設作業員の素顔を探る―数 10 年現場に住み込み、建立に奉仕した人々―

カンボジアは 1992 年にアンコール遺跡群が「世界遺産」に登録されたが、その主要な構成遺構はアンコール地域の 99 ヶ所の遺跡であった。当時のこれらの建築家が、石工・彫工・研き師・絵師などと協力して神・仏の祠を建立したが、寺院建立に参画した建寺作業員の専門職分野を調査し、寺院完成のために奉仕した人たちは、その信仰に裏付けられていた。石工たちにはカンボジア独特の石材加工技法があった。例えば、石材の摺り合わせ密着技術(接着剤を使用せず)、石材削り法、石材運搬法、石材移動技法、石張技法、石材積み上げ法、などがあった。人力と道具を使用しての伝統技法は多岐にわたっていた。

アンコール都城から西北に約 170 キロ離れた大遺跡バンテアイ・チュマー(13 世紀初頭)遺跡を調査した G. グロリエの記録を紹介する。G. グロリエは 1930 年代後半に十分な調査記録が実施されていないこの遺跡に乗り込み、その概要をまとめている。報告書としては粗削りで、論文ではないといわれているが、どんな専門職種の人たちが参画していたか、その概要を知るために、多くの研究者が引用し、参考になっている。報告者の G・グロリエは B.Ph. グロリエの尊父である。

以下、仮訳ではあるが、これまでどんな建寺の技能者や石工たち、土木作業員が作業現場いたか、その概要を知ることができる。

- (A) 石工 (Cheang Thma)
- (B) 木造大工 (Cheang Choeu)
- (C) 彫刻家 (Cheang Chamlak)
- (D) 鉄工、大工、手工業の人たち (Camdak)
- (E) 石像彫刻家およびブロンズ像製作者 (Viśvakarma)
- (F) 建築の専門分野の建築設計師 (Ācārya sthapāka)
- (1) 石ノミ研ぎ師および助手たち
- (2) 彫工および彫工助手たち
- (3) 下絵師および下絵師助手たち
- (4) 石切場から竹製筏で石材を運ぶ人たち
- (5) 石材切り出し石職人たち
- (6) 石材加工石職人および石工助手たち
- (7) 石材石張り作業員および石工助手たち
- (8) 石材施工職人および石工助手たち
- (9) 塗り師および塗り師助手たち
- (10) 石材を摺り合わせ接着師および助手たち
- (11) 基礎土台石の積み上げ職人たちおよび助手たち
- (12) (石材を運ぶ4人組) 石材運搬熟練石工たちおよび助手たち
- (13) 金箔および金泥塗り師および助手
- (14) 石壁画装飾師および見習い職人
- (15) 建築家および牛革紙上の設計図作成の助手たち
- (16) (寺院の) 建材手配作業員および助手たち
- (17) 装飾絵図師および助手たち
- (18) 下絵書きデザイナー師および助手たち
- (19) 線画デザイナー師および助手たち
- (20) (竹製やぐら) 組立師および補助人足たち
- (21) 石張り装飾仕上げ師たち
- (22) 足場組立て棟梁および職人たち
- (23) (地下から) ラテライト(紅土)掘り出し職人集団および天日乾し職人集団
- (24) 鍛冶師およびT字型の千切りの加工師
- (25) 川砂採取人 (Neak Yok Khsach)
- (26) 石材運搬竹製筏(いかだ)船頭および助手たち
- (27) 本殿・頂部・回廊・ピラスター・前廊などの担当上級絵師
- (28) 身舎(もや)設計師
- (29) 鉄棒打ち込み採石師(露天掘りの現場石工)
- (30) 版築基壇積み上げ建築士および版築士
- (31) 環濠および排水設計師たち
- (32) 内匠頭および助手たち

- (33) 工匠頭および助手たち
- (34) 村の建寺作業員および助手の村男たち
- (35) 現場に住み込む建寺作業員およびその家族たち

参考文献

パンテアイ・チュマール寺院の場合、建寺作業員（設計図建築者、砂岩を扱う石工および彫工職関係者）約1万人から1万5千人が現場で働くという仮説。工期は約20年、そこに居住する家族を含めた人口は7万人から12万人であったという。（George Groslier の仮説）

Groslier, G.: Banteay Chmar, Ville ancienne du Cambodge, *L'illustration*, No. 35 (I) 1937, pp. 177-206.

12. 1296年にアンコール都城を訪問した元朝使節団一周達観『真臘風土記』に載った 称号・位階の人々

アンコール王朝の最盛期はアンコール・トム都城を造営したジャヤヴァルマン7世（1181-1218頃）の治世であった。王位継承争の結果からシヴァ派のジャヤヴァルマン8世（1243-1295）が即位した。ちょうどその時、元寇が東南アジア地域に対して始まっていた。第1回目の元寇は1257年大越（ベトナム）に対して侵攻してきた。カンボジアには1283年に元寇の小部隊がアンコール都城に来攻した。偵察の部隊とも言われている。ジャヤヴァルマン8世は1285年世祖フビライに対して朝貢使節を派遣した。そして、1295年に世祖フビライが逝去し、成宗が即位した。1296年に元朝成宗の使節がカンボジアに来訪した。使節団に随員として永嘉県（現在の浙江省温州）の周達観が同行していた。周達観は「草庭の逸民」（官職に就かない地方の文化人）であり、カンボジアに約10ヵ月滞在し、帰国後、その見聞録『真臘風土記』を著した。その報告書に記載され、言及されたアンコール王朝の高位高官の人たちリストを挙げると、以下の通りとなる。

- 1) 国主（王）
- 2) 丞相（大臣）
- 3) 将師（将軍）
- 4) 司天（天文官）
- 5) 属官（官吏）
- 6) 室女（おとめ）
- 7) 厮^{しらつ}辣的（芸術家）
- 8) 班詰（バラモン）
- 9) 亭^{ちよこ}姑（僧）
- 10) 八思惟（苦行僧・道士）
- 11) 南棚（官吏）
- 12) 番婦（カンボジア人女性）
- 13) 野人（山岳少数民族）
- 14) 官女（女官）
- 15) 備世（外国人）
- 16) 唐人（中国人）
- 17) 側女（そばめ）

- 18) 買節 (村の長)
- 19) 婦女 (村の女性)

参考文献

周達観『真臘風土記－アンコール期のカンボジア』（和田久徳訳注）東洋文庫 507, 平凡社, 1989 年

13. 碑文考察から判明したアンコール時代の日常生活と文化

アンコール・ワット時代の王宮は、金帛^{きんぱく}や金泥に塗られた絢爛豪華な高床式高層（テラス）の木造の大建築物であった。1294 年に現地を訪れた中国人周達観は、王宮前（現在のライ王のテラス）で木造の 3 階建てに相当する高層露台を見て、驚愕したと報告している。王宮には当時の関係者が足繁く出入りしていた。朱塗りの楼閣であり、たくさんの王宮関係者が担当者グループごとに出入りしていた。神なる王は、この王宮内においていつも通り王師（vrah guru）によるデヴァラージャ（神王）の祭式を執り行ない、王は大臣たちや高官たちと接見し、命令を出していた。王宮の棟続きには棟割長屋のごとく、いくつもの後宮が建てられていた。

- A) アンコール・トム都城には、王宮に隣接して護衛兵の兵舎、王宮には王および王妃たち（7 階級）とその侍女たち、召使いがいた。目付け役の女官たち、王の妻妾たち（王族ではない）、王宮内の侍女たち、さらに王子・王女たち、前王たちとその家族、王弟たちとその家族、皇太后とその親戚家族、その召使と下男・下女たち、さらに路地裏の掘建小屋には関係者の家族と子供たち、数千人に及ぶ宮廷内の召使や奴隸（男・女）、その家族を含める約 1 万人以上が在住し、雑然とした都城であった。
- B) 儀式と祭事関係者として、バラモン祭官（バクー）、王の顧問（プロヒタ）、王師、彼らの数百人に及ぶ召使、祭儀関係召使いや奴隸とその家族がやはり都城内に住んでいた。
- C) 王宮内的大臣および高位高官たちの配置は、正式には大臣 5 名、首相級の「偉大な大臣（ラージャクラマルーマントリ）」の下に法務大臣、海軍大臣、官務・財務大臣、陸運大臣に加えて、さらに各副大臣とたくさんの実務高官とその召使であった。各担当の実務高官とその手下たちは、先を争って王宮内外を走り回り、部下に命じて情報を収集させ、王に取り入れるため、機会があれば大臣を含めて数百人に及ぶ人たちが王へのご注進と報告のため待ち構えていた。
- D) 約 80 人地方長官（知事）らが、米の収穫高や年貢米の報告のため、入れ替わり立ち替わり王宮内の実務担当高官の許へ来ていた。その長官には補佐官や助手、連絡のための走り使い、上位の召使、地元の村人有力者らが同行していた。
- E) さらに、属領といわれた周辺部の都城（地方都市）には、土候の首長がいて、アンコールとの連絡担当の高官とその補佐官がいた。その遠隔地方の都城にはダチ・グラン（地方首長）がいた。①プレイ・ノコー（サイゴン）、②アユタヤ、③ロップリー、④スコータイ、⑤カンペンベットなどが含まれ、高官が報告のためアンコールに来ていた。王宮にはこれら地方から特産品や高価な朝貢品が届けられていた。これを担当する約数百人の小官吏もいた。
- F) 軍隊：王の常備軍については克明に回廊浮彫りに描かれている。地方有力者の反乱や王族

分派の謀反、少数民族の抗議、チャンパー軍の侵入などがあった。常備軍は、歩兵軍が3万人～10万人、および板付弓連射部隊が歩兵約3万人、騎兵軍が800人～5000人、ベトナム軍に対する強力な戦象部隊：2,000人～3,000人であった。（参考文献：Jacq-Hergoualc'h, Michel.; *L'Armement et l'organisation de l'armée Khmère au XII^e et XIII^e siècles, d'après les bas-reliefs d'Angkor Vat, du Bayon et de Banteay Chmar*, PUF, Paris, 1979.）

G) シャーム・クック（Syām Kuk）の碑文（K. 298）解題

（碑文原文）(1) anak rājakāryya (2) bhāga pamañ (3) jeñ jhāla ta (4) nām syām kuk

仮訳：王に仕えるためこの壁面に刻まれた人たちは、その名前を「パマン」と言って、シャーム・クックの人たちに先導され、ジェン・ジャーラ地方（場所不明）からやってきた。」（英訳：The participant in the king's service [named] Paman from Jeng Jhala, leading the Syam Kuk）



シャーム・クック碑文写真（アンコール・ワット南回廊壁面に刻まれている）

この碑文はこれまでに多くの研究者によって引用され、考察されてきた。碑文原本（写真）は4行ほどの記載であり、この碑文を第18代のスールヤヴァルマン2世（1113～1150頃）が誇らしげに掲げているが、どのような意図で刻まれたかについては不明である。

H) 地方行政はどうなっていたか

アンコール時代の行政区分には、39州が王直属の州であり、地方軍が約2万人～3万人、さらに、10州が副王（オペヨーリョチ）と王弟に分けられ、約3万～5万人の地方軍、そして3州が皇太后の所有であって、いつも数万人の兵員が配置についていた。地方長官が雇う数千人の私兵もいた。

王宮内の高位実務高官たちは、権謀術数うごめく中で、自分の地位の確保に奔走していた。大臣会議（閣議）では実際に地方長官の任命を行っていた。地方行政はメ・スロク（郡長）とメ・プム（村長）が担当していた。これにはガードマン兼私兵がいつも雇われていた。

I) 一般の住民の村人はネアック・チア（自由民の意味）といって、村落における普通の耕作者であり、納税者でもあった。ほかに、メ・カームランは専門職の自由民の医者、川船のこぎ手師、金銀細工師たちがいた。しかし、村人（ネアック・チア）は、身体が拘束される奴隸的身分の手伝人に家事や農作業をさせていた。寺院で働く奴隸の寺男・寺女たちが寺院内で働き、付属の荘園の農作業を手伝っていた。男奴隸の中には特殊技能を生かし大砲手、火工兵、射撃兵、射手の技能者がいた。アンコール地方には多い時で20万人～50万人が各地からやってきていた。アンコール・ワットの建立に際しては、建寺作業員が延べ約1万人以上に及び、そして完成までに32年かかった。アンコール・ワットの建立には、各地方から出てきた乾季のカンボジア人、篤信者たち、身体が拘束された奴隸として多数のチャム人、シャム人、モン人、ミャンマー人、山岳民族などが作業員として雇われていた。チャム人はたびたび戦闘の結果、捕虜となり、拘束され、奴隸の扱いであった。拘束されたシャム人（タイ人）の集団とその家族は、かねてから奴隸として売買されていたようであり、寺院などの建設や密林から材木を伐採する作業員などにも使役されていた。

14. アンコール王朝末期の政治混乱、スコタイ王朝と前期アユタヤ王朝の独立

1218年頃に、東南アジア大陸部を東奔西走していたジャヤヴァルマン7世が逝去した。かなりの高齢であった。その後の後継者をめぐり数年間にわたり、国内政治の混乱があった。先のない混沌とした時代が始まっていた。そんなアンコール王朝の世紀末の世相を時系列で採り上げ、同時に前期アユタヤ王朝との攻防戦を検討してみたい。

(イ) 後継の弱小王インドラヴァルマン2世(1218?-1243年)については、仏教徒もしくは仏教支持者といわれるが、その動静についてははっきりしない。この王の治下で王宮内の儀式を担当するシヴァ派の高官たちが反大乘仏教の声を上げ始めた。(ロ) アンコール王朝軍がジャヤヴァルマン7世逝去のため1220年チャンパー国から撤退し、同じ頃、スコタイでは、1240年に土候のシーインタラーティット王が独立し、最初のシャム人王朝となる。(ハ) アンコール都城ではシヴァ派のジャヤヴァルマン8世王が登位(1243-1295年)し、この新王の主導で廃仏毀釈運動がアンコール地方で始まった。(ニ) チャンパー国を攻撃していた元軍小部隊が、1283年にアンコールに都城へ来攻し、小競り合いがあった。(ホ) アンコール王朝はすぐに1285年中国の世祖フビライへ朝貢し、恭順の意を表わした。(ヘ) アンコール・トム都城内において1295年シヴァ派寺院マンガラルタが最後のヒンドゥー教寺院として建立された。(ト) 王は1295年娘婿のシュリーンドラヴァル王(1295-1309年)に譲位した。(チ) 1296年元朝使節周達観が来国、約10ヵ月現地に滞在し、アンコール王朝の見聞録『真臘風土記』を著した。活気あふれる王朝末期の繁栄ぶりを伝えている。(リ) 1309年最初のパーリ語碑文が寺院に奉納され、上座仏教が村落内に浸透しつつある史実を裏付ける。(ヌ) アンコール王朝第13代スールヤヴァルマン1世(1002-1050)は、西方の拠点としてチャオプラヤー川流域にロップリ都城を建設し、現地にはアンコールと同じ祠堂ワット・プラ・プラーン・サムヨットが現存している。チャオプラヤー川流域にやってきた初期のシャム人たちは、山間盆地が河岸段丘に村落をつくり、年月を経て人口が増え、拡大し、小国家へ発展した。スコタイとアユタヤの両王朝は約200年に及ぶアンコール王朝治下で民族的覚醒が促進され、独立を果たした。(ル) ラーマーティヴォデ

イ王は1351年の前期アユタヤ朝王朝が独立。その『王朝年代記』には、最初の王ラーマーティヴォダイの王名が出てくる。その独立の政治背景については記載がない。王は1352年に王子の一人にアンコール討伐を命じるが、カンボジア軍に逆襲され、援軍を得てアンコール都城を1352年に占領したという。(ラ)1353～1357年前期アユタヤ王朝軍が再びアンコールを占拠。シャム人王子がアンコールを統治。(ワ)1393年再びアユタヤ王朝軍によるアンコール都城の再攻撃があった。(カ)1431年前期アユタヤ王朝がその援軍と共にアンコール都城を猛攻し、数日間続いた激戦の後に、木造家宅に放火され、アンコール・トム都城が陥落し、焦土となった。カンボジア王はアンコール都城を放棄。前期アユタヤ王朝軍は多数の金属製彫像などの勝利品を馴象の引修羅(そり)に積み込み、アユタヤ都城持ち帰る。数万人に及ぶカンボジア人捕虜をアユタヤへ連行し、運河の開削や森林の伐採、寺院建立に使役し、彼らは生きてカンボジアへ戻ることはなかった。(エ)そして、ポスト・アンコール王朝は1433年スレイ・サントーに遷都するのであった。

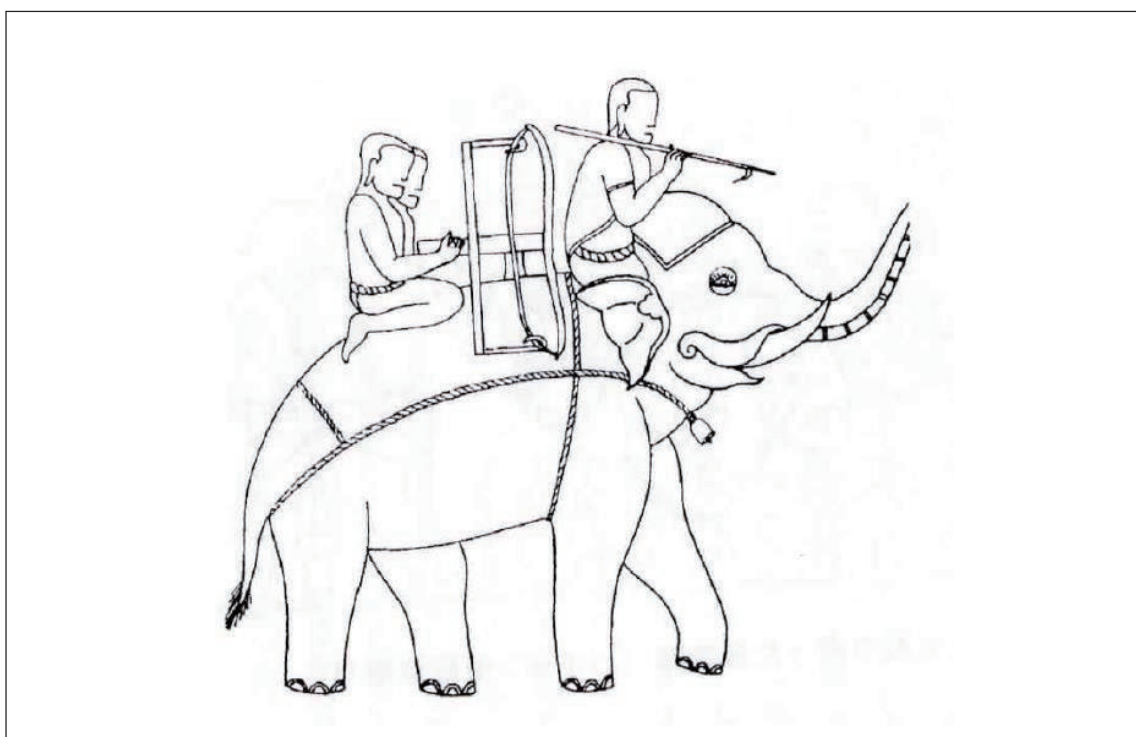
参考文献

1. Cœdès, G : La stèle du Práh Khân d'Angkor, *BEFEO*, 41 (1941), pp. 255-302
2. Cœdès, G : La stèle de Tà-Prohm, *BEFEO*, VI (1906), pp. 44-81
3. 石澤良昭 : 『〈新〉古代カンボジア史研究』, 風響社, (2013)
4. 岩本裕 : Tà Prohm 碑文にみられる数値について : カンボジア碑文考 (1)、『東南アジア研究』23, (1985), pp.38-43
5. Cœdès, G : *Inscriptions du Cambodge* (I -VIII), (1960-1966), EFEO, Hanoi-Paris
6. Renou, L et Filliozat, J : *L'Inde classique* (II), EFEO, (1953), Hanoi
7. 石澤良昭 : 『アンコール王朝興亡史』, NHK 出版, (2021)
8. 石井米雄 : 「前期アユタヤとアヨードヤ」『岩波講座 東南アジア史』第2巻 (2001), pp. 231-255
9. セデス・G : 『インドシナ文明史』(第2版) (辛島昇・桜井由躬雄・内田晶子共訳) みすず書房 (1980)

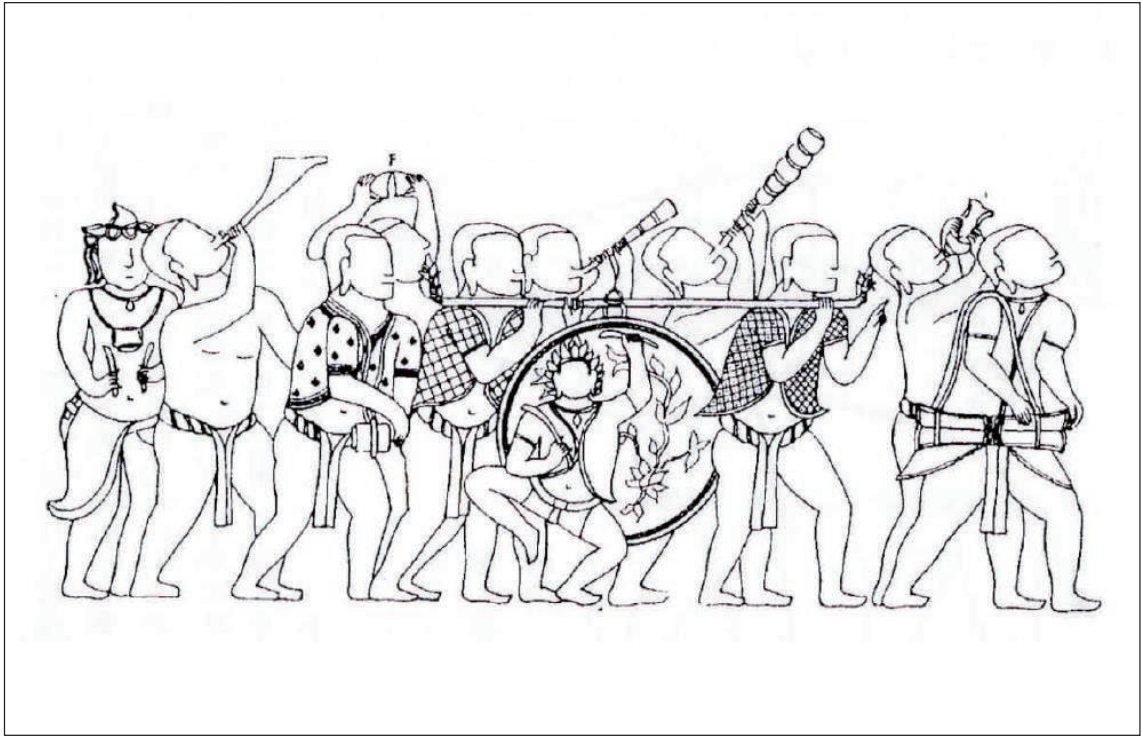
15. アンコール王朝時代の戦争を活写したと思われる浮彫り絵図考察



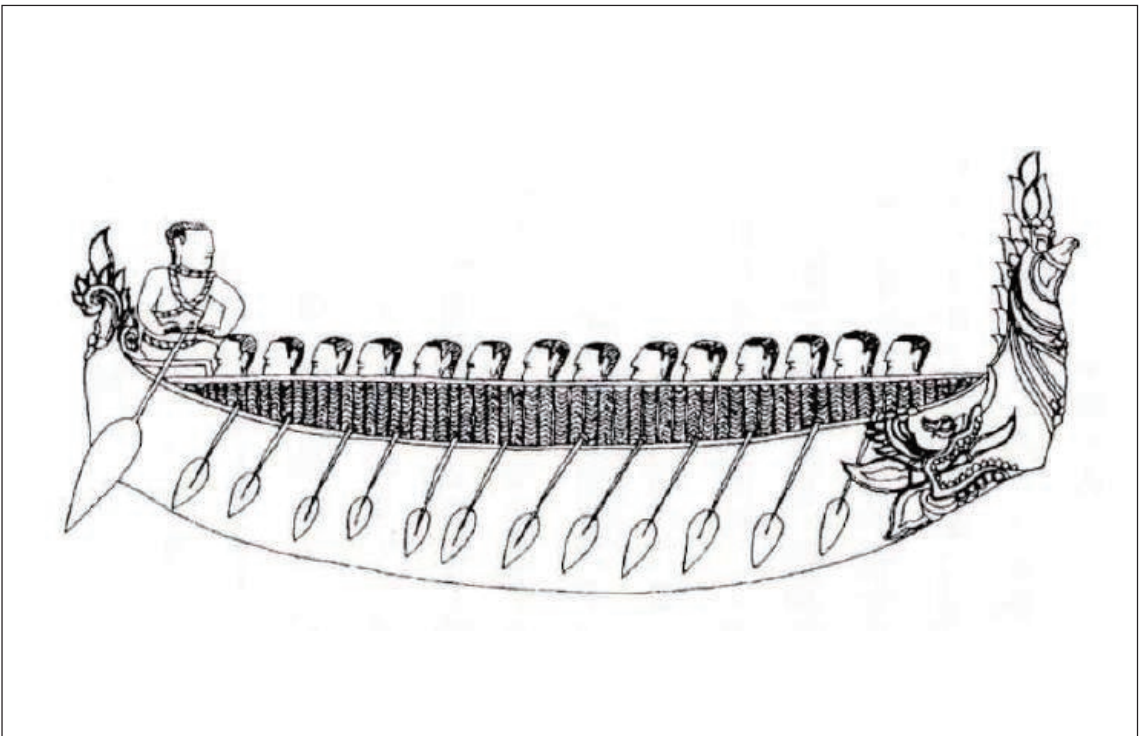
(1) 戦象に乗るシャム人兵士群団
(出典：『アンコール・ワットの時代』(連合出版, 2008 年))



(2) 戦象上の弓連射機
(出典：『アンコール・ワットの時代』(連合出版, 2008 年))



(3) 銅鑼とラッパと太鼓を伴った軍楽隊。楽器を使って戦闘中の味方に新作戦の指示を楽器音で知らせる。
(出典：『アンコール・ワットの時代』(連合出版, 2008 年))



(4) トンレサップ湖上行く王室の大型高速船艦 (バイヨン寺院浮彫り)
(出典：『アンコール・ワットの時代』(連合出版, 2008 年))



(5) 弓矢を射かける兵士たち、カンボジア風のT字帯をつけて戦場で敵と対決。
(バイヨン寺院浮彫り)



(6) カンボジア軍の防御板付弓連射機。(写真上部) 弓を仕掛け、回転させることで弓矢を連射しているところ
(バイヨン寺院浮彫り)



(7) イガグリ頭に槍を持ち、戦場におもむく正装のカンボジア槍兵隊
(バイヨン寺院浮彫り)



(8) 右はチャンパー兵たち、左はイガグリ頭のカンボジア兵。髪型から両軍の兵士を区別できる
(バイヨン寺院浮彫り)



(9) 激戦中、倒れた兵士が敵に槍で突き刺されている悲壮な場面を実写
(バイヨン寺院浮彫り)



(10) 槍と丸盾を持ち戦場へ赴く兵士たちと村人との別れ
(バイヨン寺院浮彫り)



(11) 接近戦に備え、槍と盾を携え行進する勇壮なカンボジア人兵士たち
(バイヨン寺院浮彫り)



(12) 甲板にチャンパー軍戦闘員を乗せた大型船艇、船倉で櫓を漕ぐ14名の兵士たち。
(バイヨン寺院浮彫り)

アンコール地域における文化遺産教育

—学術分野から地域社会へ—

上智大学アジア人材養成研究センター

NHIM Sotheavin

はじめに

「アンコール」という言葉はアンコール地域の中にある遺跡全般、アンコール遺産、そしてアンコール文明を指す。アンコール文明は9世紀初頭から15世紀にかけて繁栄した。アンコール地域は寺院、バライ、古代の道路、古代の橋、環濠などの遺跡からなり、これらは遺跡付近にある村落住民（伝承、信仰、習慣、儀礼、記憶など）の共同体とともにある。つまりアンコール地域の中には有形遺産と無形遺産があり、双方を考慮する必要がある。

その重要性により、ユネスコは1992年にアンコールを世界遺産リストに登録した。これ以降、多くの国際機関がその保存と修復に関与している。アプサラ機構（APSARA Authority = Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）の記録によると、アンコール遺跡の保全に関連したプロジェクトに関与している21の機関のうち、地域社会において文化遺産教育を実施している機関はごく一部にすぎない。

アンコールにおける文化遺産教育は、アンコール考古学発掘現場の保全との関係で語られることが多い。それは遺跡現場を一般公開することによって、考古学が得た情報を学問的には専門家ではない、特に地域社会の人々と共有することを示唆する。多くの国際研究機関がアンコール地域での遺跡保全活動に従事してきたが、当初彼らの知識を地元の人々に伝えることにはあまり積極的ではなかったようだ。それはおそらく専門家の彼らが自分のプロジェクトのみに集中する傾向であったし、さらに個人的に地域社会に働きかける時間が十分ではなく、たぶん躊躇していたのであろう。

さらに、カンボジアの考古学的な研究や遺跡の修復方法論に関しては、研究分野として近隣や外来の概念や方法論などが適用されていた。そこには、現地の住民に対する文化遺産教育や人材育成が欠如しているという問題がある。そうした状況下で、どのような方法で現地の住民に文化遺産を認識してもらえるのだろうか。

ここで、上智大学アンコール国際調査団（以下ソフィア・ミッション）の活動を紹介したい。ソフィア・ミッションは、アンコール遺跡の調査、保全、修復に関与するだけでなく、学術分野における人材育成を推進し、アンコールの地域社会への知識の還元を積極的に行ってきた。1980年代初頭、団長である石澤良昭教授はイコモス（ICOMOS = International Council on Monuments and Sites）日本委員会でのシンポジウムで重要な発言をした。1985年にはパリで彼が留学中に師事したB. P. グロリエ博士と話し合った。グロリエ博士が強調したのは、カンボジアの文化遺産保存と修復における最優先事項は、とりわけ、専門家と保存官・石工の双方の訓練であるということだった [Ishizawa 1986: 117-118]。

その後、1991年以降、石澤教授率いるソフィア・ミッションは、「カンボジアの文化遺産はカ

ンボジア人の手で守り、カンボジア人が保存修復を行う (Preservation and Restoration of the Cambodian Heritage should be carried out by the Cambodians, for the Cambodians)」という基本方針を掲げることとなった [石澤 1992、石澤・丸井 1999]。

本稿では、はじめにソフィア・ミッションの現場における人材育成の活動を概観するとともに、カンボジアの地域社会においてどのように貢献したかを示したい。次に、考古学的な知識を地域社会と共有することを基盤とする文化遺産教育の普及活動に焦点をあてる。これらの活動は、野外での考古学実習の試みとして行われてきたが、1999 年以来のソフィア・ミッションの文化遺産教育プログラムに筆者自身が関与してきたため、その経験に基づいて考察してみたい。

1. アンコールにおける文化遺産の保存と復元の概要

1-1. フランス人による遺跡保存修復活動

19 世紀半ばのアンリ・ムオー (Henri Mouhot) によるアンコール訪問の紀行文の出版は、ヨーロッパ、特にフランス国民に大きな衝撃をもたらし、アンコール遺跡の魅力が広く認知されるようになった。これ以降、遺跡の修復と研究はフランスの植民地政策の象徴となり、一方で、アジアにおける植民地開発を促進した [Pottier 2000]。

その後、フランス人研究者は遺跡において、樹木の撤去や目録の作成、そして保存修復活動に着手した。遺跡目録の作成作業は、ルイ・ドラポルト (Louis Delaporte) (1880)、オーギュスト・パヴィ (Auguste Pavie) (1898)、エティエンヌ・エイモニエ (Etienne Aymonier) (1900-04)、エティエンヌ・リュネ・ド・ラジョンキエール (Étienne Lunet de Lajonquière) (1902-11) などによって、1907 年にタイから返還された旧アンコール王朝の 3 州において 1907 年から 1972 年まで遺跡の保存修復はジャン・コマイユ (Jean Commaille)、アンリ・マルシャル (Henri Marchal)、ジョルジュ・トゥルーヴェ (Georges Trouvé)、ベルナール・フィリップ・グロリエ (Bernard Philippe Groslier) などのフランス人の研究者や遺跡保存官によって行われ、彼らは皆アンコール遺跡の研究や保存修復活動に尽力した。

しかしフランスの保護体制のもと推進された遺跡の保存と研究においては、諸々の活動はカンボジア人のために行われたものではなかったと推察される。それらの活動はフランス国の栄光のために、さらに自分たちの学問的関心と興味にもとづいて、植民地政策下の専門職として行われてきた。遺跡の保存修復活動はフランス極東学院 (École Française d'Extrême Orient) によって主導され、カンボジアの人々は労働者としてのみ関与することが許され、主要な業務には関与できなかったのだ [坪井 2006 : 80]。

1-2. 内戦期の遺跡保存修復活動とクメール人遺跡保存官の登場

1970 年代に内戦が勃発するまで、アンコール遺跡に関連するすべての作業はフランス人遺跡保存官によって管理された。1970 年 6 月 6 日からクメール・ルージュによるアンコール地域の占領がはじまり、1972 年 1 月 20 日に修復工事が中止されるまでの期間、戦争で破壊された国内で保存と修復の作業が続けられた [Pich 1992 : 93]。クメール・ルージュがほぼアンコール全域を支配するようになって状況が不安定になったとき、フランスはアンコール遺跡の研究成果をフランスへ送り出し、有名なフランス人の遺跡保存官である B. P. グロリエはアンコールを去ら

なければならなかった。これにより、1972年にはクメール人の遺跡保存官ピッ・ケオ氏はアンコール遺跡保存の仕事の責任を引き継いだ。彼は現代アンコール遺跡修復史における最初のクメール人遺跡保存官である。彼はアンコールにおける修復作業のすべてを管理した [Falser 2015 : 317]。

1-3. 王立芸術大学の設立

カンボジアが1953年にフランス保護領から独立を達成した後、ノロドム・シハヌーク国王は1960年にアンコールを訪問した。その後、国王はカンボジアのナショナリズムの観点において、アンコールの文化遺産を保護することを表明した。そのためには、自力で研究や保存修復を実施するための高等教育機関の整備が必要でした。彼は、それまで民族主義者がもっぱら訴えていた遺跡保護の必要性に応じて、ヴァン・モリヴァン (Vann Molyvann) 氏に要請し、1965年に王立芸術大学 (以下、RUFA) を設立した [Ang 2000, Ang Choulean per.com. 2021 年 2 月]。

RUFA の設立は高く評価された。考古学分野、歴史分野および民族学に関連する課程と同様、遺跡の保存と修復が加えられた。王立芸術大学にある考古学部が設立されてから1975年まで10年間で58人の学生が学士課程の修了証を取得し、さらには海外留学を継続した。そして、一部の人々はアンコールの遺跡での修復、民族学、考古学的発掘によって独自の研究を行った (Church Phoeurn per.com. 2021 年 2 月)。

1-4. クメール・ルージュ占領下のカンボジア

このRUFAの活動はクメール・ルージュの占領下で暗黒の時代が始まる1975年まで継続された。カンボジアは20年以上続いた長い内戦を経験した。それはカンボジアの人々だけでなく、国のインフラに深刻な影響を及ぼした。1970年代のベトナム戦争の影響を受けて、クメール・ルージュポル・ポト政権は1975年4月17日に首都プノンペンを占領し、1979年には政権が崩壊した。この激変の時期に約200万人のカンボジア人が亡くなった。ほとんどの教育を受けたエリート層の多くが殺され、学校は取り壊され、宗教的信念は禁止され、他の残虐行為はクメール・ルージュの間に起こった。研究者はこの非常に暴力的で悲劇的な社会経験をカンボジア「ゼロ年」(Year Zero)と呼んでいる [Ponchaud 1978; Vickery 1984 : 64-187]。

クメール・ルージュの崩壊後も、1980年代のベトナムによる占領とともにカンボジアでの内戦は1990年代初頭まで続いた。クメール・ルージュ体制の期間に遺跡保存官の多くが殺害され、クメール・ルージュのカンボジア王室軍への統合が行われる1998年後半までに国の文化遺産のほとんどが破壊されており、遺跡は危険な状態のままだった。1979年にクメール・ルージュ体制が終わった後、遺跡の維持と保存は地元のスタッフによって限られた方法で再開された [Pich 1992 : 93]。1980年8月に日本テレビ調査団がアンコール遺跡群に入り、石澤良昭教授により調査報告が公表された (日本テレビ『埋もれた文明アンコール遺跡』1981)。1986年からいくつかの国際機関によってアンコール遺跡の修復のための新しい活動が始まった。

そこには、インドのチーム (1986年12月にアンコール・ワットで修復作業を開始) をはじめとして、上智大学チーム (タ・プロームとバンテアイ・クデイでの調査)、ポーランドのチーム (1990年4月からのアンコール・トムのバイヨン寺院での修復)、そしてソ連が含まれる [Pich 1992 :

97; 石澤 1990a、1990b]。その後、多くの国際プロジェクトがアンコール地域の保存修復事業を計画実行した（上智大学〈日本〉、EFEO〈フランス〉、WMF（World Monuments Fund）〈アメリカ〉のほか、ドイツ、イタリア、インドネシア、中国などの政府や研究機関によるプロジェクト）。

国際的なチームの中で、特に上智大学のプロジェクトは遺跡サイトにおける作業と人的資源の育成の双方について、アンコール遺跡の修復の良い事例となった。この修復作業は石澤良昭教授が指揮をとった。教授は遺跡の修復作業において西側世界から参加した最初の専門家だった。教授はクメール・ルージュが敗北した直後の1980年8月に、まだ究極的な困難の中にあり危険な状況にあったアンコールを訪れた〔石澤 1989：92〕。

2. ソフィア・ミッションの人材育成事業への貢献

2-1. 内戦中および終結後の学び

内戦中は文化遺産教育も荒廃した。それは脇に押しやられ、片隅で無視されていた。RUFA、特に考古学部と建築学部は、1989年によりやく再開するまで、ほぼ20年にわたって閉鎖されていた。そのため、再開させた考古学部と建築学部は科学的な教育方法と教材を欠いていた。しかもクメール・ルージュの恐怖の時代を生き残ったのはごく少数の遺跡保存官と考古学者だけであり、人材の不足は最大の問題だった。つまり大学は他の大学の支援を、すなわち国際基準を持っている大学の援助を必要としていたのである。

1990年から1992年までにRUFAは初めて外国人専門家から知識を得たが、フランスからのギメ東洋美術館のアルベール・ル・ボヌール（Albert Le Bonheur）教授と彼の3・4人のチームが古代カンボジアとインドの美術史を教えた。そしてアメリカからのコーネル大学のレジャーウッド（Judy Legerwood）教授が人類学の授業を行なった（Chuch Phoeurn per.com. 2021年2月）。その2ヵ国以外は1991年3月に上智大学の石澤良昭教授（図1）に率いられた日本から20人の研究者や専門家が入国し、RUFA（考古学部と建築学部）で1年2回（春と夏）集中講義を行った。それ以来、選抜された学生はアンコール地域で上智大学アンコール国際調査団とともに現地研修を受けた〔石澤 1996：101-102〕。さらに、多くの考古学と建築学部の学生に、日本で勉強するための奨学金が提供された。



図1 1991年、RUFAでの集中講義
[写真提供：石澤良昭]

2-2. ソフィア・ミッションの人材養成活動

上智大学による研修プログラムの立ち上げ後、1993年からはフランス、アメリカ、オーストラリアの専門家がさまざまなテーマで講義を行うようになった。RUFAの研修プログラムは1993年から2002年まで、ユネスコ／日本信託基金から人材育成を目的とする資金提供を受けた。この長期研修プログラムは、アン・チュリアン（Ang Choulean）教授およびアシュリー・トンブソン（Ashley Thompson）教授の協力により、当時考古学部の学部長だったチュック・プーン（Chuch Phoeurn）教授によってユネスコに提案された〔Stark and Heng 2017：201、Carter *et al.* 2014：6062〕。このプログラムには歴史、考古学、地質学、建築、環境、人類学、社会学、博物館学、その他に関する多くの国内外の教授陣と専門家が関わった。その後、RUFAの集中講義、特に考古学には、西洋諸国の研究機関や大学も教育コースや現場実習での教育プログラムを提供するようになった¹⁾。

この観点からは、ソフィア・ミッションの目標はアンコール遺跡の研究、保全、修復などのプロジェクトに焦点を当てるだけでなく、ソフィア使節団が1991年頃に表明した「人材養成発展」だったと考えられる〔石澤 1992: 9 -13〕。

上智大学研究センターは、現場のカンボジア人を訓練するために、1996年にアンコール遺跡群に近いシェムリアップ市に設立された。センターの名称は後に「上智大学アジア人材養成研究センター」に変更された。これはカンボジアで最初の日本の研究機関であり、上智大学が21世紀の普遍的な世界を实践するというビジョンのもとに設立されたものだ。この機関のもうひとつの目的は、東南アジア地域研究としてグローバルな社会問題をアジアにおける実践活動を結びつけることで解決の糸口をさぐることにあった。

2-3. 王立芸術大学の再開と復興

1989年にカンボジア人民共和国、ベトナム軍完全撤退、国名をカンボジア国へ改名、カンボジアパリ平和協定調印、1979年にクメール・ルージュの支配が終わった後、遺跡の維持と保護の活動が徐々に開始された。内戦から20年を経て、クメール・ルージュの時代を生き残ったわずか3、4人の遺跡保存官や考古学者を中心に、1989年、王立芸術大学の考古学部と建築学部が再開された。こうした状況のもと、上智大学の文化遺産教育が始まった。カンボジア人学生が将来、研究者や専門官としてカンボジアの文化遺産保存事業の発展に貢献できるように、不足している講義を支援した。

王立芸術大学の、特に考古学部と建築学部の再開はチュッ・プーン教授が行った。彼は異なる分野のカンボジア人の教授たちに大学を支援するよう求めた。彼はその時点では文化芸術省の遺跡保存修復部門で働いていたピッ・ケオ（Pich Keo）教授とウック・チア（Uk Chea）教授（考古学部の1970年代の卒業生）を招いた。また同様にプノンペン大学や政府機関に勤めていた他の教員たちも招聘した（Chuch Phoeurn per.com. 2019年7月）。

1992年の後半に、考古学部出身であるアン・チュリアン教授もRUFAを支援するためにフランスから帰国した。大学の再開は彼らの強い献身と努力の賜物だったのである。学部の復活の背後にあった目的は、若いカンボジア人を教育し、訓練することで、自分の責任でクメールの文化遺産の分野に奉仕できる学生を育てることだった。その時点では教師や教材が不足していたために、わずか30人が学部のために選抜された。

2-4. ソフィア・ミッションに参加して一筆者自身の体験を中心に――

ここで私は、1989年の再開からわずか2年後に、石澤教授率いる日本からの多くの専門家と教授が考古学部と建築学部で研修プログラムを開始したことを思い出す。その時、私自身が一般教養課程にいたのだった。我々は学部で5年間の教育プログラムを受けた。それは私たちが外国の教授と一緒に勉強する最初のチャンスであり、私は感銘を受けるとともに緊張した。これら2つの学部を卒業した学生は今でもその時のことを覚えており、彼らが受け取った素晴らしい機会を決して忘れることはないだろう。私たちが受けた集中講義は先史時代、古代史と現代史、世界史、考古学、民族学、地質学、博物館学、環境学、サイト・エンジニアリング（遺跡工学）などだった。

上智大学のプロジェクトとして、カンボジア人学生が将来、研究者や専門官としてカンボジアの文化遺産保存事業の発展に貢献することを目指して講義がおこなわれた。さらに、考古学部と建築学部から選抜された数名の学生を対象に、アンコール遺跡での現場実習が実施された。

プログラムは年に2回実施され、各回につきおよそ15人の学生が現場実習を受けた。1991年3月から2018年8月まで27年間に54回の現場実習が実施され、392名の動員講師と567名の受講生が参加した。またRUFAにおける集中講義は1991年3月から1997年5月までの7年間に16科目につき延べ11回実施された。そしておよそ59名の動員講師が約1500名の受学生に講義を行なった〔上智大学アンコール遺跡国際調査団2020：164〕。

教育プログラムを開始した時、私は考古学部の1年生として先生方の講義を聞いていた。その後1994年からソフィア・ミッションの現場実習生として発掘調査に参加し、卒業後の1998

年には上智大学アンコール国際調査団のスタッフになった。私は上智大学研究センターで研修を受けていたときに、石澤教授がアンコール遺跡郡の現場に私たちを連れていき、寺院の歴史と保存に使用された方法論について説明したときのことをよく覚えている（図2）。そして1999年に学位取得のため上智大学大学院に留学し、その後も日本を拠点に研究を続け、現在に至る。これまで30年にわたって上智大学による人材養成プロジェクトに関わってきたが、ここまで続けてくることができたのは石澤先生のおかげである。

それから先生は私たちに自分自身の考えを説明させ、そのことについて議論をした。それは我々にとって彼のような外国人の教授から直接学べる貴重な機会だった。しかし、彼の哲学はある問題に関する知識を私たちに伝えることだけではなく、むしろ、私たち自身が問題を理解し、感じ、尊重することを望んでいた。つまり、彼は我々が古代の歴史、社会、伝統文化を理解すること、現在に至るまで残存しているものを尊敬し価値を見出してほしいと願ったのである。



図2 1994年、バンテアイ・クデイでの現場実習
[写真提供：石澤良昭]

石澤教授の仕事における大きな特徴は、私たちを教育するために、日本から持ち込んだ方法論ではなく、遺跡での調査活動の経験にもとづいて得られた方法を試みたことである。以下にいくつかの例を挙げたい。アンコール・ワット西参道修復プロジェクトで、古代クメールの技術を用いた²⁾。発掘調査の過程で様々な遺物がで明らかにされた、彼は地域の伝統に従う努力をしたことで賞賛された。我々は教授のこのような姿勢に心から感謝するとともに敬意を表したい。

シュムリアップの上智大学アジア人材養成研究センターでの現場研修実習の一方で、1997年から現在まで、石澤教授の指導と推薦のもと20名以上のカンボジア人学生が上智大学、東京芸

術大学、日本大学、神奈川県研修センターで学んだ。彼らは考古学、歴史学、文化遺産の保存、史跡の管理、古代建築学、IT（情報技術）などについて学び、修士号、博士号、専門家資格を取得することが期待された。これらすべては遺跡の保全に適用することができる。彼らは博士号や修士号を取得し、帰国後に文化芸術省やアプサラ機構（Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）などの政府機関で文化遺産の保全修復に従事している。

3. 文化遺産教育プログラムの意義

アンコールの文化遺産の保全のためには、遺跡と地域社会の双方に配慮する必要がある。なぜならばアンコール地域は寺院遺跡のみで成り立っているわけではないからである。そこに息づく伝統的な文化は、現在も人々の暮らしに深く浸透している。そして地域社会なくして遺跡は生き残っていくことはできない。前述したような我々自身がこれまで学んできたことを、今度は文化遺産と村落の伝統的な習慣の保存のために、地元のコミュニティに対して今我々が還元する番だ。

3.1. 文化遺産教育プログラムの必要性

現在、カンボジアの学校教育において、アンコールの歴史や文化遺産に対する知識や情報、特に学校のカリキュラムにおける教材等が不足している。中学校から高校までの教科書を見るとカンボジアの歴史やアンコール遺跡の歴史、そして文化遺産についての話はとても少ない。さらに、歴史と文化についてカンボジア語の本が少ないため、一般の人々は自分の歴史や文化を知らないのだ。

内戦中、特に1980年代から1990年代初頭にかけて、歴史的建造物のある地域は危険だった。あるカンボジア人遺跡保存官は、1070の寺院遺跡のほぼ80%が被害を受けたと推定している[Mang 1993]。多くの美術品が略奪され、国際市場での美術商の要求に応え、本来は値段をつけられないような文化遺産の価値について考慮しない一部のコレクターの手に渡ったのである。長い間紛争に直面していたカンボジアのような小国では、こうした美術品の不法な密輸が広範囲で行なわれていた。1つだけ例を挙げるなら、1988年以来、サザビーは約377個のクメール美術品を収集したという[Davis 2011]。

これは略奪と収集の密接な関係を示している。現在も美術品の略奪や破壊の報告がある。それは人々がそれらの美術品の真の価値を理解していないからである。美術品の違法な略奪を防ぎ、保護していくために、文化遺産の価値やそれらが示す歴史を学ぶための機会を提供する文化遺産教育を実施していくことが求められている。

3.2. 遺跡にまつわる知識・知恵の共有と普及啓発

ここでは考古学の学問的見地や保存修復事業の成果を地域社会に還元する方法を提案し、検討してみたい。これまで、アンコールの考古学者が文化遺産教育や遺跡の保全にあたって一般的に適用してきた方法である。

- (1) サイト・ツアーを開き、公開講義を行う。

- (2) 情報掲示板を作成する。
- (3) 子ども向けのガイドブックや漫画本を作成する。
- (4) 村人を募集して労働者として雇用する。

さらに寺院や地域の慣習を調査する対象としての協力者や子供たちを地域社会で探すことや、調査後に報告書を書き成果を還元することも文化遺産教育には不可欠である。この方法は当初、ある機関により「Heritage Watch」と呼ばれていたが、のちに「Heritage for Kids」と呼ばれるようになった。「Heritage Watch」は2005年からバンテアイ・チュマール遺跡とその周辺地域を拠点に活動していたが、2018年に「Heritage for Kids」となつてからは、アプサラ機構と協力してシェムリアップ市の周辺とアンコール地域に拠点を移し、より大きなプロジェクトとして実施されるようになった。このプロジェクトでは、王立芸術大学考古学部を卒業し、現在はアプサラ機構に所属している考古学の専門家が指導する。また同時に「Heritage for Kids」はバンテアイ・チュマールの寺院遺跡とその周辺地域での活動も継続している。そこでは、高校生を対象とした調査方法のトレーニングや、子供たちを対象とした有形・無形文化遺産の基本的な概念の教育、また漫画の講読や、寺院遺跡や博物館の訪問といった様々な屋内・屋外活動を行っている[Heritage for Kids (ed.) 2018]。

またアプサラ機構は彼らが考古学的な発掘を行うとき、定期的に現地視察ツアーと、現地での公開講座を実施している。また、アンコール地域のコミュニティのために文化遺産教育講座が実施されてきた。非常に印象的なことは、最近、このプログラムに対する地域社会と地元のエリートに関心が高まり、文化遺産教育を支援するための資金を提供しようという動きがあるという事実である³⁾。地元住民、特にアンコール地域に住む人々と直接的に知識を共有するためには、適切なプログラムを設定する必要がある。

更に、現在様々なメディア（テレビ、新聞記事、ソーシャル・メディアのF Bなど）からの支援のおかげで文化遺産に関する情報が次第に広がっており、地域社会、つまり一般の人々にそうした情報を届けやすくなっている。例えば、カンボジア政府のアプサラ機構や文化芸術省の活動は様々なテレビ局による放送やFacebookやウェブサイトで投稿されている。クメール語のウェブサイトとして注目を集めているヨソトー（Yosothor）というサイトでは毎週のようにカンボジアの歴史、文化、習慣、儀礼、伝統的な音楽、自然などについての投稿があり、その内容をまとめた本が毎年出版されている。

2019年の夏、筆者を含む上智大学の考古発掘チームは、バンテアイ・クデイ寺院で幾つかの遺物を発見した。その時、カンボジアのテレビ局や新聞記者が発掘現場に来て、撮影とインタビューを行った。以前は地域社会に対してなかなか理解を得られず、情報を広めることも難しかった「考古学的な発掘調査」を地域社会に伝えることによって、文化遺産の違法な盗掘を防ぐことができるのではないかと考えている。

3.3. 文化遺産教育プログラムにおけるソフィア・ミッションの活動

3.3.1 プログラムの目標

アンコールの歴史を知るための諸資料の不足や文化遺産に関する知識が地元住民の間に不足している状況を鑑みて、最初に彼らに対する説明を行う必要があった（図3 & 4）。その1つの

手段として、我々は英語、日本語、クメール語で子ども向けのジュニア・ガイドブックを作成した（図5 & 6）。これらジュニア・ガイドブックによって、我々はアンコールの歴史と文化、そして文化遺産の価値について簡潔にわかりやすく説明した（図7 & 8）。



図3 村人がバンテアイ・クデイを訪問 [写真：著者]



図4 中学校の生徒がバンテアイ・クデイを訪問 [写真：著者]



図5 & 6 ジュニア・ガイドブック

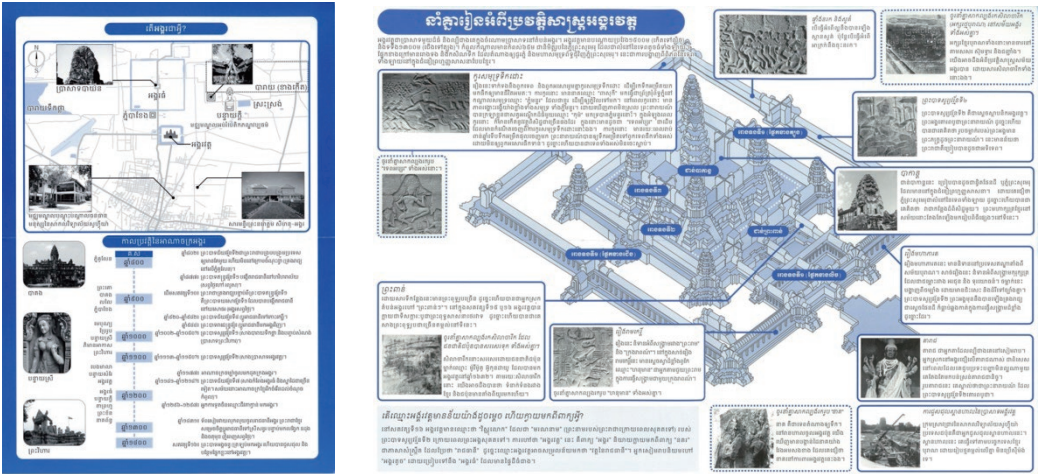


図7 & 8 ジュニア・ガイドブックのカンボジア語版

科学的な考古学的発掘には、学術研究の成果だけでなく、地元住民が発掘の目的と方法を理解するための機会や手がかりを提供してくれる側面もある。我々は村人、特に子供たちを対象に、



図 9 & 10 RUFA の学生が中学校の生徒にバンテアイ・クデイ発掘について説明 [写真：著者]



図 11 & 12 初回の文化遺産教育プログラム（1999 年） [写真：荒樋久雄]



図 13 & 14 RUFA の学生に発掘現場でのトレーニング [写真：著者]

考古学研究のプロセスと重要性について教育する必要があると考えた（図 9 & 10）。子供たちは私たちの未来である。彼らは学んだことを未来の世代に活かし、伝えることができる。我々は、子どもたちに対してアンコールの歴史と文化遺産の価値についての知識を提供するだけではなく、それらの知識を村の家族や友人に伝えるよう促してきた。もし彼らが、文化遺産の価値を理解することができれば、彼らは自分たちの寺院遺跡や美術的に価値ある作品を尊重する意識が強まり、文化遺産の保護に協力するようになるだろう。

3.3.2 サイト・ツアー

ソフィア・ミッション初のサイト・ツアー・プログラムは 1999 年 1 月 30 日午前 7 時から行われた。ロハール村のようなバンテアイ・クデイ遺跡に近い場所に住んでいる村人や学童を招

待し、スラ・スラン・カン・チューン村（北スラ・スラン）、スラ・スラン・カン・トゥボーン村（南スラ・スラン）、およびクラヴァン村の発掘現場と寺院遺跡を訪れた（図 11 & 12）。その当時、我々のツアープログラムに参加した村人は 76 人、生徒は 46 人だった。それ以降、サイト・ツアーは基本的に、王立芸術大学の学生を対象とした考古学的発掘トレーニングと併せて、8 月または 9 月に実施されるようになった。（図 13 & 14）。

学生には、まず現場で発掘方法やバンテアイ・クデイとアンコールの歴史を学ばせ、その後彼ら自身に、子供と村人をガイドさせることにした。このフレームワーク設定は、筆者が上智大学研究センターの考古学スタッフだった 1999 年に作成された。当初、これは発掘調査ごとに毎回サイト・ツアー・プログラムを開くことを意図していたが、行政手続きやその他の理由で、一般向けのサイト・ツアー・プログラムを開くことができなかった。

他にも同様のケースがあった。たとえば、2000 年と 2001 年にバンテアイ・イクデイ遺跡で 274 体の仏像を発掘したとき、我々は発掘地を公開したかったが、当局は我々に必要な許可を与えなかった、その理由は不明である。また 2007 年 11 月、イオン博物館（英語名：プリア・ノロドム・シアヌーク・アンコール・ミュージアム）が完成してバンテアイ・クデイで発見された仏像を展示した。式典当日、約 700 人の村人が賓客を迎えるために来場したが、彼らは博物館に入ることを許されなかった。

2008 年 2 月 26 日の最初の「オープンサイトと博物館の日」には、我々の手配によって、ロハル村から約 160 人が博物館を訪問することができた。その後、2008 年 8 月 30 日に 2 度目の「オープン・サイトと博物館の日」が実施され、このプログラムに参加しているサマキー・サハクム小学校（博物館から約 1km の場所に位置する）から 146 名の生徒を招待した（図 15）。以来、現在まで定期的にサイト・ツアーを実施している。



図 15 小学生がイオン博物館を訪問 [写真：丸井雅子]

2010 年以降、プロジェクトはアンコール地域全体とシェムリアップに拡大された。2018 年 8 月までの総参加者数は以下のとおりである。小学校の生徒 1521 人、中学校の生徒約 500 人、教

師 115 人、村人 150 人。我々のプログラムに参加する生徒を派遣した学校は 25 校だった。2011 年、日本政府から受けた草の根文化無償資金協力によって「文化遺産教育センター」がバンテアイ・クデイの敷地内に設立され、一般公開された。我々はそのに、掲示板やパネル、バンテアイ・クデイで発見された仏像の 3D レプリカ画像などを展示した。

サイト・ツアーは通常午前中に行われた。バンテアイ・クデイの近隣の村人や生徒たちがやってくる場合、我々は寺院遺跡の前で彼らを待っていた（図 16）。このサイト・ツアーは、いわゆる「現場説明」のようなもので、一般の人々対象に遺跡を公開して活動内容を紹介し、遺跡発掘への理解と協力を得るために行われる。

日本でこうした現場説明が行なわれたのは、1955 年の奈良県飛鳥寺での発掘調査にさかのぼる [Marui 2010]。我々はバスを手配し、人々を乗せて遺跡に案内した。



図 16 中学生がバンテアイ・クデイ寺院に到着の様子

3.3.3 雇用募集

我々は、12 世紀後半に大乘仏教を信仰したジャヤヴァルマン 7 世王によって建造されたバンテアイ・クデイ遺跡の発掘調査およびアンコール・ワットの西参道での修復作業のために遺跡近隣の村人を募集した。バンテアイ・クデイでの発掘調査は寺院遺跡における地層の層序と文化的な層の構成を明らかにするために 1991 年からソフィア・ミッションの若手研究者によって実施され、およそ 10 人の村人が発掘に参加した。

当初このプロジェクトに携わっていた村人のほとんどは現在も我々とともに働いている（図 17 & 18）。彼らは発掘作業の過程で私たちを巧みに助けに来ており、作業にあたって多くを指示する必要はない。村人たちは毎日の賃金を得るために働いているだけではなく、同時にまた遺跡の保護を助けてもいる。たとえば、夜間や大雨のとき、彼らは彫刻が盗まれたり、石造りの構造物が落ちたりするなど、現場に異状がないかを確認するために遺跡に行く。もし異変を発見したらすぐに我々に問題を報告してくる（図 19 & 20）。彼らは考古学的発掘と文化遺産の保護が何を意味するかを理解している。彼らはこのプロジェクトに参加するにあたって、自身が属するコミュニティの大使を務めているといつてよい。

ソフィア・ミッションのもうひとつのプロジェクトは、1996 年に APSARA 当局と共同で開



図 17 & 18 村人が発掘調査に参加（1999）[写真：荒樋久雄]



図 19 & 20 村人が略奪の彫刻を保護（1999 年）[写真：荒樋久雄]

始されたアンコール・ワット西参道での修復作業である。この修復プロジェクトでは第1フェーズを完了するために10年かかったが、それはこのプロジェクトの本質が修復を完了することだけにあるのではなく、カンボジア人の専門家と労働者を訓練することにあつたことを示している。それはソフィア・ミッションの枠組みにおいて重要なことであり、このプロジェクトでは日本人の教授や専門家の尽力によって育成した60人以上の石工を専門家のレベルまで育成した[石澤・片桐・三輪 (eds.) 2011、Nhim 2013]。

また、ソフィア・ミッションのプロジェクトは、カンボジア人スタッフが自身のアイデアをもって活動するための意思決定の機会を提供してきた。たとえば1999年には、我々はプノン・バケン、アンコール・ワット、アンコール・トム、バンテアイ・クデイでゴミ拾いをする清掃プログラムを実施した。当時はゴミがたくさんあり、特に思慮に欠けた地元の観光客が捨てたビニール袋が多かった。我々はバンテアイクデイの近くにあるロハル村から毎週木曜に約10人の村人を呼んで清掃作業に参加してもらい、ソフィア・ミッションから受け取った少額の謝礼を支払った。その後、清掃プログラムはメンテナンス作業という名称に変更され、金曜日にはバンテアイ・クデイで行われるようになった（図21）。我々の目的は清掃作業だけではなく、村人に寺院遺跡の価値を理解させ、観光客に対して寺院遺跡での思慮深い敬意に満ちた態度を身をもって示す

よう仕向けようとしたことにあった。清掃プロジェクトと文化遺産教育プログラムは、他の機関に先駆けてソフィア・ミッションが開始した活動である。



図 21 村人がバンテアイ・クデイでの清掃作業 [写真：荒樋久雄]

おわりに

遺跡の迅速な保存修復作業は不可欠だが、ソフィア・ミッションの取り組みは人材育成の発展に焦点をあてたものであり、それは文化遺産保護を長期のビジョンで捉えたときにもっとも重要なものである。

ハードウェアとソフトウェアはどちらも同様に重要である。もしプロジェクトが単に遺跡の修復作業で構成されているなら、それは短期間で完了する。しかし、そこで行われた作業は、100年200年のうちに何らかの破壊行為によって台無しにされるかもしれない。そのような事態が起きたときにも、人々を教育する長期的なプロジェクトが行われていたならば、教育を受けた人々が自分自身で働き、遺跡を復興するとともに、次の世代を教育することもできるからである。

カンボジアにおけるソフィア・ミッションの長期プロジェクトは、上智大学の持つ創造の精神に触発されたプロジェクトといえるであろう。上智大学によってもたらされたこの国際的教育プロジェクトは、現在および未来の人々のための遺跡の保存修復作業を通して貢献するだろう。異なる文化間で相互に関係を築いてゆく営みは、人々の間に団結を生み出し、多様な人々が平和に一緒に暮らし、相互が理解し合う世界で生きるための糧となるのである。

さらに、文化遺産教育は、研究の成果として得られた知識を研究者の間だけで占有するのではなく、地域社会と共有することを目指している。なぜなら、長期的視点に立てば、地域社会に対する教育は文化遺産の保護という課題の一部として位置づけられるからだ。地域社会の人々がこのような認識を得るためにも研究を急ぐ必要があるが、これまで取り組んできた遺跡サイト・ツアーをはじめとして、地域社会の人々に考古学に対する認識を促す活動とともに取り組んでゆきたい。

多くの村人、子供、そして学校の教員は、彼らが自分たちの歴史以上のものを学んだと言って、我々のプログラムに興味を示した。一部の教員は「私はプログラムから学んだすべてを学校の

教師と生徒に伝える」と明言した。さらにこのプログラムはカンボジアの子供たちが寺院遺跡、歴史、そして文化遺産をより深く理解する機会となり、それによってクメール文化と文化遺産の保護に繋がってゆくものと期待される。子供たちが自分たちに身近な文化遺産について学び、理解を深めることで、彼らは将来的に自らの属する文化や祖先が築き、継承してきた寺院遺跡を自分たちの手で守ろうとするであろう。

考古学研究と遺跡管理の枠組みに地域社会の視点を組み込むことで、地域社会からより多くの関与が期待できるようになり、長期的にみて地元住民を主体とした文化遺産保護の実現に結び付いてゆくと考えられる。

謝辞

本稿における日本語の訂正やコメントなどをくださった石澤良昭教授、久保真紀子氏、波多野直樹氏に心から御礼を申し上げたい。

参考文献

- 石澤良昭監修 1981『埋もれた文明アンコール遺跡』日本テレビ
- 石澤良昭 1989「アンコール・ワット」『カンボジア文化復興』1：77-93
- 石澤良昭 1990a「アンコール遺跡保存修復再開に向けての提案」『カンボジア文化復興』3：17-26
- 石澤良昭 1990b「ユネスコ主催アンコール遺跡国際円卓専門会議報告」『カンボジア文化復興』3：27-30
- 石澤良昭 1992「上智大学アンコール遺跡研究・国際調査団の方針—原則と提案—」『カンボジアの文化復興』7：9-13
- 石澤良昭 1996「人材養成プロジェクト 1991～1995—5年目を迎えたカンボジア人専門家育成、その経緯と理念」『カンボジア文化復興』12：101-109
- 石澤良昭、丸井雅子 1999「文化遺産人材養成プロジェクト 1991～1999」『カンボジアの文化復興』16：231-237
- 石澤良昭、片桐正夫、三輪悟 2011 (eds.)「アンコール・ワット西参道修復工事—第Iフェーズ—」『上智大学アジア人材養成研究センター』
- 上智大学アンコール遺跡国際調査団 2020「カンボジアにおけるソフィア・ミッション」『アンコール遺跡を科学する』21：151-193
- 坪井善明 2006「21世紀のカンボジア社会文化発展戦略」『カンボジア文化復興』22：79-87
- Ang, Choulean. 2000. “La faculté d’archéologie,” *Bulletin of the Students of the Department of Archaeology*, Phnom Penh: Royal University of Fine Arts, p. 1 (in Khmer language) & p. 29 (in French).
- Aymonier, Etienne. 1900-04. *Le Cambodge*, 3 vols, Paris: Ernest Leroux.
- Carter, Alison., Heng Piphah, Heng Sophady, Phon Kaseka. 2014. “Post-Khmer Rouge Cambodia,” In C. Smith (ed.), *Encyclopedia of Global Archaeology*, New York: Springer, pp. 6059-6065.
- Davis, Tess. 2011. “Supply and Demand: Exposing the Illicit Trade in Cambodian Antiquities through a Study of Sotheby’s Auction House,” *Crime Law Social Change* 56 (2), pp. 155-174.
- Delaporte, Louis. 1880. *Voyage au Cambodge: l’Architecture Khmère*, Paris: C. Delagrave.
- Falser, Michael. 2015. “Epilogue: Clearing the Path towards Civilization – 100 years of ‘Saving Angkor’,” In M. Falser. M (ed.), *Cultural Heritage as Civilization Mission: From Decay to Recovery*, Heidelberg: Springer International Publishing, pp. 279-346.
- Heritage for Kids (ed.). 2018. *Heritage for Kids Annual Report*, Siem Reap: Heritage for Kids (Unpublished).
- Ishizawa, Yoshiaki. 1986. “The Sophia Project in 1985-1986,” In Y. Ishizawa and Y. Kono, eds.), *Cultural Heritage in Asia: Study and Preservation of Historic Cities of Southeast Asia*, Tokyo: Japan Times, pp. 117-118.

- Lunet de Lajonquière, E. 1902-11. *Inventaires Descriptif des Monuments du Cambodge*, EFEO, 3 vols, Paris: Ernest Leroux.
- Mang, Channo. 1993. "Plunder of Art Works Continues," *Phnom Penh Post* 30 Jul 1993, <https://www.phnompenhpost.com/national/plunder-art-works-continues> (Accessed January 5, 2020)
- Marui, Masako. 2010. "Cultural Heritage and Communities Coexisting: Public Archaeology in Cambodia, 1999-2009," *Public Archaeology* 9 (4), pp. 194-210.
- Nhim, Sotheavin. 2013. "Activities of the Sophia Mission and Cultural Heritage Education," *Investigation of the Angkor Monuments: Findings Concerning the Study of the Angkor Monuments* 18, pp. 25-50 (In Khmer).
- Pavie, Auguste. 1898. *Mission Pavie Indo-Chine 1879-1895: Recherches sur l'Histoire du Cambodge, du Laos et du Siam*, Vol. 2, Paris: Ernest Leroux.
- Pich, Keo. 1992. "Activité Culturelle dur les Monuments d'Angkor," *Sophia Project Meeting on the Preparation of its Second Phase, Cultural Heritage in Asia* (6), pp. 89-104.
- Ponchaud, François. 1978. *Cambodia: Year Zero*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Pottier, Christophe. 2000. "The Contribution of the Ecole Française d'Extrême Orient with Respect to the Cultural Heritage of Angkor during the Past 100 Years," *The Journal of Sophia Asian Studies* 18, pp. 253-262.
- Stark, Miriam and Heng Piphah. 2017. "After Angkor: An Archaeological Perspective on Heritage and Capacity-Building in Cambodia," In P. Newson and R. Young (eds.), *Post-Conflict Archaeology and Cultural Heritage: Rebuilding Knowledge, Memory and Community from War Damaged Material Culture*, New York: Routledge, pp. 195-216.
- Vickery, Michael. 1984. *Cambodia: 1975-1982*, Boston: South End Press.

注

- 1) RUFA における能力開発の詳細については、Stark and Heng (2017) を参照のこと。
- 2) 修復プロジェクトの第一フェーズは 1996 年から 2007 年。
- 3) 考古学の専門家であり、APSARA 当局のプログラム指導者であるイム・ソクリティ (Im Sokrithy) 氏から 2019 年 8 月に得た個人的な情報による。

シンガポールにおける「公共圏」の拡大 —市民運動が提起する「価値」とその活動の検証—

NHK 国際放送局 シニア・ディレクター

道傳愛子

はじめに

政治体制、経済発展の軌跡、社会的な価値が多様な国の集合体である ASEAN（東南アジア諸国連合）の中で、シンガポールは 2019 年の一人当たりの GDP（実質国内総生産）は 65,640 ドルと、ミャンマーの 1,477 ドルと比して実に 45 倍の開きがある¹⁾。域内有数の先進国と位置づけられる所以である。一方でシンガポール人材省の給与調査報告書によると 2021 年 1 月時点で最も給与が高いのは管理・行政職で 10,000 シンガポールドル、最も低いのは清掃従事者の 1535 シンガポールドルと、およそ 6.5 倍の所得格差がある [資料 1]。さらにこのグラフが示すように、管理職・行政職の給与は 2010 年から 2020 年で 2 倍近くに伸びながら、工場労働者や清掃従事者といったいわゆるブルーカラーの人たちの給与は微増、あるいは頭打ちであり、国内格差は縮小する兆しが見えないのも今日のシンガポールの現実である。

東南アジアでは、経済成長を経て中間層が出現すると、1986 年にはフィリピンでマルコス大統領の独裁に反対する「ピープルパワー革命」で政権が崩壊し、インドネシアではアジア通貨危機をきっかけにスハルト独裁政権への反発が強まり 1998 年に政権が崩壊した。タイでは、元陸軍司令官で 2014 年のクーデターを主導したプラユット首相の退陣を求める抗議デモが今も続くなど、権威主義的な政権に対して市民が声を上げ、その異議申し立てが国家のあり方をも左右する大きな政治的運動となっている事例がある。しかしシンガポールでは、そうした異議申し立ての動きが表立っては見られないのはなぜか。

豊かな社会は実現しながらも、富は必ずしも公正には分配されず、社会的な格差が顕在化した時に、経済発展を国是としてきた政府は何を「価値」として提示するのか。社会では、それでも現状維持の志向は維持され表立った異議申し立ては行われぬのか。市民は何を「価値」として依拠するのか。その「価値」が共有されることで、市民や社会にはどのような変化が生まれようとしているのか。本論文ではこうした問いに向き合い、考察を加える。

1. 問題設定と研究目的

シンガポールは 1965 年の独立から半世紀あまりで、世界有数の経済先進国としての地位を確立した一面と、依然として存在する格差や、発展の果実を享受することのない低所得者層などの課題を抱えている。表立った異議申し立てが行われてこなかったこの国で、近年、豊かさを享受した中間層の間で、社会福祉や奉仕活動への関心が高まり、沈黙を破り貧困や脆弱な立場にある人たちの救済に取り組む動きが生まれている。

背景には、発展の影で、一向に所得が増大しない低所得者層が存在し、格差が縮小されない状況が何年にもわたって続いていることや、人口構成のグラフにあるように [資料 2]、総人口

は減少する中で 65 歳以上の高齢人口が 2020 年にはすでに全人口の 13% を占め、2030 年には 22.5% に上昇する見通しであり、少子高齢化社会への突入で社会保障の圧迫は避けられないことが誰の目にも明らかになっていることがある。

本論文では、高齢者や低所得者層など格差の末端にある人々を、あたたかなお弁当を 365 日届けるという活動を通して支援する市民のボランティア運動に注目する。ボランティア団体の主宰者トニー・テイ Tony Tay は 2017 年、アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を受賞した。その取り組みは、アジア有数の経済発展を遂げる先進国であっても、生きて行くために最低限必要な衣食住の「食」すら、すべての人には行き渡っていない今日のシンガポールの実情や、国家の求心力である経済発展の維持と、社会の中で周辺化した人たちを救済することのどちらもが喫緊の課題になっていることをもあぶり出している。

あたたかいお弁当を届ける活動は、政府に対して異議申し立てを行う運動として組織されたものではなく、一人の市民が始めた行動が、時間をかけて多くの市民の参加を得て運動・ムーブメントとして規模化したものである。運動が一貫して暴力や抗議行動を伴わず、奉仕活動に特化しているのはなぜか、アドボカシーなど積極的な言論活動を行わないにも関わらず、ゆるやかな連帯が生まれていったのはなぜか、その過程で市民にはどのような「価値」の問い直しがあったのかを考察するのが本論文の目的である。

2. 方法論

本論文では、筆者が 2018 年 6 月と 12 月にシンガポールでボランティア活動に同行した記録、ボランティア団体主宰者のトニー・テイや活動参加者、賛同者、受益者に現地で行った聞き取りを一次資料とする。活動が誕生した経緯や活動のしくみをたどることで、何が運動を持続させているのかをさぐり、テイやボランティアへの聞き取りを通しては、「価値」はどのように創造され共有されて行ったのかを考察する。

では「価値」とは何か。価値を論じるには経済学や哲学、倫理学、宗教学、心理学などの分野に立ち入らなければならない。本論文では、個人の主観的な欲望やニーズを満たし、満足を与えるとする経済的価値や、民主主義や社会主義といったイデオロギーを基盤とした政治学的な価値体系ではなく、倫理的価値、道徳的価値を「価値」として論じる。中でもドイツの哲学者マックス・シェーラーが価値の不可分性、つまり、価値が分割できなければできないほど、その価値は高いとしたことに注目する [シェーラー 1980]。価値が人々を分断するのではなく、共有され、人々を一つに結ぶことができるほどその価値は高まるという意味である。テイの活動が多くの賛同者を得て規模化した過程には、共有され、人々を一つに結ぶものとしての「価値」があったと考えるからである。

テイの活動に市民が連帯し、取り組みが次第に運動・ムーブメントとなっていった過程の分析では、社会学者の鶴見和子が提唱した内発的発展論と、ドイツの哲学者であり思想家のユルゲン・ハーバーマスの公共性論に依拠する。

鶴見は、内発的発展は「それぞれの地域の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域住民の協力によって、発展の方向と道筋をつくりだしていく創造的な事業」[鶴見 1999] と位置づけ、主に日本の農村や中国の地方の町をフィールド

にした事例研究が中心で、他のアジア諸国の事例の検証は多くは積み重ねられていない。西川潤による「アジアの内発的发展」[西川 2001]でも、中進国へ躍進する前の段階にあったインドネシアやマレーシア、タイなどの運動が研究の対象となっている。アジアはその後大きく変貌を遂げ、シンガポールも経済先進国への成長を遂げ、内発的发展の枠組みのみでは十分には検証できないところに限界が見出される。

そこで本論文では、ハーバーマスの公共性論にも注目し依拠する。鶴見は内発的发展論の要素として、地域の運動としての共通の紐帯は共通の価値、目標、思想であることや、相互作用として定住者と地域外からの漂泊者との相互作用の双方を含む関係性をあげている。しかし今日のアジアでは、経済のグローバル化とともに、インターネット、ソーシャルメディアなどSNSが発達し、国境をも超えて情報の発信と共有が行われている。それは定住者と外部からの漂泊者の区別を曖昧にし、運動の空間は物理的な活動の拠点に限定されず、ネット空間を含めた広がりを見せている。それはハーバーマスが論じた公共圏の創出につながり、自由な意志にもとづき意見形成を行う結社（アソシエーション）の出現であると考えられる[ハーバーマス 1990]。

アジアを事例とした公共性論の先行研究は極めて少ない。ハーバーマスの議論では国家に対抗するものとしてあらわれる公共性の主体は、討議する力を付与された、いわゆるブルジョワジーととらえていたことに限界があり、本論文では、今日のアジアで、立ちあらわれる公共圏の主体は、「価値」を語り、社会のありようについて異議申し立てを行い、行動する一般市民であることを明らかにし、東南アジアで公共性を論じることに新たな意味を見出すことを試みる。

3. シンガポール政府と価値

3-1 国家が定義する「価値」

3-1-1 政府の方針

建国から今日まで、経済発展を国是とする中で、政府はどのような「価値」を市民生活に浸透させていったのか。実はシンガポール政府は、国民に対して国家として掲げる「価値」を明文化して提示している。1991年に The Shared Values（共有される価値）として①コミュニティより国家のために、個人よりも社会のために、②社会の基本単位は家族、③共助とお互いへの思いやり、④争いより一致、⑤人種と宗教の調和の5項目が、国民が守るべき価値として提示されている。中華系、マレー系、インド系など多民族からなる国家が、シンガポール人としてのアイデンティティを醸成することを主眼としている。²⁾ この5項目の「価値」は、国民の誰もが知っているだけでなく、平易な言葉に言い換えられ政府広報や学校教育の現場でも教えられることで、隅々に浸透している。

政府の方針に映し出されているのは、リー・クアンユー初代首相の思想である。「偉大な国家とは、単にその国土の広さを指すのではない。国家は人々の結束・つながり、規律、活力があってはじめて歴史に足跡を残せる」³⁾と述べているように、シンガポールが国家として掲げる「価値」は、多様な民族、宗教、文化からなる都市国家として、多様性がありながら調和のある社会を創出することであり、人と人とのつながりを意識的に構築し、結束を確認し強化する不断の取り組みを進めることである。それは、多様な文化を尊重し、他民族との共存に向けて努力する

ことなしには、社会の安定、国内の調和を達成できないというリー・クアンユーの哲学に裏打ちされている。

世界的な金融都市としての地位、政治的な安定とあいまって、建国以来 50 年あまりの間に、小国でありながら国土の面積以上の存在感を印象付けるほどに確立した自国について、外交官としてリー・クアンユーの薫陶を受けたピラハリ・カウシカン元外務次官は「シンガポールは凡庸であることは許されず、並外れて（extraordinary）優れていなければならない。国家の存続をかけて、経済、外交、防衛はもとより、国民の生活、国際社会に投影されるイメージの管理まで、すべての分野で国をあげた努力がなければ、“地図上の小さな点”以上の地位は築けなかっただろう。」と回想している⁴⁾。その発言には、50 余年の国家建設のあらゆる分野で政府と国民が一丸となって築きあげた成果が、今日のシンガポールなのだという自負も映し出されている。

3-1-2 建国の父が創造した「価値」

シンガポールの歴史は建国の父リー・クアンユーを抜きにして語れない。1923 年に英国植民地下のシンガポールで中国から移民してきた両親の下に生まれ、35 歳の若さで首相の座につき、シンガポール独立を経て、87 歳の引退後も政界の重鎮として存在感を示した。その間にマレー半島の南端にある資源にも恵まれない奄美大島ほどの広さの国は、一大金融センターとしての地位を築くまでに驚異的な経済発展と都市国家建設を実現させた。では、シンガポールにおける「価値」の創造と共有にリー・クアンユーはどのような役割を果たしたのか、そしてその「価値」は国民にどう受け入れられたのか。

リー・クアンユーは小国に発展と安定をもたらした開発優先の政策を進めた一方、時に国民の政治参加や言論の自由を制限し、独自の安定と成長をもたらしたという一面もある。実際にリー自身、それを自認し直截にこう語っている。「私は、国民の生活に干渉し過ぎではないかと、たびたび批判を受ける。しかしそれをしなかったら、今日のシンガポールは存在していない。隣に住んでいる人の素性は何か、どこに唾を吐くのか、大きな騒音を出してはいけない、何語を使うべきかなど、生活のあれこれ、私権に関わることに干渉しなかったなら、今のシンガポールの経済発展はなかっただろうと、少しも後悔することなく断言することができる。」[Lee 2000]

リー・クアンユーが 2015 年に 91 歳で生涯を閉じてからすでに 6 年が経過している。しかしシンガポール政府や国民は、建国の父が亡くなったあとも、遺された言葉から思想や哲学、信条を読みとろうとし、閣僚もその発言に依拠して発想し、発言・発信している。中でも「若者たちに告ぐ。地平線を見よ。虹を探し、その高みを目ざせ。」[Lee 1996] と、より豊かな暮らしの実現に向けてたゆまない努力を呼びかけた言葉は、合言葉のように 7 色の虹イラストとともにシンガポールの街なかの喫茶店の壁、冷蔵庫のマグネット、個人の Facebook などにも頻繁に登場し、それを見る多くの者を今も鼓舞している。リー・クアンユー自身、「たとえ病床にあっても、墓に埋葬されようとしている時でも、何かがよくない方向に向かっていると感じたら、私は起き上がるだろう」と生前に述べたことがある（1998 年建国記念日の演説）。その意味でリー・クアンユーが創造し語った「価値」は、シンガポール政府や国民を通して、シンガポールをシンガポールたらしめる「価値」として継承され続けていると言える。

3-1-3 達成された発展と「存在しない」貧困

では、リー・クアンユーが先頭に立って行ったシンガポールの国家建設、国是として達成した経済成長や、その過程で顕在化した課題は何か。繁栄の歴史のこれまでを、シンガポール政府はどのように総括し相対化しているのか。

シンガポールの2019年の一人あたりのGDPは世界銀行によると65,640ドルと、日本の一人あたりのGDP40,777ドル⁵⁾をはるかに凌ぐ。しかしシンガポール政府の公式統計には、経済活動に関する指標は示されていても、貧困に関するデータは見当たらない。実際にシンガポール統計局の資料で、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目標1-1「2030年までに世界中で一日1.25ドル以下の極度の貧困をなくす」のシンガポールにおける達成度を検索すると、「シンガポールでは国際的な貧困ラインを採用していないため、該当なし」と表示される⁶⁾。では貧困はどのように測定され、その削減はどう評価されるのか、その代替の指標については明示されていない。つまりシンガポールでは少なくとも統計上は、貧困や貧困層は存在していない。

そうした中で、社会家族開発省が2018年11月に発表した報告書 Occasional Paper: Improving the Lives of Low-income and Vulnerable Families in Singapore（シンガポールにおける低所得者層および脆弱層の生活の改善に向けて）に注目する。「貧困」という用語は使われていないながら、低所得者層や脆弱層の生活改善が必要であることを述べ、「シンガポール政府は建国以来の国家建設において、諸外国と比べて公正で包摂的で思いやりのある社会の創設にまい進はしてきたが、それは完璧なものではなかった」と公式に自省を込めて総括しているからである [Improving the lives of the low income and vulnerable families in Singapore, Ministry of Social and Family Development Occasional Paper, Singapore 2018]⁷⁾。報告書は Occasional Paper と銘打たれているように定期的に発行される文書ではなく、低所得者層や脆弱層の生活改善という課題に絞り、政府の問題意識、現在の政策、今後の方針をまとめた緊急報告書である。上述の総括を含め課題について説明し、行動をとることを約束することなしには国民の理解を得られないという社会的な要請に、政府が突き動かされていることが伝わる内容となっている。

3-2 マグサイサイ賞受賞者が提起する「価値」

3-2-1 外部から評価された取り組みの意義

多様な文化の尊重、弱い立場の市民への思いやり、調和のある社会の創設を国家が価値として掲げても、市民から賛同され、達成されるとは限らない。市民は何を価値と考え、どのようにその価値を実現しようとしているのか。それを考える鍵は、市民がボランティアとして組織する貧困層支援の取り組みにあった。

その取り組みは、2017年、アジアのノーベル賞と言われる「マグサイサイ賞」を受賞し、内外の注目を集めた。マグサイサイ賞受賞によって、シンガポールの外から光が当てられることで、活動の意義はシンガポール国内でも再発見されたかたちになった。慈善活動家のトニー・テイが2003年に立ち上げた団体「Willing Hearts・ウィリング・ハーツ（自ら進んで行っ心）」が、食料支援を通して低所得者層を支援する取り組みで⁸⁾、ボランティア11人が300食を貧しい人たちに供給するところから始まった。今では365日一日も欠かすことなく1万食⁹⁾のあたたかい食事を、食べることに困る人々に届ける活動となっている。

マグサイサイ賞財団は、テイの活動を「あたたかなお弁当革命」と表現し、その業績を讃えた。困っている人に施しをする一過性の慈善事業ではなく、自ら進んで行いたいと思う心（Willing Hearts）を持つ人が集まることで、社会変革をもたらす活動と位置づけた。活動は食料支援を超えて、地域社会に変革をもたらすムーブメント・運動として広がって行ったからだ。

3-2-2 「あたたかなお弁当」を届ける活動 創始者トニー・テイ

筆者は2017年8月のマグサイサイ賞授賞式¹⁰⁾を取材した[資料4]。来賓としてフィリピン副大統領、財界の要人、各国大使などが列席し、受賞者たちは活動の理念や意義、達成した業績について記念講演を行う。ところが、順番が来て演台へと進み出たテイは、冒頭で絶句し、スピーチが中断した。しばしの沈黙の後、テイは壇上から、満員の聴衆に対して「失礼をお詫びします。私は貧しい生い立ちで満足な教育を受けていない。今でも、不自由なく文章を読むことが不得手なのです。」と告白すると、万雷の拍手が起きた。テイが今日、活動を通して向き合う貧困は、テイ自身の生い立ちとも深く関わっていた。

テイは、中国からマレー半島に渡ってきた両親のもとに1946年、英国植民地下のシンガポールに生まれた。幼い時に父親が家を出て、残された母親はイギリス人の家庭の家政婦として生計を立てた。4人の子どものうち、長女は修道院に預け、二女と三女は養女に出し、テイは5歳の時からキリスト教のカノッサ修道院が運営する孤児院に預けられて育った。食べ物が十分でない時は、シーク教寺院に行き、ターバンを巻くシーク教徒に倣い、自分も頭にハンカチを載せて施しを受けたと言う。学校には通えず、英語は、母親がイギリス人の家庭で住み込みで働いていた時に一時、一緒に暮らして覚えた。成人してからは、八百屋、ミルクスタンド、マレーシアへの出稼ぎ、精肉の冷蔵業者、保険会社外交員など、選り好みをせずあらゆる仕事に就き、40代で印刷会社を立ち上げてチラシなどの印刷を始め、生計の見通しが立つ生活をようやく送ることができるようになった。

3-3 なぜ「あたたかなお弁当」なのか

3-3-1 日ごとの糧としてのお弁当

あたたかなお弁当を届ける活動は、いつ、どのようにして始まったのか。なぜ「あたたかなお弁当」を届けるのか。そもそも活動は、お弁当を配る活動として始まったのではなく、最初はパン工場から余ったパンをもらい受け、困っている人たちに配る活動だった。きっかけは2003年、母親の葬儀にやってきた孤児院のシスターたちの言葉だった。テイを少年の頃から知るカノッサ修道院のシスターたちは、テイに「朝、孤児院の子どもたちに食べさせるパンを集めてくれないか」と相談したという。テイが引き受けることにしたのは、自身も極貧だった幼い頃、「神様、今日もパンが食べられますように」と跪いて祈る日を過ごしていたからだだった。

市内のパン工場から、規格外で売れ残ったパンを200個ほど集め、孤児院に持っていくと、シスターは子どもたちに必要な20個ほどを受けとり「残りはどうすればいいか、わかりますね」と言った。テイは妻と一緒にパンを持ち帰り、翌朝、道路を掃除する人たち、ごみを収集する業者に配ったところ感謝された。次は野菜も集め、パンとともに配り始めた。すると、パンは受け取るが野菜を受け取らない男性があった。料理などしないからだだった。

食べてもらえない野菜を配っても意味はない、それなら手に入った食材を自宅の台所で、自分たちで調理して「料理」として届けよう、と妻と話し合い、翌日には「食材」ではなくあたたかな「料理」を簡単な容器に詰めて配ることにした。あたたかなお弁当を届ける活動は、ここから始まった。こうして 2003 年に、自宅の台所で家族と友人たちと始めたあたたかなお弁当を配る活動は、20 年近く続けられ、今ではボランティアを一日に 200 人動員し、毎日欠かさず 1 万食のお弁当を届ける活動となっている。

団体のホームページを見ると、活動内容については「恵まれない人たち、社会から疎外された人たちに“日ごとの糧 (daily bread)”を届け、社会の有用な一員となるよう支える」ことであるとだけ書かれている。daily bread は「毎日のパン」とも訳されるが、キリスト教では「毎日の糧」「日ごとの糧」を意味し、カトリック、プロテスタントを問わず信仰の中心的な祈祷文である「主の祈り¹¹⁾」でも唱えられる重要な概念である。神に「日ごとの糧を今日も与えたまえ」と祈る時、それは空腹を満たす食糧としての糧を意味するだけでなく、不安を癒し、心に滋養を与えんという意味で「霊の糧」であることが主の祈りに込められた意味であるとキリスト教会では理解されている。

活動には、テイが活動を通して掲げ、具現化している「価値」の一端がうかがえる。つまりテイとボランティアたちによるこの活動は、単に食料を配ることにとどまらず、「日々の暮らしが満たされたものでありますように」という祈りとともに「毎日の糧」を届けることであり、届けている daily bread (毎日のパン) は食料であるだけでなく、人が人として生きて行くのになくしてはならない「霊の糧」であることも意味しているからである。

テイ自身、キリスト教の孤児院で育ち、洗礼を受け、その後、導かれるように孤児院の子どもたちにパンを配ることを始め、あたたかなお弁当を配る活動へとたどりついた。その軌跡には、テイ自身が社会から疎外された存在として貧困や飢餓を経験したことが、キリスト者としての行いとして昇華されていると言える。国家として豊かになる一方で格差が依然として存在し、毎日の食事でも満足に得られない貧困など社会が抱える課題に対して、活動はセーフティネットの網からこぼれ落ちるリスクにある人たちを掬い上げる取り組みとなっている。

テイから、政府や社会のありようを強く批判する言葉は聞かれない。抗議集会やデモ、声高に行政への申し入れなども行わない。そうした批判を許容しない社会的な圧力があるのがシンガポールの現実でもある。しかしテイの活動は、「日ごとの糧」が等しく人々にありますようにとの祈りであり、カトリック信者であるテイの信仰に根差した行いであるという意味で、極めて自発的、内発的に生まれた異議申し立てだと言える。

3-2-2 活動の概要

ではテイの自宅台所で始まった活動は、どのようにして賛同者を得て、規模を拡大していったのか。活動は Willing Hearts という団体名で 2005 年には非営利団体として登録され、2008 年には慈善団体として登録されている。Willing Hearts のホームページのよると「活動は一握りの事務局スタッフ以外はすべてボランティアによって行われ、活動内容は食事を調理し、高齢者、ハンディキャップのある人、低所得者層、一人親家庭の子ども、外国人労働者たちを対象に市内 40 か所あまりに 365 日届けること。」と規定されている。

ボランティアの作業には、衛生面への配慮から、手を洗うこと、頭をすっぽり覆うネットを着用すること以外に細かな決まりはない。事前のオリエンテーションもない。手伝いたいと思う気持ち、Willing Hearts さえあれば、誰が参加しても良いとされている。工夫は、特定の時間にボランティアが集中しないよう、ホームページやアプリでボランティアができる時間帯を予約する仕組みがあることだ。[資料 3] 氏名や参加したい時間を入力して予約するだけで、職業、年齢、性別、国籍などの個人情報の入力には求められない。この仕組みで、ボランティアの人数と参加する時間帯を調整することができ、どの時間帯にも必要な人数を確保できるようになっている。

この食事を提供する活動は、屋外の広場などで人を集めて行う「炊き出し」ではない。食べることに困窮する生活者はどこにいるのか、ボランティアたちがソーシャルワーカーなどから情報を集めて割り出し、公団住宅、教会、モスク、コミュニティセンターなど市内の配達ポイントや、外出できない人たちの住まいに手分けしてこちらからボランティアが出向き、お弁当を届けている。

3-3-3 活動の流れ

テイの慈善団体の名前は「Willing Hearts」、「手伝いたいと思う心の集まり」という意味が込められている。団体はテイ含め事務局のみが専従スタッフで、活動はすべてボランティアによって担われている。テイによると、必要なのは働き手の「手」ではなく、力を貸し手伝いたいと思う「心」という意味をこめ、Willing Hearts と命名したという。とはいえ、1 万食ものお弁当を毎日届ける活動はどのように行われているのか。2018 年 6 月および 12 月に筆者が活動に参加した経験をもとに、撮影した写真と一日の作業の流れを添付し [資料 6]、あたたかいお弁当を届ける活動の概要を記す。

調理は朝 4 時から始まり、容器に詰め、あたたかいうちに届け、そのあとはそのまま郊外の青果市場に出向いて翌日の食材を調達し、食材の下準備が終わるころには夕方 6 時を過ぎる。シンガポール東部のカンバンガン Kembangan 地区の倉庫街にある Willing Hearts 本部は午前 4 時にはすでに稼働しボランティアが集まり作業が始まっている。本部と言っても平屋の建物で、マネジメントを担うスタッフは数名で、実態はお弁当の調理に特化した給食センターがふさわしい。作業はおおまかに 2 時間ごとに区切られていて、4 時から 6 時は調理および調理された料理を弁当箱に詰める作業、6 時から 8 時は引き続き調理および弁当箱に詰める作業に加え配達の開始、8 時から 10 時は配達および清掃、翌日の調理の下準備、10 時から 12 時は清掃、翌日の調理の準備、午後は生鮮市場や食肉市場などに出向き食材の調達にあてられる。ボランティアは、事前にネットで登録してあるため特定の時間帯に集中することはない。到着するとすぐに手を洗い、頭髪を覆うキャップをかぶり、どの作業工程に入ってほしいか告げられ、食品を扱う人はゴム手袋をはめ、ほどなく作業に入れるようになっている。

整然と作業が行われる様子は外食産業の厨房を思わせるが、作業しているボランティアの顔ぶれは毎日異なる。その多くが初めての参加だという。お弁当を 5 個ずつ袋に詰める作業を 2 時間、筆者と一緒にいった男性は、普段は銀行員でその日が初めての参加だと言った。つまり毎日、顔ぶれが異なる 200 人がその日限りのチームとして、1 万人のお弁当の調理と配達にあたっている。その作業が毎日とどこおりなく行われ、継続しているのはなぜか。

3-3-4 活動を成立させているもの

経験は不問：来るものは拒まず

Willing Hearts の活動の特徴のひとつは、誰でも参加できるように作業が単純化されていることである。献立も、材料や味付けを記したレシピはなく、お弁当一人分の白飯は何グラムなのか、主食に対して主菜や副菜はどのくらいの量なのかについても決まりはなく、指示する人もいない。つまり細かな指示を出すリーダーは不在であり、参加する人たちは指示に従うのではなく自立したボランティアとしてそれぞれが考えて働くしくみになっている。

常連のボランティアが調理を交代で担当し、料理の味付けをまかされている。数を把握しやすく、運搬もしやすいようにお弁当を5個ずつ袋詰めすることなどは決められている。テイや専任の事務局スタッフが厨房をまわり、料理の出来上がり具合や盛り付けを確認し、時折「こちらに来て野菜を切るのを手伝って」「今日は車で来ましたか。帰る時に寄り道をして100個、お弁当をとどけてくれませんか」などの指示を必要に応じて出すことはあるが、ボランティアは基本的には到着した時に一番手が足りていない作業に入れられ、あとは自分で進んで考え行動することが求められている。

活動を支えているものは創設者テイの熱意、人柄であることは言うまでもない。しかし「あなたがリーダーなのか」との質問にテイは即座に「違います」と否定した上で、「私たちは平等な立場でともに働いています。皆同じです。」(2018年 本人への聞き取り)と答えている。作業の前にテイが心得や注意点を話すこともなく、誰がボランティアとして入ってもすぐに作業に参加することができる仕組みがあることで、日々ボランティアの顔ぶれが違ってても安定的に作業が継続できていることがわかる。

献立は自由：「あるもので何とかする それは人生と同じ」

もうひとつの特徴は、献立自体にも決まりがないことだ。毎日調理されるお弁当は、あらかじめ献立が決まっているのではなく、調達できた食材に左右されるからだ。「何かが足りないと悩んでも仕方がなく、あるもので何とかするしかないのは人生と同じ。」とテイが語る[テイ聞き取り 2018年]通り、あるもので工夫して献立を考え提供していることも、取り組みが無理なく続いている理由の一つである。食材は寄付に頼っているため、当日にならないと献立は決められない。それでも Willing Hearts のお弁当が「無料とは思われないくらい充実している」と言われるのは、20年近い実績がある活動の趣旨に企業、団体、個人が賛同し、集まる食材の質が良いからでもある。

食材はレストランや海産物加工会社などからの寄付とともに、テイと専任の事務局員が毎日、お弁当の調理、配達の後、郊外のパシール・パンジャン Pasir Panjang 青果市場に出向き、規格外で市場に出回らずに残っている野菜や果物を譲り受けている。市場担当者によると、売れ残った野菜ではなく、規格外ではあるが鮮度が落ちていないものを、あらかじめ冷蔵庫に取り置きテイに寄付している。活動を業界として支持して参画しているからとのことだった。

活動に同行した2018年6月に調理されていた献立の一部を写真とともに示した[資料7]。献立はどれも主食(白飯、ビーフンなどの麺類、チャパティ、パンなど)、主菜として牛・豚・鶏などの肉類、魚、ゆで卵など、副菜として野菜などの炒めものの3つが基本的な構成となって

いる。主菜や副菜の種類、組合せは入手できた食材に左右されるため毎日異なる。主菜は、宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒、牛肉を口にしないヒンズー教徒やインド系の人たち、ベジタリアンだが卵は食す人たち、厳格なベジタリアンなど、多様な民族構成の細かなニーズに合うよう複数以上が毎日調理される。イスラム教徒が教義に則り食さない豚肉は、ほかの食材の調理と厨房を分けて、管理・調理されている。

同行した日の献立は、ベジタリアン用には野菜を主体とした主菜や副菜、ヒンズー教徒やインド系の人たちのためには豆の入ったカレーにチャパティ、お年寄りのためには細かく刻んだ野菜やトウモロコシが入ったお粥、非ベジタリアン用には鶏肉をサンバルと言う辛みのあるチリソースで野菜とともに炒めたもの、など受益者たちの民族や宗教、年齢などに細かく配慮し工夫したものになっている。

弁当パックに入りきれないほどの量なのは、複数人数で分け合うことや、昼食と夕食2食分に充てられるようにとのことだった。紹介した献立は、当日調理されていたお弁当の一部に過ぎず、ニーズに合わせた種類の多さにも驚くが、彩りや食べやすさ、栄養価を考え、飽きないように変化のある味付けになっていることに気がつく。定型的な献立がなく、マニュアルもないことから、調理する側もその日にならないと何がお弁当になるのかはわからない。お弁当を受け取る側も、蓋を開けるまで中はどんなお弁当なのかわからない。作り手の工夫がうかがえる献立は、機械で大量に調理されたのではなく、受け取る人のことを思い、一つ一つが人の手で調理されていることをあらわし、お弁当と一緒にボランティアが届けているのは、まさに「手伝いたいと思う心」Willing Heartsであることを伝えている。

3-3-5 有効に活用される 食材・人材・時間

献立からも明らかなように、食材は余すところなくお弁当に生かされる。お弁当の配達の方法にも無駄がない。休憩中のタクシー運転手、車で学校に行く途中の母親と子ども、週末にボランティアとして参加するサラリーマンなども手を貸す。つまり、ひとりが融通できる一日のうちのわずかな時間やガソリンなどの燃料までも、足し合わせることで有効に活用する仕組みとなっている。

ボランティアの集め方にも無駄がない。コロナ下では、映画や博物館の鑑賞をネットであらかじめ予約するしくみが普及した。Willing Hearts ではホームページ上で、スマートフォンからもボランティアする枠を予約できるようになっている。ボランティアしたいという気持ちはあっても、毎日決まった時間に、あるいは週末でも長時間、活動できる人ばかりではない。Willing Hearts では午前中2時間のみ、午後1時間だけなど時間を区切ることで、短時間ボランティアできる人材を多数集めることが実現している。ボランティアしたい時間と人数を登録しておくことで、特定の時間にボランティア集中する、あるいは不足する事態を防ぎ、人材と時間という資源を有効に活用する仕組みとなっている。つまり Willing Hearts とは、複数形で示されているように、進んで行いたいと思う人たちが、それぞれ食材や時間、寄付などを他者のために役立てたいと考え、行動するゆるやかな連帯であるといえる。

3-3-6 あたたかなお弁当を受け取る人たち

調理されたお弁当を受け取る人たちはどのような境遇にあるのか。届ける活動に同行することで、受け取る人たちが置かれているさまざまな境遇を見た。調理されたお弁当には防腐剤は含まれていないため、午前中に迅速に配り終える必要がある。時間の制約から、お弁当の多くは集会用のスペースや団地の広場で必要としている人たちに配られる。ボランティアが先回りして場所を設営しているうちに、人が集まり列を作り、お弁当の到着を待つ。その多くが木綿のシャツやTシャツにズボン、ゴム草履といった軽装のお年寄りである。お弁当よりも、トニー・テイやボランティアと会うことを楽しみにしていると話す人もいた。

配られるお弁当は一つずつビニール袋に入れられ、運搬しやすく、数を数えやすいようにさらに五つずつまとめられる。牛肉・魚・豚肉などが含まれる「ノン・ベジタリアン」、「ベジタリアン」、豚肉が含まれない「イスラム教徒用」、「高齢者用のおかゆ」、などのシールが貼られている。ボランティアたちは、受け取り手が希望しないお弁当を渡してしまうことがないように「これはベジタリアンのお弁当ですよ」「おかゆです、温めて食べて下さいね」などと口頭で確認しながら、同時に体調はどうか、困っていることはないか、ひとり一人と言葉を交わしながら、お弁当を手渡していく。

一方で、人前で食料の支給を受けることに抵抗がある人もある。その場合はボランティアが住まいまでお弁当を届ける。ピンポイントで届けることができるのは、広場まで降りてこれないお年寄りは何階の何号室に住んでいる、その近くにも体調を崩し最近では外出できなくなった男性がいる、などボランティアたちが情報を詳細に把握しているからだ。

たとえばテイとボランティアに同行して訪ねたトアパヨ Toa Payoh 地区では、団地の 1LDK に 78 歳の父親と 52 歳の息子の中国系の親子が暮らしていた。玄関を開けるとすぐに台所兼食堂があり、台所のシンクの縁にはインスタントコーヒー、砂糖、醤油、油などの調味料などが並べて置いてあった。隣の居間兼寝室にはむき出しのマットレス一枚が壁に立てかけられており、夜になるとそれを床に敷いて親子で休むのだと言う。息子は統合失調症を患っており、父親が介護していた。ボランティアとの対応は主に父親が行った。政府から受けている、合わせて 2 万円ほどの助成金は、息子の医療費と光熱費で消えてしまうと父親は話した。Willing Hearts からは二人分のお弁当だけでなく、時にはビスケットや粉乳なども届けられると言う。

父親によると、成人した息子二人と一緒に 3 人で 4LDK の自宅に生活していたが、もう一人の息子が結婚し所帯を持った時に、統合失調症を患う息子連れて家を出て、離れて住むことにしたと言う。息子が夜中に突然、大きな声で叫び出すことがあり、近所に迷惑をかけることをほかの家族が気に病むようになったからだと話した。テイは、年老いた父親に対して「困ったことがあったら、お弁当を届けに来る時に相談して下さいね」と語りかけ、息子と二人きりで家に閉じこもらないように話し、たとえば、軽度の障がいを持つ成人を受け入れ、簡単な技能研修も行っているデイケアセンターに息子を通わせるのはどうか、往復の交通手段に困るようだったらお弁当を配達に来た車に乗ってもらうこともできる、と提案していた。つまり活動はお弁当を作り、届けることにとどまらない。お弁当を届け受益者たちに対面する機会は、彼らがどのような生活環境にあるのか把握する機会でもあり、困りごとはないか耳を傾けることは、団地の片隅でひっそりと暮らす人たちにとって社会との繋がりを実感する時間でもあった。

さらにそうした会話の中でニーズが浮き彫りになり、それに見合った公共サービスへの橋渡しをすることは、セーフティネットの隙間からこぼれ落ちそうな市民を掬い上げることにもつながっている。

シンガポールでは修道院やヒンズー教寺院、NGO などでも簡単な食事を無料で提供しているところがある。そうした取り組みとテイが主宰する Willing Hearts が大きく異なるのは、炊き出しで調理された食事がある場所に、必要とする人たちがやってくるのではなく、ボランティアたちが食事を必要とする人たちの方へ出向き、届けている点だ。そうすることで、移動手段がない人たち、あるいは移動にかかる交通費を切り詰めて生活している人たちにも必要とされる食事が届く仕組みとなっている。

活動に同行すると、テイの活動は、お弁当の調理は実は始まりに過ぎず、調理されたお弁当を確実に手渡し、さらに話を聞き、様子を確認し、時には体調管理のアドバイスをし、行政サービスへ橋渡しすることも同様に重要な活動であることがわかる。あたたかなお弁当が届けられる先には、高級ブティックが並ぶ繁華街やビジネスマンが行きかう金融街からはうかがうことができない、シンガポールのもうひとつの現実があった。

3-4 活動が浮き彫りにしたもの

3-4-1 豊かな国の隠れた貧困

マグサイサイ賞財団は、人口 600 万に満たない世界有数の豊かな国シンガポールにも 10% の貧困層があり、それは統計的には微細な「数字」として見過ごされ、そこに実際に助けを必要とする「人」が存在するということを忘れがちであると指摘している¹²⁾。

だからこそ、繁栄を手にした都市の片隅で、一日も休むことなく毎日 1 万食のお弁当を作り続け、高齢者や障がい者、低所得者層を対象に、温かい食事を提供する活動を続けているトニー・テイの活動は、注目を集めることとなった。そしてその活動がマグサイサイ賞受賞を契機に広く注目された結果、シンガポールにも貧困はあり、それは大きな社会課題であるという都市国家の影の一面が国内外で知られる結果ともなった。

テイのあたたかなお弁当を届ける活動にニーズがあるのは、社会保障制度は整備されていても、そのセーフティネットからこぼれ落ちるリスクのある市民が存在するからにほかならない。そうした現実を、シンガポール政府はどう総括しているのか。

前述の報告書 Occasional Paper: Improving the Lives of Low-income and Vulnerable Families in Singapore（シンガポールにおける低所得者層および脆弱層の生活の改善に向けて）は、「シンガポールの初期の国家建設では、国として生き残ることが至上命題となり、自助や自己責任が強調され、脆弱層を地域がサポートする地域互助に欠け、1990 年代、2000 年代で一気に進んだグローバル化やデジタル化で一層の格差をもたらした」ことを認めている。そしてゴー・チョクトン前首相が「恵まれた者は成功を収めることができる。社会は彼らが獲得した富をより恵まれない者を支援することに役立てることができる」[建国記念日の演説 2001/8/19] と述べた演説を引用していることにも注目したい。約束されたはずの富の分配が必ずしも実現していない現実をはからずも端的にあらわし、しかし政府が富を分配するのではないばかりか、経済的に成功し富を獲得した者が、経済成長を享受できない階層に対して手を差し伸べるべきだと

呼びかけているからである。

政府は低所得者層、長期的な支援を必要とする独居老人、障がい者に対して、団体、企業などの組織、個人などあらゆる人が手を差し伸べる“Many Helping Hands”アプローチを策定し、政府や地域の課題解決のために働く NGO、企業や個人からの寄付など、市民が重層的に手を差し伸べる支援のあり方を提唱している。組織、地域、個人が手を差し伸べ、助け合うことで、思いやりの精神が醸成され、社会のきずなが強まり、社会の階層間の不信や分断の解消にもつながるとも付記している。しかし格差を縮めるための具体的な方策についての検討はなく、所得の格差による階層が固定化することを前提にした仕組みを提唱している感是否めない。

3-4-2 社会保障制度の移り変わり直面する課題

報告書が「シンガポール経済は成熟し進化したが、成長のスピードが鈍化する中で進行する高齢化は、社会保障制度を圧迫し、社会にとって深刻な課題をつきつけている」と結語で述べていることは、今後の経済成長や、それによってもたらされる社会の安定はもはや所与ではなく、将来的にも保証されないことを政府が認識していることを物語っている。背景には、2030年には65歳以上の高齢者の割合が全人口の22.5%になることが予想される〔資料2〕一方で、20代や15歳以下の若年人口は停滞か減少の一途をたどり、少子高齢化に伴い社会保障費の増大が課題となっていることがあげられる。¹³⁾

シンガポールの社会保障制度は、中央積立基金（Central Provident Fund：以下 CPF）と呼ばれる独自の貯蓄制度と、政府による中・低所得者への補助措置を軸とした自助が基本理念となってきた。CPFは建国前の1955年に発足した。すべての国民と永住権取得者を対象とするいわば強制的な貯蓄制度で、年金を受給するときに必要となる財源を、現役時代に給与から積み立てておき、政府が決めた拠出率に従って拠出され、加入者の CPF 口座に貯まっていく制度である。基本的には定年後の生活を保障する制度だが、必要に応じて住宅や医療などのローンの支払いもできることから、国民にとっての総合的な社会保障を提供する制度となっている。しかし拠出され溜まっていく額は、それぞれの所得によって左右されるため、現役時代の所得格差は、そのまま老後の備えの格差ともなっている。

そうした中、政府が報告書で、これまでの政策だけでは不十分だったとし、地域や企業、個人に、「思いやり」や「きずな」を説き、自発的に手を差し伸べることを推奨しても、自助や地域互助のみでは根本的な解決策はもたらさない。政府によるボランティアの奨励は、国家システムへのボランティア活動の動員とも言え、地域に根差した自発的内発的な取り組みとはいえない。

ここで、再度、シンガポールの職業別の総月給の推移に〔資料1〕注目する。管理・行政職の月給は2020年から2020年の10年で、5,876シンガポールドルから10,000シンガポールドルへとほぼ倍増している。同様に専門職の月給も4,964シンガポールドルから6,859シンガポールドルへとおよそ1.3倍に増加している。その一方で、工場労働者、清掃従事者など低所得者の月給は頭打ち、あるいは微増にとどまり、経済成長の果実を享受する人とならない人に二分化が進んでいるのがシンガポールの現実でもある。報告書は結語として、国民にこう訴えかけている。「シンガポール政府はすべてのシンガポール国民に呼びかけます、個人も団体も組織も、誰もが誇

ることができるシンガポールという国家の建設への参加することを。誰も取り残されることのない、すべての人の尊厳が守られる社会を作りましょう。そうした社会を作ることは、単に“良いこと”をするためではなく、国として成し遂げなければならない目標なのです。シンガポールのあるべき未来は、低所得者層や脆弱層の生活を改善することなしには達成されないのです。」[Ministry of Social and Family Development, Singapore 2018]

政府には、こうした人たちの生活、処遇を改善することなしにシンガポールの未来は建設されないという危機意識はありながらも、格差はこの十年で解消されないばかりか拡大する傾向にあり、解をもたらしることができないでいる。格差を是正する方策のひとつを、自助の延長にある助け合いに見出し、公的にそれを呼びかけなければならないほどに、建国から50年が経過したシンガポールは、これまでの成功をもたらし続けてきた発展の方程式がもはや通用しない時代を迎えていることを示唆している。

3-4-3 見えない貧困

そのシンガポールに生まれ育ち、発展を目の当たりにしてきたティは、シンガポールでは貧困は隠されている、と語った。それはなぜか。そこにはシンガポールの発展の歴史と、東京23区の6割ほどの人口およそ600万が生活するシンガポールの住宅事情がある。

密集した住宅地で、高層アパートの窓から竹竿が突き出され、満艦飾の洗濯物が風にたなびく光景は風物詩にもなっている。立ち並ぶ団地は住宅開発庁（HDB: Housing and Development Board）が供給する団地で、団地そのものが一般的に「HDB」と言われている。これも建国の父、リー・クアンユー初代首相の立案によるものだ。

リー・クアンユー初代首相は、「植民地支配から脱却し、政党がシンガポールを統治する限り、選挙の度に信を問われ、富の分配が行われていなければ支持を得ることはできず、政治的な安定を得ることはできない。国民の能力強化につながる教育の普及に加え、医療への平等なアクセス、住宅の供給は喫緊の課題であり、中でも住宅を供給し、国民がマイホーム所有者になることは最優先事項と考えた」と述べている [Lee 2000]。国への帰属意識は帰るべき家を所有することから始まると考えたからだ。そこで打ち出したのが、1960年に創設され、低所得の労働者向けの住宅建設を担っていた住宅開発庁に導入したマイホームを持つことを促進する新たな制度であり、政府による国民の強制積立制度である中央積立金（CPF）から住宅購入資金を調達する制度を創出し、HDB住宅の購入を促進した政策だ。その結果、2019年時点で永住権者含む国民の79%はHDB住宅に住み、その9割以上が持ち家となっている。[ジェトロ 2021]

3-4-4 住宅事情と格差

HDB住宅の供給は、政府が国民に生活の安定を保障するために創設したという意味で、経済成長を国是とした政府が、その成長の成果を国民に配当するという政治的な制度であるとも言える。そして多くの国民にマイホームを提供したという意味では、リー・クアンユー初代首相の構想は成果を出している。

購入資格・要件はシンガポール国民であること、ほかに住宅を所有していないこと、21歳以上であること、少子化対策として、核家族を構成していること（つまり独身者ではないこと。

1991年の改正で、35歳以上の独身者も中古物件など条件付きで購入できることになった。) など詳細にわたる。新築のHDB物件の場合、購入できる間取りは月額収入によって決まり、たとえば2ルーム(日本の1LDK)は7,000シンガポールドル(57万円)、3ルームは14,000シンガポールドル(114万円)など所得の上限設定が設けられている。

住宅所得を促進するための優遇措置として、婚姻関係にある夫婦と子どもの家族が購入する場合には、収入に応じて30,000Sドル(約250万円)から80,000Sドル(約660万円)の補助、また、少子化対策として子育て世代の世帯が、両親の住まいから4キロ圏内のHDB住宅を購入する場合に限り、30,000Sドル(約250万円)の補助を受けられる制度¹⁴⁾もあり、高齢者の孤立を防ぎ、子育て世代への社会保障費を圧縮する狙いもある。

一方、2020年5月には賃貸のHDB住宅の全体の一割にあたる世帯が家賃を払えず滞納しており、そのうち75%の低所得者層の世帯は、3000Sドル(約25万円)の家賃を払えない事態に直面していることを国家開発省が明らかにした¹⁵⁾。HDBでは家賃を定額に抑えた代替の物件の紹介などの対策を講じているが、家賃設定の再検討も必要であることも指摘されている。

また暴力や不和などを理由に家庭内にとどまれない場合、新たにHDB住宅を購入するには、すでにHDB住宅を所有していないことが条件となるため難しく、住む場所を失いホームレスとなる遠因ともなっている。新たに安価な賃貸のHDB住宅を探す際にも、Joint Singles Scheme(JSS)により、独身者はお互いに助け合って生活することを前提に、親戚、友人など同居人を探して契約しなければならないいきまりもあり、適当な同居人が見つからない場合はHDBから同居人の斡旋を受ける制度まである。そのため高齢者や低所得者が、一旦はHDB住宅に落ち着いても、知らない者同士の人間関係や、プライバシーが制限されることなどを理由にどちらかが退去を余儀なくされるケースもあり、同様にホームレスを生み出す遠因になることが指摘されている¹⁶⁾。シンガポールでは、特定の地域の個別のHDB団地が居住者の経済状況、民族背景など属性を表しているとは限らない。エスニック統合政策(Ethnic Integration Policy 以下EIP)によって民族別の割り当ても決められているからだ。居住者のエスニシティや経済状況が多様であるだけでなく、その割合も管理されていると言う意味で、HDB団地そのものもシンガポールの一つの縮図ともいえる。

高層のHDB団地を外から眺めただけでは、それぞれの住まいの中でどのような人たちが、どのような困難を抱え、どのような暮らしをしているのか、想像は及ばない。マグサイサイ賞財団が指摘するように、高齢者、低所得者は「数字」としてしか認識されてない。テイの活動は、社会保障が十分に届いていない人たちの住まいの扉をたたき、お弁当を手渡し、居住者に会い話を聞き、支援の手を差し伸べることで、セーフティネットを補完しているだけでなく、「数字」として認識されている人たちにもこれまでの人生の軌跡があり、これからの暮らしがあり、それはより良い暮らしでなければならないという強い異議の申し立てとなっている。

4. マグサイサイ賞受賞者が体現する「価値」

4-1 トニー・テイが語る「価値」

テイ自身は、何を課題としてとらえ、何を「価値」として考え、20年近くに渡り活動が続けてきたのか。2003年に11人のボランティアで300のお弁当を作り届けることで始まった活動が、

およそ 20 年の間にどのようにして多くの市民の参加を得て 1 万食のお弁当を届けるまでに成長したのか、市民はこの活動の何に共鳴したのか。テイへの聞き取りを通して考えて行く。

テイは、「十分な食、あたたかい食事にありつけることが、人として満たさなければならない基本的な権利である」と最初に語り、しかし「シンガポールでは貧困は隠されており、それが実現していない」と語った¹⁷⁾。さまざまな支援の方法がある中で、テイが「食」の支援をしているのは、テイが端的に語るように「食べること」が最も根源的なニーズであるからだけでなく、テイ自身が、幼少の頃に今日の食事にもありつけないほど困窮した生活を送っていたことも背景にある。

テイが「シンガポールでは、貧困が隠されていることが課題」と語った背景には、前述したように国民の 70% が住んでいるという HDB 団地がある。テイによると、高層の HDB 団地はたくさんの世帯を収容できるため、住む場所のない人たちがホームレスとして街にあふれるという事態にはならないが、「頭の上に屋根があるだけの状態」、つまり住むところはあるが、食べるものが十分でない状態である例が数多く見られるという。貧困が視覚化されないため、食べることに困る人たちをこちらから探し当てる必要があり、お弁当を配達するという支援の形になって行ったのだという。「人は住む場所だけあっても、食べるものがなくては生きて行かない」とテイは語る。そして「食べるものは、あたたかなくてはならない」と言う。人が調理して届け、人のぬくもりが感じられるものでなくてはならないと言う意味だ。ここにテイの「あたたかなお弁当革命」の原点がある。

4-2 ひと口サイズの善意と共有される『価値』

こうして食材を分かち合い、それぞれが持てる時間を提供し、配達や調理など無理のない範囲で手伝えることを、テイは「一口サイズの善意」と表現した。つまり「一口サイズの善意」として集まった食材や時間によって、1 万人分のお弁当の調理と配達が成立している。テイが受賞したマグサイサイ賞の受賞理由にもまさに「小さな善意を、多くの人との協働で、社会に広く届く、生き生きとしたボランティア活動に高めた」¹⁸⁾と記されている所以である。ではシンガポールの人たちは、テイの活動の何に共鳴したのか。市民が参画し、毎日 1 万食のお弁当を届けるまでに育ったこの活動には、どのような「価値」が共有されているのか。そのヒントは参加するボランティアの聞き取りとテイの発言にある。

テイによると、団体名として当初、Willing Hearts ではなく、Willing Hands（自ら行う手）も候補にあったのだと言う。手を動かさないと成立しない活動だからだ。しかし「手も要るがまずは心だ。自ら行おうとする心がなければ手も動かない。」と思い至り、Willing Hearts に決まったのだという。多くのボランティアによって食事が調理され、配膳され、お弁当として配達される様子は壮観で、これが利潤を目的とするお弁当産業ではなく、ボランティア活動であることを一瞬、忘れるほどである。食材の調達、調理、配膳、箱詰め、シール貼り、配達、そのすべてがボランティアでまかなわれている「あたたかなお弁当を届ける」活動は、その作業どれひとつが欠けても成立しない。お弁当産業との違いは、担い手は皆、テイの活動の趣旨に賛同し、心を動かされて手を動かし参画しているという点である。

母親に連れられてきた 4 歳の男の子は、お弁当の種類がわかるよう「ベジタリアン」「ノン・

ベジタリアン」などのシールを貼る仕事をした。86歳のお年寄りも、お弁当にそれぞれ副菜が詰められているか確認する作業を受け持った。男児の母親は「子どもには、社会には恵まれた人たちばかりではないが、助け合うことはできることを知ってほしいと思い参加した」と語った。調理された副菜の大なべを配膳台に運ぶ作業をまかされていた30代の金融コンサルタントの男性は、「自分の仕事は富裕層を相手に成立している。しかし社会は富裕層のためにだけあるのではない。たいていの慈善事業は寄付を要求してくるが Willing Hearts は自分が参加できる作業を与えられるので参加した。」と話した。

ひとり一人のひと口サイズの善意は、こうして日々積み上げられ、活動を育てていた。テイは「進んで行おうとする心と心が組み合わさった時に、物事は動き出す」と語る。テイの団体名 Willing Hearts（自ら進んで行いたいと思う心）が、Hearts と複数形で表現されているのは、よりよい社会をつくる原点は、政策、インフラだけではなく、人の心の中にあり、その心が人と人とのつながりをもたらし、行動につながり、社会を変えて行くことに気づかされる。その意味で、マグサイサイ賞財団が表現したように、テイの活動はまさに「あたたかなお弁当革命」なのである。

4-3 活動がもたらした社会改革

4-3-1 ネット空間での反響

テイの活動は結果的にシンガポールの貧困層、ホームレスの存在を顕在化させ、課題を「見える化」した。発足からすでに20年が経つ活動にはノウハウが蓄積され、今では週末には数百人のボランティアを動員する規模の支援団体になっている。背景には、中間層と呼ばれる高学歴、高収入の国民が高い比重を占める社会で、社会福祉や奉仕活動などへの関心も高まり、貧困や脆弱な立場にある人たちの救済に熱心に取り組み始めていることがある¹⁹⁾。活動が始まった20年前におそらくテイ自身も想定していなかったことは、その活動がSNSを通して内外に広く拡散され、行政に対して対策を促す静かな社会的な圧力ともなっていたことである。

筆者が取材・調査してきたこの活動は、2018年年末に日本国内で放送され²⁰⁾、翌2019年1月には、“Singapore’s Other side”（もうひとつのシンガポール）というタイトルで15分の企画に再編集され海外向けに放送され、ネットでも配信された²¹⁾。するとほどなく、無料交流サイト Facebook や WhatsApp などの無料チャット通信などSNS上でシンガポール国内にも広く拡散され反響が広がった。シンガポール最大の民間のインターネットニュース配信会社 Mothership²²⁾ もサイトで特集した²³⁾。

Mothership の月平均のページビュー数は3000万と推計されている。特集記事は、「シンガポールの都市が抱える問題を明らかにしたすぐれた番組だった」「シンガポールに生まれながら、こうした活動があることを知らなかった」「経済成長を続ける都市の片隅で、脆弱な立場にある市民を支援する活動を続けるトニー・テイはシンガポールの誇りである」「トニー氏がお弁当を配りに来た団地に自分は住んでいる。素晴らしい活動だ」「無私で活動を続けるトニーを国会議員に」「トニー氏に一票！」といった読者のコメントとともに、SNS上で急速に拡散されていた。

こうしたコメントからは、テイのマグサイサイ賞受賞が海外メディアに取り上げられ、報じ

られたことで初めて活動について知った、あるいは Mothership の発信などネット上の拡散を通して初めて知った市民もあることがうかがえる。そもそもそれまで国内では、テイの受賞が海外で注目されるほどには報じられていなかったことも反響を大きくした。シンガポール最大の英字紙ザ・ストレイツ・タイムズ The Straits Times は、前年7月、テイの受賞を国内で初めて報じてはいるが、ロイター通信の短報²⁴⁾の転載にとどまり、活動の詳細については報じられていない。テイによると、受賞発表後、自身が受けた取材はザ・ストレイツ・タイムズからの電話取材のみで、写真は過去の資料写真が使われ記者が取材に訪ねてくることはなかったという。

反響はテイの活動への賞賛の声にとどまらず、あたたかなお弁当を届けなければならない背景、つまりシンガポールにあるホームレスや貧困の問題にも投稿者たちの注目は集まっていた。「シンガポールには貧困は存在しない」「シンガポールに貧困はあるが隠しているわけではない」「そもそも政府の貧困対策は十分ではないのではないか」など、多様な意見が飛び交い、活動についての投稿が viral（感染が広がるように急速に拡散すること）となり、ネット空間が新たな議論の場となり、そうした現象自体も SNS 上でさらに話題を呼ぶこととなった。テイの活動は政治利用されているのではないかという憶測も呼んだ。当時、シンガポールでは 2019 年中に総選挙が実施されるのではないかという推測があり、実質的な選挙キャンペーンが始まっていたからだ²⁵⁾。

4-3-2 統制としてのメディア規制

テイの活動が SNS で広く拡散されるにつれ、それを警戒する投稿記事もザ・ストレイツ・タイムズに掲載された²⁶⁾。シンガポールが国として貧困やホームレスの問題にどう向き合うのかは、多民族の共存や助け合いをうたった国家の「価値」にも関わる問題であり、政治的にも社会的にもデリケートな問題であり、国内メディア、外国メディア、SNS を問わず、どう発信されていくのかについても注目されていることがうかがえた。

シンガポールのメディア研究者ジョージ・チェリアン George Cherian は、シンガポールでネット空間が言論空間として影響力を増していくことは、統制が効き予測が可能な国営メディアの扱いに慣れていた政府にとっては、もはや世論や政府の評価を、政府自身が方向づけることは不可能であるという意味で新たな試練である、と指摘している [Cherian 2019]。リー・クアンユーも 2000 年に出版された自叙伝の中で、こう警告している。「諸外国による直接的な干渉よりも、メディアや人的な接触を通して間接的にシンガポールの内政に干渉し、シンガポール国民の行動、思想、価値観に影響を与える動きにどう立ち向かうべきか。国家は、そうした社会の結束を損ないかねない害に対しては、シンガポール国民が守るべき価値を繰り返し説くことで対抗するしかない。しかし、情報技術の発展に伴いそれは一層困難になるだろう。」 [Lee 2000]

今や情報は瞬時に拡散されていく。リー・クアンユー自身、「将来 IT をブロックしようとする国家は生き残れないだろう」とも述べ、シンガポールはその国益や「価値」をどう守っていくのが課題になるだろうと予言している²⁷⁾。実際にその後、シンガポールでは、2019 年 5 月、インターネット上のプラットフォームやチャットグループを監視できるようにする「フェイクニュース対策法」が可決され、同年 10 月に施行された。この法律の下では、SNS 上のコンテンツについてシンガポール政府が事実ではないと認定した場合、掲載したメディアは政府の要請

に応じて訂正記事を掲載し、当該コンテンツを削除する義務が生じるとしている。政府は、市民をフェイクニュース、虚偽の情報から守るための法律だと説明しているが、人権団体は、言論の自由を恣意的に制限するものだとして批判している。情報技術の発展とともに、当局は何をどこまで統制できるのか、またそれは受け入れられることなのか、リー・クアンユー初代首相が予言した通り、政府にとって、経済運営のみならずネット空間でもこれまでの方程式が通用しない時代が到来したと言える。

5. 浮かび上がるシンガポールの課題

テイの活動は、多くの市民が参加する運動になり、それが内外で報道されたことで、貧困やホームレスの問題が可視化され、活動の広がりとともに、問題が存在することを内外に知らしめることとなった。そしてテイのマグサイサイ賞受賞やその報道を契機に、シンガポール社会では新たな動きが見られた。一つは、国連が定める貧困ラインを採用していないという理由で、公式な統計すら発表されてこなかったシンガポールの貧困の問題と、テイのお弁当の受益者にもなっているホームレスについて、シンガポール初となる全国調査が行われたこと。二つ目は、ホームレスや低所得者層を支援するために、9つの NGO や慈善団体がコンソーシアムを組み、より連携のとれた支援活動を行うことを発表したことである²⁸⁾。

5-1 実態調査が明らかにしたもの

5-1-1 「ホームレスは存在する」

2019 年 11 月、シンガポール国立大学リー・クアンユー公共政策大学院は、シンガポールのホームレス実態調査報告書を発表した²⁹⁾。社会家族開発省の支援を受けて行われた初の調査がシンガポール研究者や国民に一定の衝撃を持って受け止められたのは、報告書が「シンガポールにホームレスは存在する」という一文から始まっていたからである。

ホームレスの存在を具体的な場所と数字で詳細に明らかにしたこと、それを報告書の出版、ネットでの発信、調査団の記者会見などで公に発表したこと、調査に基づいて政府に対して政策提言を行ったことのすべてが注目を集めた。さらに建国の父リー・クアンユーが描いた青写真通りに、政府が促進した持ち家制度の下、HDB 団地の建設を進め、低所得者層も入居できるようインセンティブや助成制度を設けたが、制度は必ずしも十分に機能してこなかったことも指摘し、制度自体の見直しと改善が急務であることも提言している。

調査は、21 歳以上のボランティア 480 人、NGO の代表 20 人、一般市民あわせて 500 人あまりを動員して 2020 年 4 月から 7 月の 3 か月にわたって行われた。夜 11 時半以降、団地 12,000 棟、商業施設、公共施設の周辺や港、公園、バス停、階段、駅など屋外で寝泊まりしている人がいないかどうか調査し、その数を記録し、88 人にインタビューをおこなった。シンガポール全土を 25 の地域に分け、さらに細かく 298 区画にゾーニングし、数人ずつのグループで区画を徒歩で巡回し調査にあたった。

調査では、ホームレスの人数は推計で 921 人から 1,050 人、80% が男性、平均年齢は 54 歳、半数が 1 年から 5 年に渡ってホームレス生活を続け、6 年以上にわたって屋外で寝泊まりを続けている人は全体の 3 分の 1 に上ること、インタビューに応じた 4 人に一人が当日、一日一食、

あるいは何も食べていなかったこと、35%が初等教育以下の学歴であることなどが明らかになった。報告書は、ホームレス生活が長期にわたっていることに注目し、背景にあるのは一時的な景気の低迷ではなく、雇用が不安定なために貧困に陥るという構造的な問題や、貧困のため交通費が捻出できず、工場など職場で寝泊まりすることでホームレスになり、そうした悪循環から抜け出せない現実があることを指摘している。さらに、インタビューした人の40%は、住宅を所有しているが、離婚や家族との不和などの理由でホームレスとなっていることも明らかになった。

報告書は、現行のHDB住宅が広く提供されるとされた制度には限界があることを指摘した上で、これまで貧困やホームレスは問題として認識されてこなかったが、救済のためには、ホームレスの人たちを保護するシェルターなど設備の整備に加え、NGOや慈善団体が介入し、脆弱な人たちを支援団体や行政が提供するサービスにつなぐことが欠かせないことを提言し、経済状態や社会構造が変わらない限り、ホームレス問題は、今後若年層の問題にもなりうることを警告している。

シンガポール全土を網羅した調査の結果をプロットした地図〔資料8〕を見ると、ホームレスが記録された地区は中心部や南東部で、HDB団地やマンションが多く立ち並びベッドタウンともなっているベドック Bedok 地区をはじめ、濃淡はありながら全土に広がっていることがわかる。この地図と、テイがお弁当を配る地域を示した地図〔資料5〕を比較すると、調査が行われた25地区でホームレスが多く確認された上位15地区のうち10地区が重なり、テイの活動がニーズのある地域を正確に把握していることがわかる。

5-2 沈黙を破る市民たち

初のホームレス実態調査が行われたことは、これまで社会に対して異議を申し立てを行うより、富の配分を享受し現状維持を志向してきた市民が、必ずしも沈黙を続けるわけではないことを示唆している。2020年12月に、ホームレス問題に対応するために9つの慈善団体やNGOが連携を強化し、ホームレスの人たちへの食糧や衛生用品を届けるために立ち上げたコンソーシアムは、沈黙を破ることを選択した市民たちのコンソーシアムともいえる。きっかけはコロナウィルスの感染拡大で経済活動が停滞し、失業や収入が減少する事態を招き家賃が払えなくなった結果、ホームレスの増加が見られたことにある。2020年12月には21の仮設シェルターのすべてが定員を超え、収容しきれないほどの事態になった³⁰⁾。

テイは、「食においては誰もが平等であるべきだ」と語った。「あたたかな食事は人間としての最低限の権利である」という一人の思いが共有され、その活動は、涓滴岩を穿つごとく、多くの市民が連帯する行動として結実し、社会の変容を促している一例と言える。

おわりに 「あたたかなお弁当革命」に見る公共圏の創出と内発的発展論の検証

アジアにおける内発的発展についての先行研究〔西川 2000〕では、事例としてスリランカ、タイなどで宗教に根差した規範や、労働組合などの組織の規律に支えられた社会運動が上げられている。それに対してテイの活動は、自身はカトリック教徒であるが、活動の中心にある「日々の糧への感謝」「隣人への奉仕」を行う中で、規範としての宗教は強調されない。また活動にお

いても、ボランティアとして守るべきことなどの「きまりごと」をあえて設けていないことは、異なる民族、宗教からなるシンガポールで、誰も排除されず、誰もが参加できる活動を 20 年近くに渡り継続させることにつながった。

その活動は、富を蓄積しアジア有数の先進国としての地位を確立しながら、その富の分配が公正、公平に行われない体制や制度に対し、行動による異議申し立てである。そして初めて参加したボランティアも、子どももお年寄りも、外国人も、手伝う気持ちさえあれば誰も排除されない平等な仕組みには、ハーバーマスが論じたような討議する力を付与されたいいわゆるブルジョワジーを想定した公共圏の制約を乗り越え、進んで手伝いたいと思う心を持った人たちによる、より egalitarian（平等）な公共圏の創出を見ることができる。

公共圏の創出には、ハーバーマス自身はメディアの役割や公論、市民による討議が伴うことも論じている。そもそもボランティア活動は、奉仕や支援などの活動とともに、社会正義や政治的価値についての討論やアドボカシーなどの言論活動抜きでは、考えられないという考察もある [入江 2000]。しかしネット法が成立するなど言論による異議申し立てに対して当局による統制が明らかな環境では、先鋭的な言論活動を伴うボランティア活動は現実的ではないばかりか、受益者に支援を届けるといった目的の達成そのものを阻害するリスクもある。リスクがあるにもかかわらず、テイの取り組みについてのネット上の書き込みが拡散し、もともとアドボカシーは意図されていなかったにも関わらず、活動が議論を喚起し、市民が主体的に発言・発信し始めた。そこには、豊かな国とは何か、身近にある貧困層、困窮者に手を差し伸べてこそ豊かな国ではないのか、問題意識を共有する人たちによる公共圏の出現が見てとれる。

Willing Hearts の活動自体は、リー・クアンユー初代首相によって掲げられた「個人よりもコミュニティのために」「共助とお互いへの思いやり」「人種と宗教の調和」などの国民が守るべき「価値」を行動に移し実現させているという意味で、本来、国家の視点からは模範的な活動とも言える。しかし同時に、活動が活発になるほど、思いやりや調和を「価値」とするはずの社会は、貧困や格差、差別などの課題も抱えていることを明らかにしてしまうことも意味し、活動そのものは体制批判などのアドボカシーからは距離を置き、行動を通して連帯するというバランスの中で規模化して行ってきたことがわかる。

実際にテイの聞き取りの記録や、テイのツイッターや Facebook など SNS 上をたどっても、セーフティネットでは救われない貧困層や高齢者があること、お弁当を受け取る受益者たちが置かれた生活環境についての記述や、政府の政策を批判するような発言は見当たらない。その理由をテイは「貧しい人たちには、自分の窮状を説明している余裕などないからだ」³¹⁾と語った。テイにとって、貧困の削減とは、アドボカシーや他者への呼びかけを通じた迂遠な働きかけではなく、手助けする意志を持った個人が今ここで、寄付、時間など持てる資源を少しずつ持ち寄り、積み上げることでより早く、より広く、より長く、よりたくさんの人を支援するために行動する以上に有効な方策はないという確信に裏打ちされている。

鶴見は内発的發展を「地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域住民の協力によって、発展の方向と道筋をつくりだしていくという創造的な事業」[鶴見 1996]と規定した。テイと地域のボランティアによるあたたかなお弁当を届ける活動は、ボランティアを募るツールとしての SNS の活用で規模化し、多くの人を触発し、連帯させた。ネット空間

でも公共圏が創出され、それが圧力となり結果的に社会変容を促した。開発途上にある後進国を事例としてきたこれまでの「内発的發展」の系譜とは異なる新たな運動のあり方をも提示している。

そしてテイの活動は、社会に変容を促すと同時に、変容のベクトルは活動の担い手である個の内面にも向けられている。テイは、ボランティア活動に参加する小学生の子どもたちを前にこう語りかけたことがある。

「これから行くところでなぜ私たちが貧しい人たちを支えるのか、わかるかな？」

実は彼らが私たちの貧しい心が豊かな心になるように助けてくれるんだよ。これから行く場所では私たちが誰かを助けるけれど、彼らも私たちの魂を導いてくれている。彼らが私たちに人生とは何かを教えてくれていることを覚えていようね。」³²⁾

「あたたかなお弁当革命」は、テイ自身の幼少時代の「今日もパンが食べられますように」という祈りから始まっている。日々の糧を十分に得られなければ心も満たされないことを、身を持って感じたテイの視線は、幼かった日の自分と同じように満たされないでいる身近な人たちへと向けられ、そこから 365 日 1 万食のあたたかいお弁当を提供するという活動へと発展した。

新たな活動の担い手となるボランティアとして出かけようとする子どもたちに語りかけたテイの平易な言葉は、社会の変革は、個を起点に極めて身近なところから始まり、心を動かされ、手を動かし行動に移すところから始まることを伝えている。活動は運動として多くの賛同者を得て規模化した。その過程で個の行動変容も促し、極めて内的な自らの心の変革につながっていることをもあらわしている。そしてその心の中に起きた変革こそが、さらなる行動への原動力となり、次の日も、さらに多くの人へと届く運動へと持続させている。その意味で「あたたかなお弁当」は、受け取る人たちにとって、心が満たされる日ごとの糧であるだけでなく、運動に関わる人たちにとっても、自らを衝き動かす日ごとの心の糧となっている。

参考文献

〈日本語文献〉

入江幸男 2000 「ボランティアと公共性」『ボランティア学研究』1:37-56.

岩崎育夫 2017 『物語 シンガポールの歴史』中公新書.

カスタンニェダ, ハイメ, 井上英治編 1981 『人間学』理想社.

キャルホーン, クレイグ 2000 『ハーバマスと公共圏』山本啓, 新田滋訳, 未来社.

斎藤純一 2021 『公共性』岩波書店.

清水一史, 田村慶子, 横山豪志編著 2018 『東南アジア現代政治入門 [改訂版]』ミネルヴァ書房.

シェーラー, マックス, 飯島宗享, 小倉志祥編著 1980 『シェーラー著作集 3 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』白水社.

田村慶子 2002 「シンガポールのミドルクラス創出と政治意識」『アジア中間層の生成と特質』JETRO アジア経済研究所 105-132.

鶴見和子 1996 『内発的發展論の展開』筑摩書房.

鶴見和子 1999 『コレクション 鶴見和子 曼荼羅 環の巻 内発的發展論によるパラダイム転換』藤原書店.

鶴見和子, 川田侃編 1989『内発的発展論』東京大学出版会.
 トゥガリノフ, ヴァシリイ・ペトロヴィッチ 1979『価値とはなにか マルクス主義の哲学的価値論』岩崎允胤訳、大月書店.
 豊泉周治 2002『ハーバーマスの社会理論』世界思想社.
 西川潤 2001『アジアの内発的発展』藤原書店.
 花田達朗 2020『公共圏 市民社会再定義のために』彩流社.
 ハーバーマス, ユルゲン 1994『公共性の構造転換』細谷貞雄, 山田正行訳、未来社.
 宮本憲一 1989『環境経済学』岩波書店.
 山本圭 2021『現代民主主義』中公新書.

〈英語文献〉

Cherian, George, 2019 “Singapore’s Emerging Informal Public Sphere”, *Insights on Singapore’s Policy and Governance from Leading Thinkers*, 1-12.
 Dahl, Robert A, 1998 *On Democracy*, New Haven; London: Yale University Press.
 Habermas, Jürgen, 1962 *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, Cambridge: Polity Press.
 Hohmann, Michael, 2019 *Habermas’s Public Sphere: A Critique*, Lanham: Farleigh Dickinson University Press.
 Kausikan, Bilahari, 2017 *Singapore is not an Island*, Singapore: Straits Times Press”.
 Lee, Kuan Yew. “Speech by Senior Minister Lee Kuan Yew to the Singapore Press Club” 7 June, 1996. Raffles Hotel, Singapore.
 Lee, Kuan Yew. 2000 *From Third World to First, The Singapore Story:1965-2000, Memoirs of Lee Kuan Yew*, Singapore: Times Media Private Ltd.
 Strangio, Sebastian, 2020 *In the Dragon’s Shadow*, New Haven; London: Yale University Press.

〈ウェブサイト〉

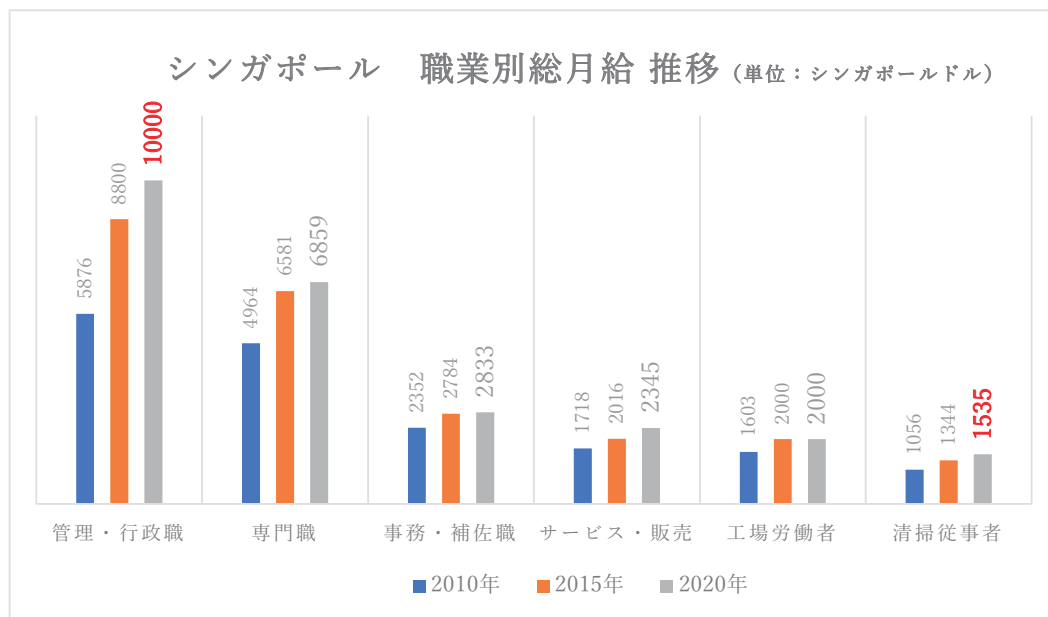
Ministry of Social and Family Development Occasional Paper, Singapore, November 2018, *Improving the lives of low income and vulnerable families in Singapore*.
<https://www.msf.gov.sg/publications/Documents/Improving-the-lives-of-low-income-and-vulnerable-families-in-Singapore.pdf> [最終閲覧 2021/11/29]
 Wong, Cara.”Network to help the homeless in Singapore expands as efforts ramp up to find them shelter”, The Straits Times, Dec 26, 2020. <https://www.straitstimes.com/singapore/community/network-to-help-the-homeless-in-singapore-expands-as-efforts-ramp-up-to-find> [最終閲覧 2021/11/29]
 日本貿易振興機構（ジェトロ）シンガポール事務所 海外調査部 2021 年 11 月、「シンガポール概況と日系企業の進出動向」
https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/01/40ae8bbf70797fe9/20210040.pdf [最終閲覧 2021/11/29]

注

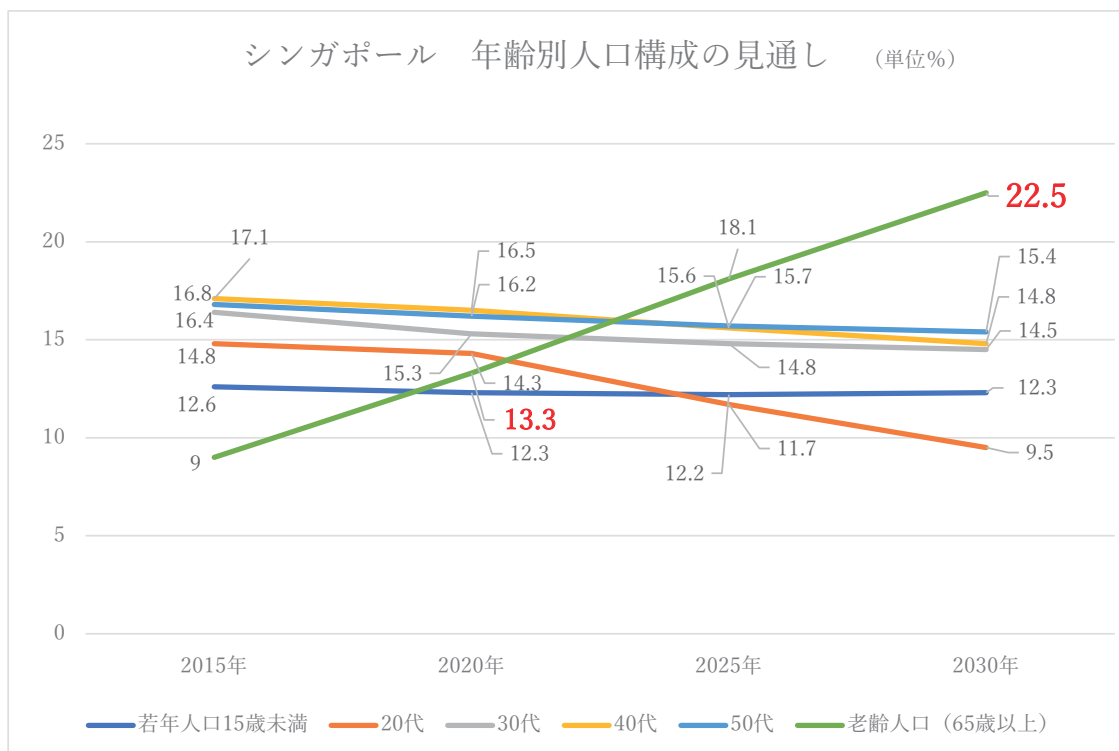
- 1) *World Bank Open Data, GDP per capita (US\$)*,
<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.PCAP.CD?locations=SG> 最終閲覧 2021/11/29
- 2) Singapore Government Agency Website, <https://eresources.nlb.gov.sg/history/events/62f98f76-d54d-415d-93a1-4561c776ab97> [最終閲覧 2021/06/11]
- 3) Lee, Kuan Yew. Singapore August 31, 1963
<https://www.nas.gov.sg/archivesonline/data/pdfdoc/lky19630831.pdf> 最終閲覧 2021/10/06]
- 4) Kausikan, Bilahari, *Singapore is not an Island*, (Singapore: Straits Times Press, 2017). 38.
- 5) *World Bank Open Data, GDP per capita (US\$)*

- <https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.PCAP.CD?locations=1W> [最終閲覧 2021/11/29]
- 6) *Department of Statistics, Singapore* <https://www.singstat.gov.sg/find-data/sdg/goal-1>
「国際的な貧困ラインを用いないため、該当なし」の表示は、SDGS 目標 1 – 2「2030 年までに各国定義によるあらゆる次元の貧困状態にある、すべての年齢の男性、女性、子どもの割合を半減させる」についても同様に表示される。[最終閲覧 2021/5/23]
 - 7) *Improving the lives of the low income and vulnerable families in Singapore, Ministry of Social and Family Development Occasional Paper, November 2018.*
<https://www.msf.gov.sg/publications/Documents/Improving%20the%20lives%20of%20low-income%20and%20vulnerable%20families%20in%20Singapore.pdf> [最終閲覧 2021/11/29]
 - 8) ラモン・マグサイサイ賞財団 2017 年受賞者授賞理由 <https://www.rmaward.asia/awardees/tay-tony/> [最終閲覧 2021/10/10]
 - 9) 2021 年 10 月現在、調理され届けられるお弁当の総数は 1 万食を超えている。
 - 10) 同年の受賞者には、カンボジアのアンコールワットの遺跡修復保全に半世紀あまりにわたって取り組み、カンボジア人によるカンボジアのための事業とするためにカンボジア人の遺跡修復の専門家の育成にも尽力した日本の上智大学の石澤良昭教授、インドネシア先住民の人権擁護の活動で知られるアブドン・ナババン、紛争で傷ついた女性や子どもたちの生活の再建に力を尽くしたスリランカのゲッツィ・シャンムガム、フィリピン経済区庁を長年率い、汚職撲滅、貧困削減に尽力しコミュニティを再生させたリリア・デ・リマが名前を連ねた。
 - 11) 「主の祈り」
天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与え下さい。
わたしたちの罪をお許してください。わたくしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。アーメン。
(2000 年 2 月 15 日 日本カトリック司教協議会認可)
 - 12) 筆者による聞き取りマグサイサイ賞財団 Somadio, Zealanda, 2017 年 8 月 30 日 マニラ
 - 13) 厚生労働省 海外情勢報告 2020 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/21/dl/t2-03.pdf> [最終閲覧 2020/06/11]
 - 14) 2020 年に 2 キロ圏内から 4 キロ圏内に範囲が広がり、額も 20,000S ドルから増額されている。
 - 15) Zhuo, Tee. “Parliament:5200 public rental households in rent arrears, 159 moved from 2-room to 1-room flats”, *The StraitsTimes*, 5 May, 2020
 - 16) 21 年 3 月、HDB では、パイロット計画として試験的に Joint Singles Scheme (JSS) に代わる制度として、単独で賃貸契約が結べる制度の試験的な運用を検討すると発表した。<https://www.channelnewsasia.com/news/singapore/hdb-joint-singles-scheme-rental-flat-community-care-14332550> [最終閲覧 2021/06/11]
 - 17) 筆者による聞き取り 2018 年 6 月 2 日 シンガポール
 - 18) マグサイサイ賞財団 2017 年受賞者トニー・テイ授賞理由 <https://www.rmaward.asia/awardee/tay-tony/> [最終閲覧 2021/11/30]
 - 19) シンガポールを知るための 65 章、田村慶子編著、p338, 明石書店 2019 年
 - 20) 「こころの時代 あたたかな弁当に宿る心」2018 年 12 月 24 日 NHK E テレ
 - 21) トニー・テイの活動およびインタビュー、お弁当調理に参加したボランティアのコメント、市内の団地に住む高齢の障がい者を訪ねるボランティア、支援を受ける高齢者のコメントなどが取り上げられた。
“Singapore’s Other side”, *NHKWorld*, Feb20, 2019, <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/ataglance/317/> [最終閲覧 2021/06/11]
 - 22) <https://mothership.sg/about-us/> Mothership はシンガポールについてシンガポールの若い世代が考え議論するプラットフォームを提供することを目的に民間のインターネットニュース配信会社として 2013 年 8 月設立された。情報通信およびメディア産業を所管する情報通信メディア開発庁の通信事業免許取得。2020 年 4 月現在の月間ページビュー数は 3000 万、読者層の 3 分の 2 は 25 歳から 44 歳とされ、購買力・発

- 信力のある若年層を中心に影響力がある。
- 23) <https://twitter.com/mothershipsg/status/1097405486226239490> [最終閲覧 2021/06/11]
 - 24) ロイター通信社の短報を転載したザ・ストレイツタイムズ記事。“Singapore food sharing pioneer Tony Tay of Willing Hearts among winners of Philippines Magsaysay awards.” *The Strait Times*, 27 July, 2018. <https://www.straitstimes.com/asia/se-asia/singapore-food-sharing-pioneer-tony-tay-of-willing-hearts-among-winners-of-philippines> [最終閲覧 2021/10/10]
 - 25) 2020 年 7 月に実施された総選挙で建国以来の与党「人民行動党」PAP の得票率は、史上 3 番目に低い 61.2%に低迷した。
 - 26) ザ・ストレイツ・タイムズ紙はテイの活動が SNS 上で広く拡散されていることを報じた。
<https://www.straitstimes.com/forum/letters-in-print/japan-nhks-report-on-spore-social-support-system-inaccurate> [最終閲覧 2021/06/11]
 - 27) From the Third World to First, The Singapore Story:1965-2000, Lee, Kuan Yew. Singapore Press Holdings. 2000.
 - 28) ホームレスについての全国調査、およびホームレスに対する支援の強化は、2019 年から 2020 年に相次いで発表された。2017 年のテイのマグサイサイ賞受賞、2018 年の NHK による特集番組の放送の後のタイミングであることから、テイの活動が SNS などで内外に広く知られるようになったこととの関連を指摘する声もある。
 - 29) Homeless in Singapore: Results from a nationwide street count, Ng Kok Hoe, Lee Kuan Yew School of Public Policy, National university of Singapore, 2019. <https://lkyspp.nus.edu.sg/docs/default-source/faculty-publications/homeless-in-singapore.pdf> [最終閲覧 2021/06/11]
 - 30) Wong, Cara. “Network to help the homeless in Singapore expands as efforts ramp up to find them shelter”, *The Straits Times*, Dec 26, 2020. <https://www.straitstimes.com/singapore/community/network-to-help-the-homeless-in-singapore-expands-as-efforts-ramp-up-to-find> [最終閲覧 2021/11/29]
 - 31) 筆者による聞き取り 2018 年 6 月 2 日 シンガポール
 - 32) 「こころの時代 あたたかな弁当に宿る心」2018 年 12 月 24 日 NHK E テレ

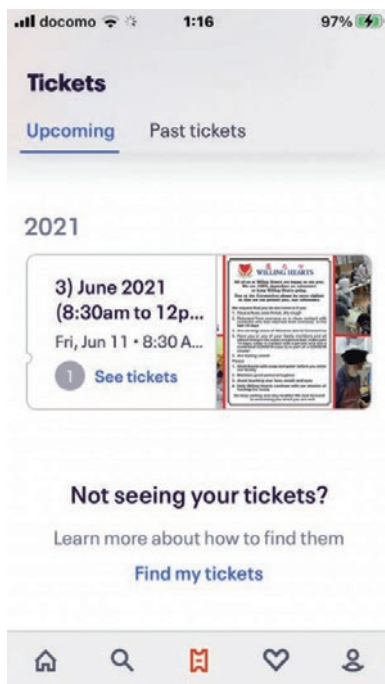


資料1：シンガポール人材省 2021年給与報告書より作成

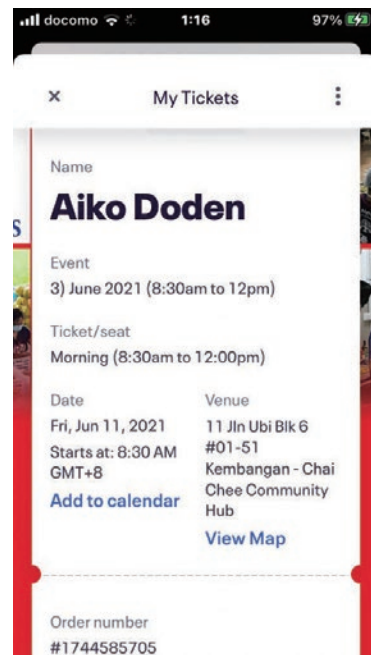


資料2：UN World Population Prospect 2019 より作成

ボランティア希望枠と Willing
Hearts の活動内容を示した画面



2021 年 6 月 11 日 8 時半から 12 時の枠
を予約したことを示す画面



資料3：Willing Hearts ボランティア日時 予約アプリ画面

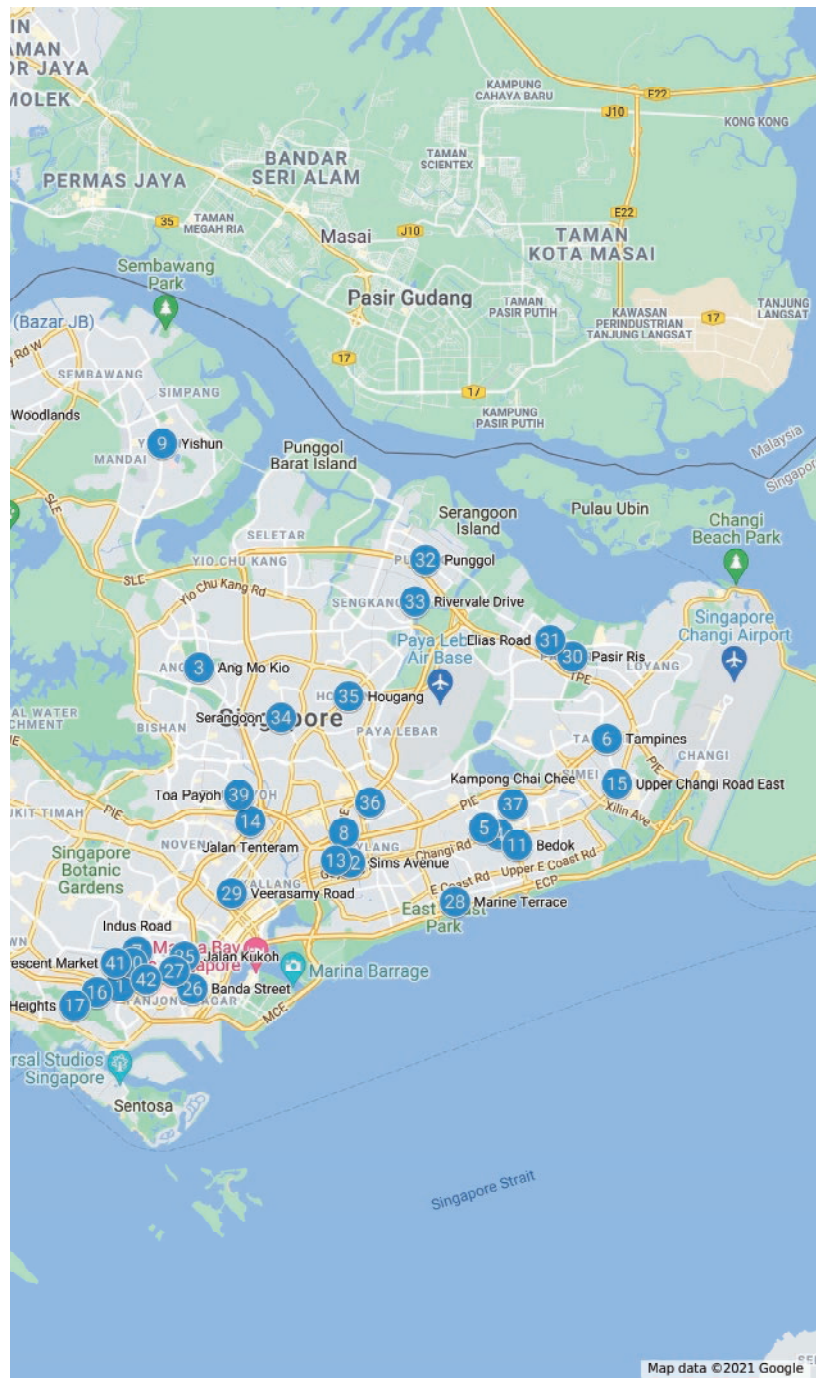


資料4：マグサイサイ賞授賞式（フィリピン・マニラ、2017 年 8 月 30 日筆者撮影）
左から 2 人目が Willing Hearts 創設者トニー・テイ

Singapore Willing Hearts Distribution points

21年5月3日配布ポイント

- 1 Bukit Merah
- 2 Clementi
- 3 Ang Mo Kio
- 4 Bedok
- 5 Chai Chee Road
- 6 Tampines
- 7 Indus Road
- 8
- Circuit Road & Paya Lebar Way
- 9 Yishun
- 10 Bukit Panjang
- 11 Bedok
- 12 Sims Avenue
- 13 Aljunied
- 14 Jalan Tenteram
- 15 Upper Changi Road East
- 16 Henderson Road
- 17 Telok Blangah Heights
- 18 Petir Road
- 19 Bukit Panjang
- 20 Choa Chu Kang
- 21 Bukit Batok
- 22 Boon Lay Way
- 23 Teban Gardens
- 24
- Clementi MRT Station (EW23)
- 25 Jalan Kukoh
- 26 Banda Street
- 27 Chin Swee Road
- 28 Marine Terrace
- 29 Veerasamy Road
- 30 Pasir Ris
- 31 Elias Road
- 32 Punggol
- 33 Rivervale Drive
- 34 Serangoon
- 35 Hougang
- 36
- Korean Church of Jesus Christ Bishops
- 37 Kampong Chai Chee
- 38 Woodlands
- 39 Toa Payoh
- 40 Chen Seng Yip Trading
- 41 Beo Crescent Market
- 42 Jalan Bukit Ho Swee



資料5：お弁当配布地図（2021年5月3日配布ポイント）

<午前 4 時ごろ>



食材の下準備



主菜の調理



副菜の調理



袋に詰める

<午前 6 時ごろ>

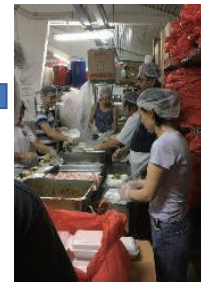


献立ごとにまとめる

<午前 8 時ごろ>



できあがったお弁当



箱に詰める



配達先ごとにまとめる

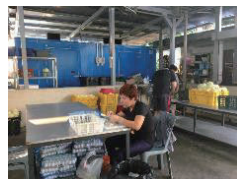


車に積む 手前はテイ氏

<正午ごろ>



翌日の下準備



調達した食材の管理

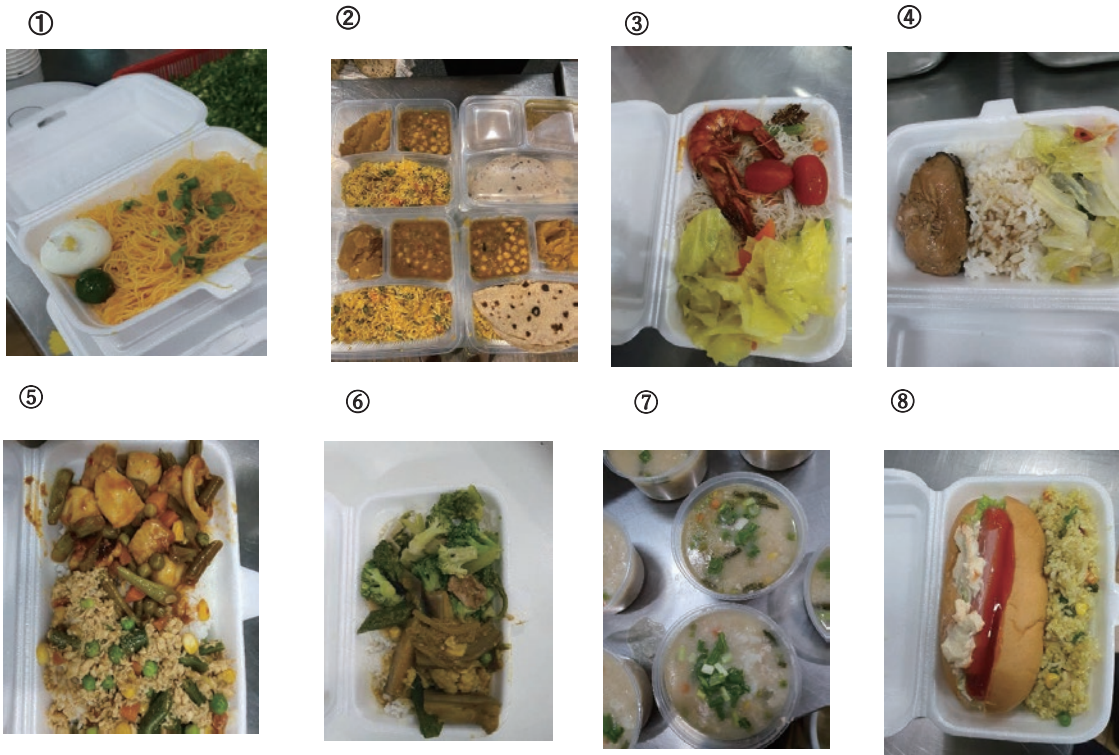
<午前 10 時ごろ>



HDB 団地 1 階 パティオでお弁当をわたす

資料 6 : Willing Hearts 一日の作業の流れ (2018 年 6 月 4 日筆者撮影)

- ① いためた米粉（ビーフン）にゆで卵は肉を食さない人用。
- ② 豆類のカレーとカレー味の麺、主食のチャパティはインド系、ヒンズー教の人たち用。
- ③ 塩味のビーフン、エビのチリソース炒め、キャベツの炒めもの。
- ④ 主菜は醤油味の魚の煮物、副菜は野菜の炒め物。主食の白飯には煮汁がかけてある。
- ⑤ イカと鶏肉の辛いサンバルソース炒め、鳥そぼろと白飯。ボリュームがあり昼夜2食分を想定。ノンベジタリアン。
- ⑥ ブロッコリーの中華炒め、茄子と豚肉の炒めもの、白飯。
- ⑦ 小さく刻んだ人参、ネギ、トウモロコシなどが入ったお粥。ベジタリアン。消化がよく食べやすく、高齢者用。運搬中にこぼれないように密閉される容器で配られる。
- ⑧ 野菜炒飯とホットドック。手に入った食材で調理するため副菜がない献立になるケースも。子どもたちには人気のメニュー。



資料7：Willing Hearts あたたかなお弁当を届ける活動 献立の一部（2018年6月4日 筆者撮影）

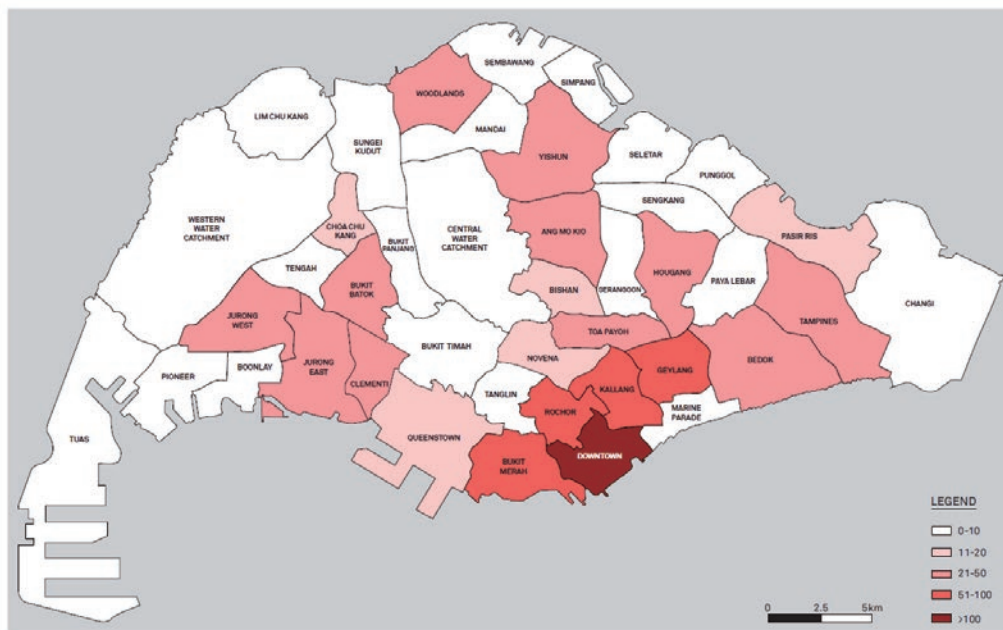
CUMULATIVE COUNT

HOMELESSNESS WAS FOUND IN MOST PARTS OF SINGAPORE IN THE CUMULATIVE COUNT OVER SEVERAL MONTHS, WITH SIGNIFICANT VARIATION IN NUMBERS ACROSS DISTRICTS.

The fieldworkers initially recorded 1,194 observations of people who were either asleep or judged to be going to sleep in public spaces, in 25 districts consisting of 298 zones. During data checks, 144 entries were discounted because they did not meet the criteria set in this study for people going to sleep. This left a final figure of 1,050 observations, consisting of 862 observations of people already asleep in public spaces and 188 observations of people who were going to sleep.

Figure 1 shows the geographical distribution of the observations. The map is largely based on URA Planning Area boundaries. Observations from several outlier high-count sites that may be easily identified have been omitted to ensure confidentiality.

FIGURE 1.
Geographical
distribution of
observations from
cumulative count



FINDINGS

資料8 ホームレス確認箇所（出典 シンガポール国立大学 ホームレス実態調査報告書）

The Historical Earth-fortified Highway of the Indo-Chinese Peninsula and *Pax Angkorika* (Peace in Angkor Empire)

Sophia University

Professor Yoshiaki ISHIZAWA

1. Inquiring into the Angkor Empire within the Context of World History

The Angkor Empire like the Roman Empire was not built in a day. I shall hereby conduct a reexamination of the historical facts that lie behind this empire, which dominated an area within the Southeast Asian continent over a period spanning roughly 600 years. Ever since its pre-Christian days, Cambodia had accepted and integrated within itself from regions located in both China and India, varieties of cultural elements and idioms, religions, cosmology, politics, legal codes such the Laws of Manu, astronomy, agricultural implements, and other such elements, and all these in the course of months and years were adapted and restructured to fit into the nation's way of life. This in turn brought forth the framework that embraced the politics, economics, culture, and other components of the Angkor period, and eventually led to the growth of the Angkor Empire.

The 26 kings comprising the successive generations of the Angkor Empire were all engrossed in suppressing political uprisings in the regional areas, and in the areas they set foot in they caused temples to be erected and inscriptions to be engraved. These signified the territory that was under the jurisdiction of the God-King. For the sake of the temples, kings always urged the village folk to migrate, widened paddy fields, and arranged things in such a way that the temples were the strongpoints of the regions, and for the transportation of materials needed for the temple construction they created roads that could be traversed using ox carts (rddeḥ).

2. The God-King (KJTR = Devarāja)

How was the earth-fortified highway laid out? If we were to study the orders of the God-King as presented in the inscriptions, they would be as follows.

1) With a desire to establish his royal authority, the king suppressed revolts that arose within the various regions.

2) As a symbol of the suppression of revolts, the king ordered (ājñā) the erection of temples and the institution of stone pillars with inscriptions.

3) The king indicated to the regional chiefs (khloñ viṣaya), chiefs of areas that experienced sudden uprisings (droṇ vraḥ,) the places where the hermitages or temples (āśrama) were to be erected.

4) The regional chiefs caused the villagers living in the immediate vicinity to migrate, and the villagers established hamlets (sruk) in areas close to the temples.

5) “The hamlets of the village folk led to”: (1) Clearance of jungles (2) Removal of trees (3) Slash and burn agriculture (4) Planting of Rice in dry fields (5) Paddy field cultivation.

6) “Temple Construction”: (1) Village workers - Digging of moats (kasindhu) or reservoirs (taṭāka/bārāy). Water was guaranteed for human use and for use by cattle → (2) The servant of the god (Khloñ Kāryya, K.725) was the supervisor → (3) The temple chief (Khloñ Vnam, K.71) → (4) Work related to the temple continued for a long period → Memorial religious services were continued with reference to the reconstruction of the temple.

7) The appearance of constant streams of visitors, the rise in the village population, the arising of subsidiary economic activities → the permanent residence of the Buddhist monks (pamṇos/pamṇvos) and the maintenance of the temple → generous donations (amṇoy) by influential villagers who lived in the vicinity.

8) The temples led to a deepening or intensification of virtue or merit (punya) → the Buddhist monks (pamṇos) and devout villagers moved about the temples visiting places of pilgrimage (kṣetrādhigama) → two-wheeled ox carts (rddeḥ) traveled over the embankment (thnal) bearing the villages’ local specialties and votive offerings → rājakāryya (royal service).

3. The Life Infrastructure of the Hamlets

If I were to present the terminology concerning the infrastructure as found in the inscriptions, it would be as follows.

1) The infrastructure related terminology as provided by the inscriptions

(1) thnal, tnal, phlū = path, causeway, embankment, earth-fortified highway

(2) Bārāy, taṭāka = reservoir, travaṇ/travāṇ = pond, damṇap = dam/dike, dvāra = gate, kasindhu = moat, fosse.

(3) Spean = stone bridge, spaṇ = union

(4) kṣetrādhigama = visiting places pilgrimage

(5) rddeḥ = ox cart

2) Regional centers in the reign of Jayavarman VII (1181-1218?)

(1) vahnigriha (dharmaśāla) = fire shrine (or rest-house) (K.908, 121 spots)

(2) ārogyaśāla = hospital, sanatorium (K. 273, 102 spots)

4. What Type of Regional Strongholds Existed in Southeast Asia from Pre-Christian times until the 5th century of the Christian Era?

When we consider the type of Regional Strongholds that existed in Southeast Asia from Pre-Christian times until about the 5th century of the Christian Era; first within the port city of Oc-Eo located in the valley of the Mekong, and beyond it to Phnom Da and Ba Phnom (Le Fou-nan), we

can identify for certain remnants of temples, port cities, and habitations. From Oc-Eo, just as L. Malleret reported, Roman Medallions and several artifacts of trade between east and west have been unearthed. It had been functioning as a port city from about the 1st to the middle of the 6th centuries.

Second, we have the Vo-canh inscriptions (Sṛī Māra inscriptions close to Nha-Trang, which shows that this too was a regional stronghold.

Third, from an area near the vicinity of Vat Phu temple located in the south of Laos in the region of Bassak, the Devānika inscription that dates to the latter half of the 5th century has been discovered.

Fourth from an area near the vicinity of Nam Sak in the valley of Chaophray in Thailand the Si Thep inscription has been discovered. This was a small area, but yet it was a stronghold.

5. The Southeast Asian Continent in the 8th century

When we consider the type of Regional Strongholds that existed in Southeast Asia after the 5th century, we notice that in Cambodia we had the clash between Funan (扶南) and Chenla (真臘), and in the southern area of Vietnam we had Champa. In the Chaophraya valley we had Dvāravati, and politically it was volatile.

6. Traces of the Conquests of Jayavarman II

The kings of the Angkor Empire were always engaged in regional conquests. If what is inscribed in the Sdok Kok Thom inscription (K.235) were to be transferred to a map, it would be as follows: In 770 A.D. he subjugated Indrapura, in 781 A.D. Śambupura, in 790 A.D. Hariharālaya, and during the period spanning (790-801 A.D.) he subjugated the region of Amerendrapura, and in 802 A.D. he declared the foundation of his state at Mahendraparvata (Rong Cěn, Phnom Kulen).

7. The Area under Dominion of the Angkor Empire in the Region of Yaśovarman I (889-910)

From about the end of the 9th to the beginning of the 10th century, King Yaśovarman forcefully subjugated all areas, caused inscriptions to be engraved, and built hermitage (Yaśodharāśrama) for Buddhist priests.

8. Hospital Distribution in the Reign of Jayavarman VII (1181-1218?) according to the Ta Prohm Inscription (= 1186 A.D)

Jayavarman VII (from 1181 to about 1218), who was responsible for the great affluence of Angkor, also constructed in various areas of his domain hospitals (ārogyaśāla) and fire shrines or rest-houses (vahnigriha) and made clear the fact that it was his control.

9. The Capital City of Angkor

In the capital city of Angkor too there were embanked roadways, and in 889 when Yaśovarman I moved his capital to Angkor, it is said that in order to shift quarters from the earlier capital city of Hariharālaya a large number of people transported household goods using ox carts. Such ox carts are still used by those living in the vicinity, and I myself have walked along the road.

10. The Peripheral Areas of the Territory under Control of the Angkor Empire

To what extent did the Angkor territory spread? The inscriptions themselves and the areas where they were unearthed provide us an answer to this question. The answer is as follows.

- 1) The 7 cities in valley of the Chaophraya and Mekong rivers
 - (1) Lopburi = Lavo = Prang Sam Yot (Thailand)
 - (2) Sukhothai Dynasty (1240-1438): Tapadean, Wat S. Sawai (Thailand)
 - (3) Ayutthaya Dynasty (1351-1569, 1580-1767): Prah Prang (Thailand)
 - (4) Saifong (Vientian, Laos)
 - (5) Vat Phu (Basac, Laos)
 - (6) Go Can ti Sam (Mekong Delta, Vietnam)
 - (7) Phimai (Khorat, Thailand)
- 2) Preah Khan Inscription (K.908, 1191) → Pathway to make offerings to Buddhist images located in distant places.
 - (1) Lopburi Lavodarpura
 - (2) Ratchaburi Jayarajapuri
 - (3) Petchaburi Jayavajrapuri
 - (4) Prasat Maung Singh Jayasimhapuri

11. Distribution of Commercial Goods in the Angkor Empire, and the Path Utilized for the Traffic of People (13th century)

When we consider the roads used for trade in commercial goods, we had in the west Prasat Maung Singh and Dawei, and in the east Go Can Ti, but these were not inlets to the Mekong River. In the north we had Vientian and Wat Phu, and Sukhothai in the northwest.

- 1) Sdok Kok Thom Temple

Investigating the vicinity around the Sdok Kok Thom Temple. An ancestral temple, the hereditary asset of a Buddhist priest.
- 2) Investigation of Wat Phu, Bassak

A route for the collection of forest products, either by land or by water.
- 3) Investigation of the ruins of Go Can Ti (by way of the South China Sea)
 - 1296, visited by the Chinese envoy Chou Ta-Kuon
 - 1283, A squadron of soldiers of the Yuan dynasty of China occupied the capital of Angkor.

- 1285, An Ambassador bearing tribute was sent to Yuan dynasty.

4) Investigation of Prasat Maung Singh (From the area of the Bay of Bengal)

1260, was the year of the visit of the Hindu Shiva worshiper and Bramin Sarvajñamuni, who assumed office as preceptor (vrah guru) to King Jayavarman VIII. The upheaval that led to the discarding of the Buddhist statues.

12. What Sort of Era was the First Period of Peace in Angkor Empire (*Pax Angkorika*) (968-1050)

According to an inscription of that period, Jayavarman II who is known as the founder of the Angkor empire subdued several regional strongholds, and later established the capital city in the Angkor area in 802. If we were to consider the issue of the capital city from a geopolitical angle, we see that it was landlocked, and it was centrally located within a granary wherein the cultivated land spread out as far as the horizon, a wide and fertile area. Yaśovarman I, who is known as the restorer of the empire displayed an active interest, and more or less succeeded in bringing about the unity of the nation till the beginning of the 10th century, within the limits of present-day Cambodia.

In the latter half of the 10th century began the reign of Jayavarman V, (from 968 to about 1000), who ascended the throne at a rather young age. The preceptor or minister Yajñāvarāha established the young king on the throne, built in a variety of areas new temples in his name, and stimulated the increase of productivity in the regions. The minister even erected on his own a temple in the area of Banteay Srei located about 35 kilometers away from the capital of Angkor, and this temple, which is an exquisite and graceful structure, is often referred to as a jewel among the temples of Angkor.

In the 11th century, regardless of the fact that a war of succession had arisen, Suryavarman I (1002-1050) who was of the next generation, left behind several of his imprints in the vast plains of the northwest areas of Cambodia. He went as far as the Chaophraya river valley on a mission of conquest, occupied Lopburi (1022-1025), which was to become a point of strategic importance in the west for the Angkor Empire, and had it merged with his territory. In this period the Baphuon temple, which was a temple for the nation's peace, was erected. Its many reliefs and statuary are works alluring and gorgeous, and the temple itself is famed for its elegant artistic style. If we were to tentatively refer to this era as the Period of the First *Pax Angkorika*, it would be so because during the years spanning roughly (968-1050), which works out to nearly 100 years, the nation enjoyed a long interval of peace.

13. The Second *Pax Angkorika* (Peace in Angkor Empire) was nearly 100 years (from 1113 A.D to 1219 A.D)

Eventually Suryavarman II (from 1113 to about 1150), a person revered for his erection of Angkor Wat, made his appearance, and re-unified the nation that had been split into two. He was a

devotee of the god Vishnu who strove actively to expand his domains in the northeast of Thailand, and through busying himself with such activities over a period of 35 years and by utilizing the powers of the state, he ensured an era of peace within the Southeast Asian continent. Later, notwithstanding the fact that the armies of Champa had occupied Angkor for four years, Jayavarman VII (from 1181 to about 1218) ascended the throne.

Jayavarman VII was the first king who was devoted to Mahayana Buddhism. He built several temples and monasteries in various places, such as for instance the Bayon temple. Within his territory, he built 121 rest-houses (1191 A.D.) and 102 hospitals (1186 A.D.), and busied himself with erecting Buddhist temples, so that the compassion of the Buddha might traverse the length and breadth of his domain. Within the Angkor capital and the surrounding areas, he set into operation a water-distribution system and a system of intensive rice-cultivation, and in this way he guaranteed the livelihood of the construction workers and their families.

The domain of Jayavarman VII developed even more, and he came to govern the Southeast Asian continent for about 37 years. Despite having a few ups and downs, the Second *Pax Angkorika* was an era of peace that extended for about 110 years. In the international markets of Angkor goods introduced from India and China were on display, and foreign traders were constantly providing such goods by employing ox carts or caravans. Special products from regional areas too were displayed in large quantities and sold.

The area of governance of the Angkor Empire expanded to a level unprecedented in history. From the city of Lopburi in the valley of the Chaophraya in the west it extended to the gulf of Thailand, in a westerly direction to the temple of Muang Sing, northwards to Vientian in Laos, northwest to Sukhothai in the regions of Thailand, and eastwards to Vijaya (Champa Kingdom) located in the central area of the present-day Vietnam. Goods from China that were brought over from the South China Sea were unloaded at the Mekong delta and transported to Angkor, and from the port city of Dawei in the Bay of Bengal, precious metals, and high-quality printed cotton from India and even luxury goods were transported by ox carts.

14. The Peace of Angkor Empire Deepened Faith and Stabilized the Economy and Society

The era of the Peace of Angkor that had begun with Jayavarman V (968-1000) continued until the period of Suryavarman I (1002-1050). This was its first epoch, which lasted for about 100 years. Later, Suryavarman II (1113-1150) ascended the throne, and on hearing rumors of the erection of Angkor Wat, vast numbers of villagers assembled at the place, since it was possible for them to earn religious merit and accumulate virtue by engaging in such work.

The king forcefully extended his domain, and during his invasion of Dai Viet and Champa, his massive forces navigated the earth-fortified highway with its stone bridges and assailed the enemy. These sturdy forces also served to maintain the peace. In the succeeding era of Jayavarman VII, the political, economic, and cultural state of affairs developed to their highest point. This

could be termed the Second Period of the Peace of Angkor and it lasted for roughly 110 years, for the astonishing affluence of the nation had progressed to such an extent that the Chinese called it (*Ming Shi*), or the rich and noble Cambodia.

The historical conditions for the Peace of Angkor lay first of all in the fact that during the first (968-1052) and second (1113-1218) epochs of Peace, there existed the earth-fortified highway that traversed the length and breadth of the nation. It was an ancient Asian highway linking the Bay of Bengal and South China Sea, and it was expanded to accommodate the traffic of commercial and other goods, besides people. In the central area lay the capital city of Angkor, with a population of about 400,000 people. It is my sincere hope that the issue of the Peace of Angkor Empire (*Pax Angkorika*) that I have explained so far will serve to evoke a review of the History of Southeast Asia.

15. Religious Statues from the Angkor Era Discovered in Mandalay

Following a survey of cultural heritage in Myanmar in 1981, two big bronze statues and several statues of Simha were displayed behind metal bars in the Mahamuni Pagoda (also known as the Arakan Pagoda), in the city of Mandalay. On seeing them I was greatly surprised, since I did not expect to see sculptures from Angkor in Mandalay. In fact, I touched them to see if they were real, and I also noticed local people visiting the pagoda touch the chest, neck, and legs of the statues. I asked an academic from Mandalay University who accompanied us about them, and he replied that all pilgrims to the pagoda touched the statues, because of their miraculous powers. He said that in particular people had a tendency to touch the part of the statue that corresponded to the portion of their own body that was not in good health, or where they suffered some pain.

These statues from the Angkor era are of *dvārapāla*, a deity who protects the entrance. At first, I could not understand how the statues had come to Mandalay, but later I realized that they were part of the treasures that had been looted from the city of Angkor. They were probably taken away from the city when it fell to the armies of Ayutthaya around 1431.

The kingdom of Ayutthaya was itself attacked and occupied in 1569 by King Bayinnaung (1551-1581), the second ruler of the Burmese Toungoo Dynasty. The war was fought to seize the treasures of the wealthy Ayutthaya Kingdom, and to take control of trading rights in the Bay of Bengal. The sculptures on display were taken from Ayutthaya as trophies of war and brought to the Burmese city of Bago (Pegu), but in 1599 naval forces of the Kingdom of Rakhine (Arakan) attacked Bago, and the statues were taken away once more.

We do not know if the looters were aware that those statues were originally treasures of the Khmer Empire, but the next place where the statues came to rest was the region of Sitetway (Akiyab). Later, King Badon (1782-1819), the 6th ruler of the Konbaung Dynasty sacked Sitetway, and in 1784 he brought the statues to Amarapura, which lies close to the city of Mandalay. In 1884, during the reign of King Thibaw (1878-1885), who was the 11th king of the dynasty, the

statues were ultimately moved to the Mahamuni Pagoda. Hence, the people of Myanmar now venerate those statues, which were earlier revered by crowds of Khmer people when their empire was at its height, and they have at long last found a permanent resting place.

Like the treasures of other royal houses of mainland Indochina, the hidden treasures of the Khmer Empire were moved from east to west, and again from south to north since the territories of all those kingdoms were connected by land. Each kingdom had a capital city that played a significant role in its history, and since all of those cities were linked by land, they were hubs of trade and population movement. The treasures passed from the Khmers to the Siamese, and thereafter to the Hmong, the Arakanese, and finally the Burmese, who installed the statues permanently in Mandalay. What I have described so far is the trail of one set of precious statues from the Khmer Empire, but the trail reveals the history of the rise and fall of many of the kingdoms of Southeast Asia.

Bibliography:

- 1) Pelliot, P.: Le Fou-nam, *BEFEO*, No.3 (2), pp.248-303, 1903.
- 2) Bruguier, Bruno: Réhabilitation de la route N.6, Province de Siem Reap, *Etude Archéologique*, [Phnom-penh] (document dactylographié,) 31, p.31 pl,1998.
- 3) Shibayama, M. (ed): *The Ancient East-west Corridor of Mainland Southeast Asia*, 2019, Bangkok.
- 4) Bruguier, Bruno: Les ponts en pierre du Cambodge ancien, Aménagement ou contrôle du territoire? *BEFEO*, Tome 87, N°2 (2000), pp. 529-551.
- 5) Hendrickson, Mitch: *Arteries of Empire, an operational study of transport and Communication Angkorian Southeast Asia* (9th to 15th centuries CE), PHD. Thesis, University of Sydney, 2007.
- 6) Boulbet, Jean et Dagens, Bruno: Les sites archéologiques de la région du Bhnam Gūlen (Phnom Kulen), *Arts Asiatiques*, tome 27 (1973), pp. 3-130.

<Résumé>

Pax Angkorika (Peace in Angkor Empire)

The first *Pax Angkorika* (Peace in Angkor Empire) was nearly 100 years spanning roughly from 944 A.D to 1050 A.D, that was the time of the construction of Pre Rup temple (961 A.D) and Banteay Srei temple (967-993 A.D). As we have seen, Banteay Srei is beautifully elegant because of the masterpiece of Goddess Devata, is often referred to as the “Oriental Mona Lisa”. Moreover, the completion of the carving relief of Ramayana epic at Baphuon temple is exquisite and graceful. It was about 100 years when ethnic culture flourished in the nation’s peace.

The second *Pax Angkorika* was nearly 100 years spanning roughly from 1113 A.D to 1219 A.D. There were the internal conflict and the war with neighboring countries such as the invasion of Champa army in Angkor (1177~1181 A.D) and the expedition to Vietnam in annexation of the Champa country (1203 A.D), etc. However, it was continuously in the era of stability, expanded in controlling territory and conferred the pride and title for the political disturbing regional and central power. And then, building temples in the regions and performing the religious ceremony were encouraged. Factors that made it possible can be summarized as follows.

The regional temples were built, and the settlement of inhabitants were formed around the temples. In addition, self-sufficient rice fields were cultivated, and the village life became stable and sustainable. In this case, a large regional bases with a large cultivable land areas and population were formed. Regional development had intentionally progressed such as the construction of 102 hospitals in 1196 A.D and 121 of rest-houses were set up in 1191 A.D along the highways., etc.

People and goods were going back and forth due to the great extension of the highways to the famous temples, and such the daily using goods, ceramic productions, specific effectiveness goods, crafts, majestic stuff, textiles, etc., that produced as subsidiary business in the region were brought. The constructed earth-fortified highways and stone bridges that adjusted to the different regions were connected from the capital of Angkor to the five great cities in the region.

At the center of Angkor capital, there were the connected earth-fortified highways to the five great based regions. Those highways extended to the Bay of Bengal and South China Sea, and the embanked earth-fortified highways of the all-weather types were connected and transported the goods from India and China.

1. Inquiring into the Angkor Empire within the Context of World History

The Angkor Empire like the Roman Empire was not built in a day. I shall hereby conduct a reexamination of the historical facts that lie behind this dynasty, which dominated an area within the Southeast Asian continent over a period spanning roughly 600 years. Ever since its pre-Christian days, Cambodia had accepted and integrated within itself from regions located in both China and India, varieties of cultural elements and idioms, religions, cosmology, politics, legal codes such as the Laws of Manu, astronomy, agricultural implements and other such elements, and all these in the course of months and years were adapted and restructured to fit into the nation's way of life. This in turn brought forth the framework that embraced the politics, economics, culture, and other components of the Angkor period, and eventually led to the growth of the Angkor Empire.

The 26 kings comprising the successive generations of the Angkor Empire were all engrossed in suppressing political uprisings in the regional areas, and in the areas they set foot in they caused temples to be erected and inscriptions to be engraved. These signified the territory that was under the jurisdiction of the God-King. For the sake of the temples kings always urged the village folk to migrate, widened paddy fields, and arranged things in such a way that the temples were the strongpoints of the regions, and for the transportation of materials needed for the temple construction they created roads that could be traversed using ox-carts (= *rddeh*).

2. The God –King (KJTR = Devarāja)

How was the earth-fortified highway laid out? If we were to study the orders of the God-King as presented in the inscriptions, they would be as follows.

- 1) With a desire to establish his royal authority, the King suppressed revolts that arose within the various regions.
- 2) As a symbol of the suppression of revolts, the King ordered (ājñā) the erection of temples and the institution of stone pillars with inscriptions.
- 3) The King indicated to the regional (pura/visaya) chiefs, chiefs of areas that experienced sudden uprisings, the place where the temples (āśrama) were to be erected.
- 4) The regional chiefs caused the villagers living in the immediate vicinity to migrate, and the villagers established hamlets (sruk) in areas close to the temples.
- 5) <<The hamlets of the village folk led to>> (1) Clearance of jungles → (2) Removal of trees → (3) Slash and burn agriculture → (4) Planting of Rice in dry fields → (5) Paddy field cultivation
- 6) <<Temple Construction>> (1) Village workers — Digging of moats (Kasindhu) or reservoirs (bārāy/taṭāka). Water was guaranteed for human use and for use by cattle → (2) The construction chief (Ācārya stapāka) was the supervisor → (3) The temple chief (Khloñ vnam) → (4) Work related to the temple continued for a long period → Memorial religious services were continued with reference to the reconstruction of the temple.
- 7) The appearance of constant streams of visitors, the rise in the village population, the arising of subsidiary economic activities → the permanent residence of the Buddhist Monks (Paṃṇos/paṃṇvos) and the maintenance of the temple → generous donations (amṇoy) by influential villagers who lived in the vicinity.
- 8) The temples led to a deepening or intensification of virtue or merit (punya) → the Buddhist monks and devout villagers moved about the temples visiting places of pilgrimage (kṣetrādhigama) → two-wheeled ox carts (rddelḥ) traveled over the embankment (thnal) bearing the villages' local specialties and votive offerings → rājakārya = royal service.

3. The Life Infrastructure of the Hamlets

If I were to present the terminology concerning the infrastructure as found in the inscriptions, it would be as follows.

1) The infrastructure related-terminology as provided by the inscriptions

- (1) thnal, tnal, phlū = path, causeway, embankment, earth-fortified highway
- (2) taṭāka = reservoir or Baray, travañ/travāñ, damnap = dam/dike, dvāra = gate, kasindhu = moat, fosse.
- (3) Spean = stone bridge, spaṃ = union.
- (4) kṣetrādhigama = visiting places pilgrimage
- (5) rddeḥ = two-wheeled oxcart

2) Regional centers in the reign of Jayavarman VII (1181-1218?)

- (1) vahnigriha = fire shrine (or rest-house) (K.908, 121 spots)
- (2) ārogyaśāla = hospital, sanatorium (K.273, 102 spots)

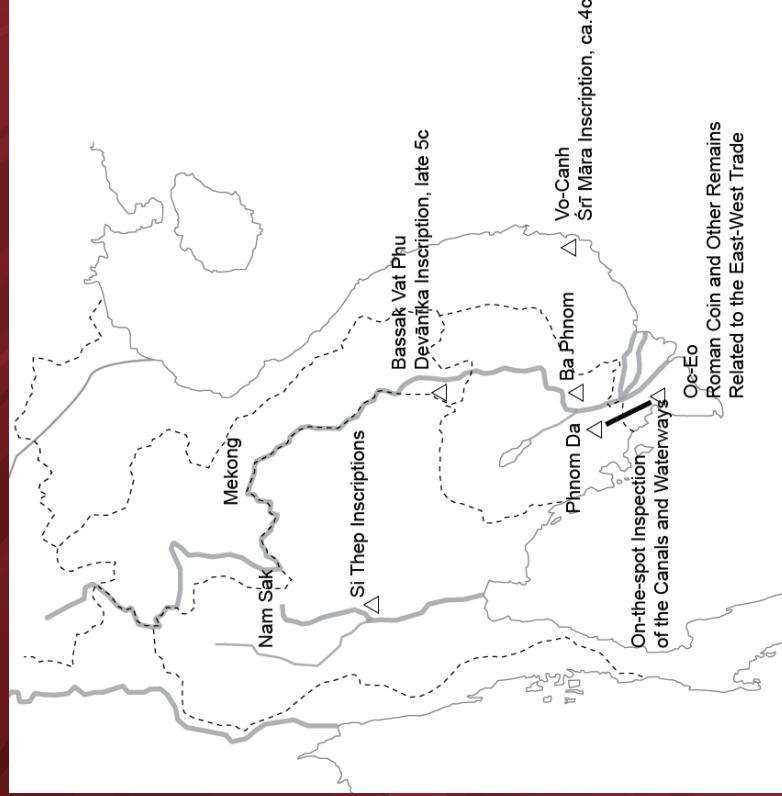
4. What type of Regional Strongholds existed in Southeast Asia from Pre-Christian times until the 5th century of the Christian Era?

When we consider the type of Regional Strongholds that existed in Southeast Asia from Pre-Christian times until about the 5th century of the Christian Era, first of all within the port city of Oc-Eo located in the valley of the Mekong, and beyond it to Phnom Da and Ba Phnom, we can identify for certain remnants of temples, port cities, and habitations. From Oc-Eo, just as L. Malleret reported, Roman Medallions and several articles of trade between east and west have been unearthed. It had been functioning as a port city from about the first century.

Second, we have the Vo-canh inscriptions (Śrī Māra inscriptions) close to Nha-Trang, which shows that this too was a regional stronghold.

Third, from an area near the vicinity of Vat Phu temple located in the south of Laos in the region of Bassak, the Devānka inscription that dates back to the latter half of the 5th century has been discovered.

Fourth from an area near the vicinity of Nam Sak in the valley of Chaophraya in Thailand the Si Thep inscriptions have been discovered. This was a small area, but yet it was a stronghold.



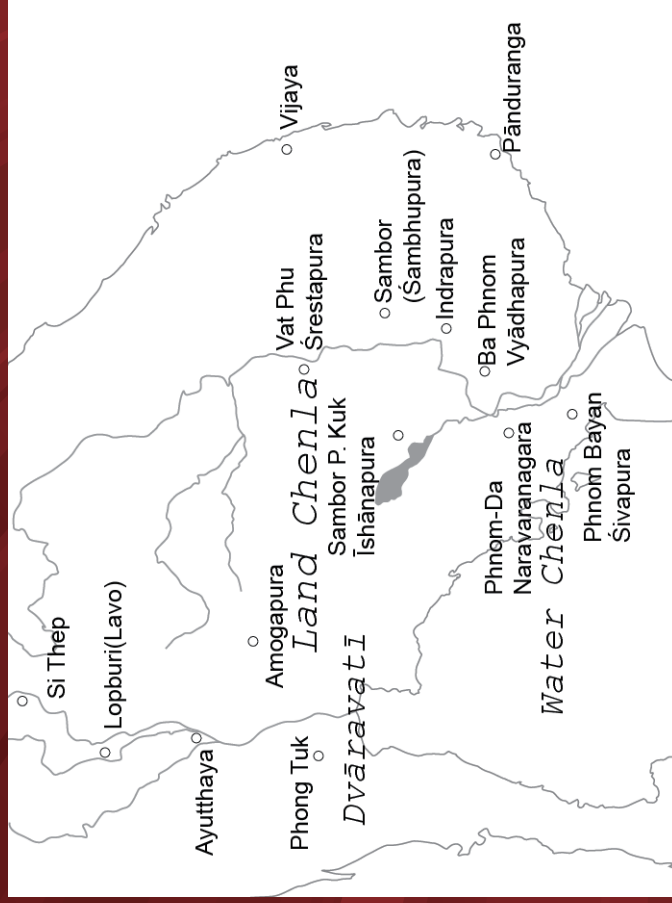
5. Roman Medallions (Historic Museum of Hochiminh):
Antonius Pius (138-161), Marcus Aurelius (161-180)



Marcus Aurelius

6. The Southeast Asian Continent in the 8th century

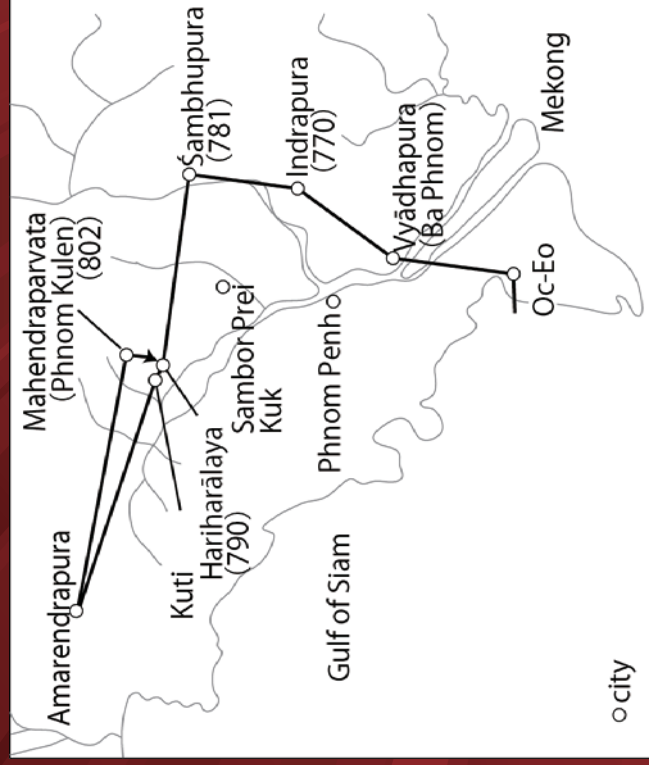
When we consider the type of regional strongholds that existed in Southeast Asia after the 5th century, we notice that in Cambodia we had the clash between Funan and Chenla, and in the southern area of Vietnam we had Champa. In the Chaophraya valley we had Dvāravatī, and politically it was volatile.



7. Traces of the Conquests of Jayavarman II

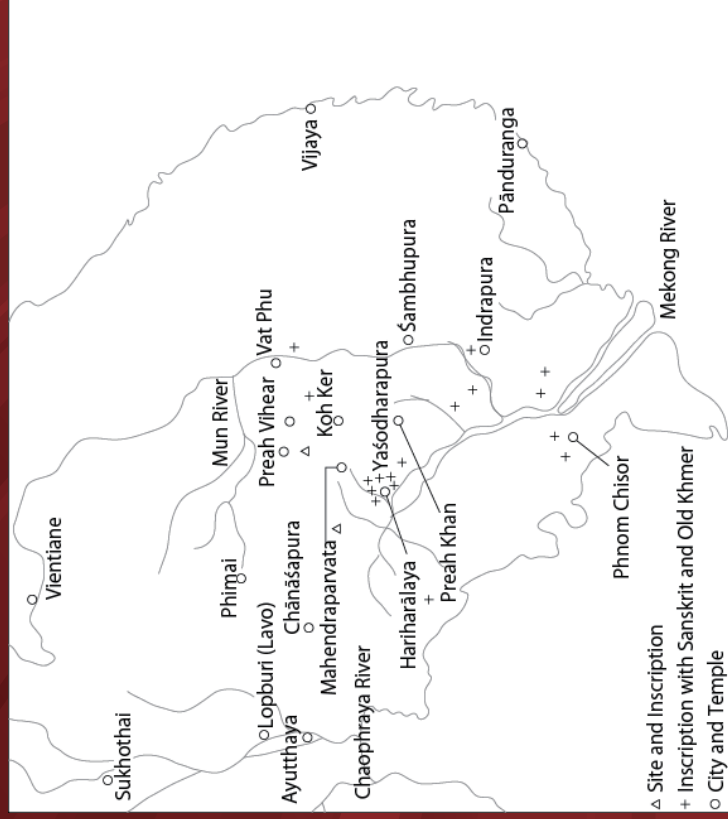
The kings of the Angkor Empire were always engaged in regional conquests. If what is inscribed in the Sdok Kok Thom inscription (K.235) were to be transferred to a map, it would be as follows:

In 770 A.D. he subjugated Indrapura, in 781 A.D. Śambhupura, in 790 A.D. Hariharālaya, and during the period spanning (790-801) A.D. he subjugated the region of Amerendrapura, and in 802 A.D. he declared the foundation of his state at Mahendraparvata (Phnom Kulen).



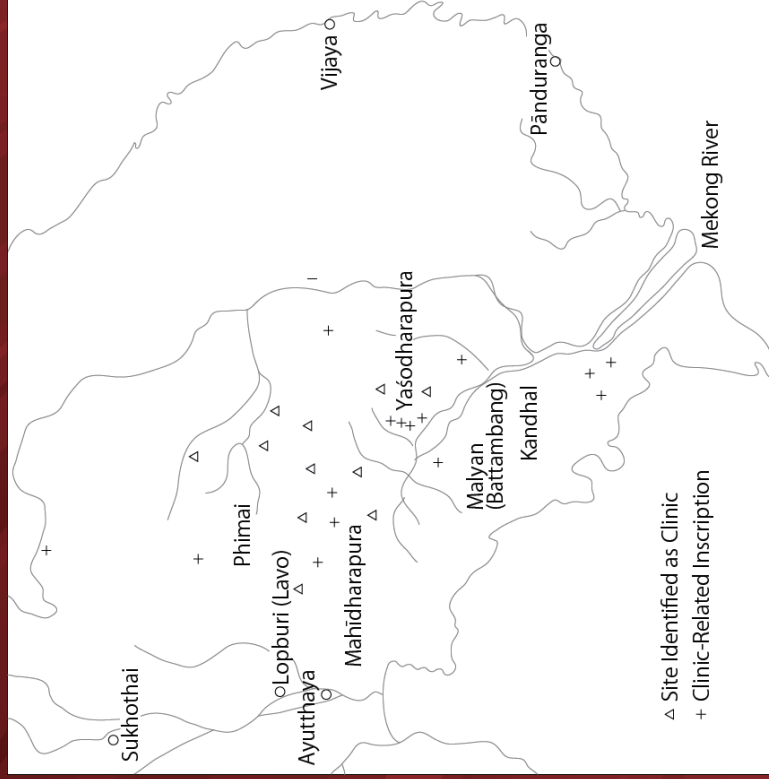
8. The Area under the Dominion of the Angkor Empire in the Reign of Yaśovarman I, (889-910)

From about the end of the 9th to the beginning of the 10th century King Yaśovarman forcefully subjugated all areas, caused inscriptions to be engraved, and built hermitages (Yaśodharārama) for Buddhist priests.



9. Hospital distribution in the Reign of Jayavarman VII (1181-1218) according to the Ta Prohm Inscription (= 1186 A.D)

Jayavarman VII (from 1181 to about 1218), who was responsible for the great affluence of Angkor, also constructed in various areas of his domain hospitals (*ārogyaśāla*) and rest-houses (*vahnigriha*), and made clear the fact that it was under his control.



10. Angkor Plan of the Capital Area

In the capital city of Angkor too there were embanked roadways, and in 889 when Yaśovarman I moved his capital to Angkor, it is said that in order to shift quarters from the earlier capital of Hariharālaya a large number of people transported household goods using oxcarts. Such oxcarts are still used by those living in the vicinity, and I myself have walked along that road.



11. The remains of ancient earth-fortified highway from Lolei to Phnom Bakheng



12. Estimated Outer Rim of Angkor through the Distribution Pattern of the Monuments

To what extent did the Angkor territory spread? The inscriptions themselves and the areas where they were unearthed provide us an answer to this question. The answer is as follows.

1) The 6 cities in valleys of the Chaophraya and Mekong rivers.

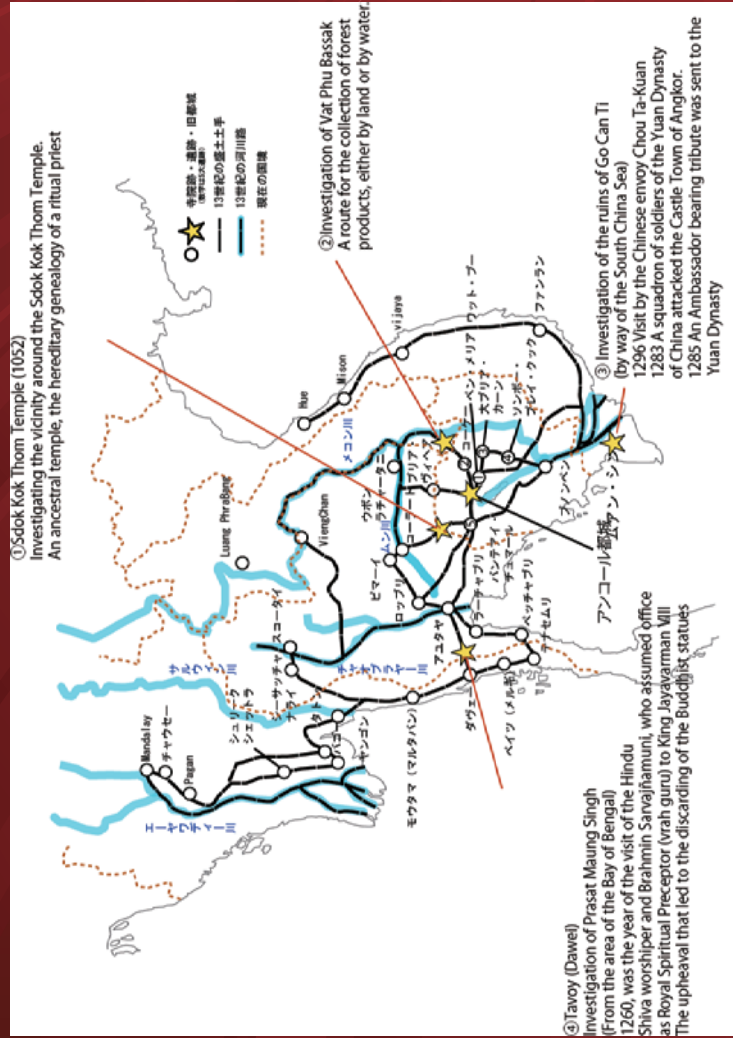
- (1) Lopburi=Lavo= Prang Sam Yot (Thailand)
- (2) Sukhothai Dynasty (1240-1438): Tapadean, Wat S. Sawai (Thailand)
- (3) Ayutthaya Dynasty (1351-1569, 1580-1767): Prah Prang (Thailand)
- (4) Say fong (Vientian, Laos)
- (5) Vat Phu (Basac, Laos)
- (6) Go Can ti Sam (Mekong Delta, Vietnam)
- (7) Phimai (Khorat, Thailand)

2) Preah Khan Inscription (K.908, 1191) → Pathway to make offerings to Buddhist images located in distant places

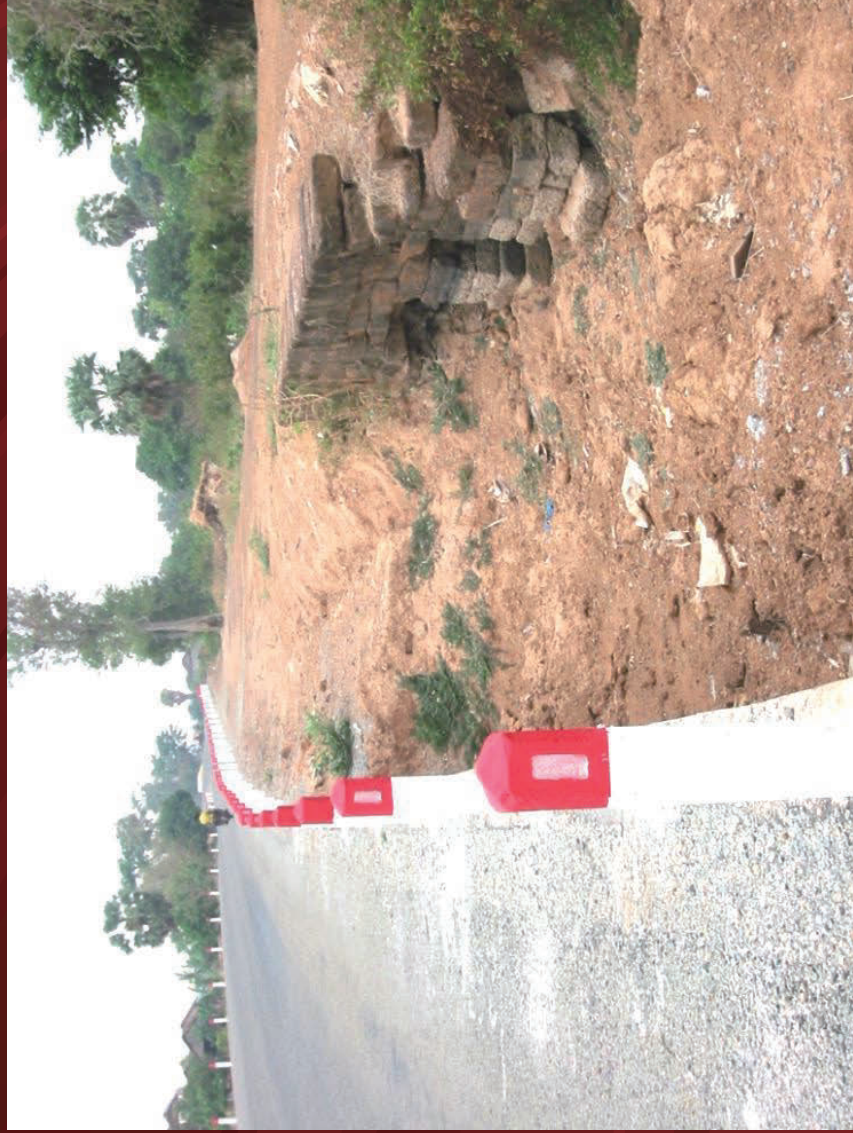
- (1) Lopburi = Lavodarapura
- (2) Ratchaburi = Jayarajapuri
- (3) Petchaburi = Jayavajrapuri
- (4) Prasat Maung Singh = Jayasimhapuri

13. Distribution of Commercial Goods in the Angkor Dynasty, and the Path utilized for the Traffic of People (13th Century)

When we consider the roads used for trade in commercial goods, we had in the west Prasat Maung Singh and Dawei, and in the east Go Can Ti, but these were not inlets to the Mekong River. In the north we had Vientian and Vat Phu and Sukhothai in the northwest.



14. The ancient road and bridges are still in active as a part of
present National Route No.6



15. The bridge, Spean Praptos (Kompong Kdei, Cambodia) in the
ancient highway (12th century)



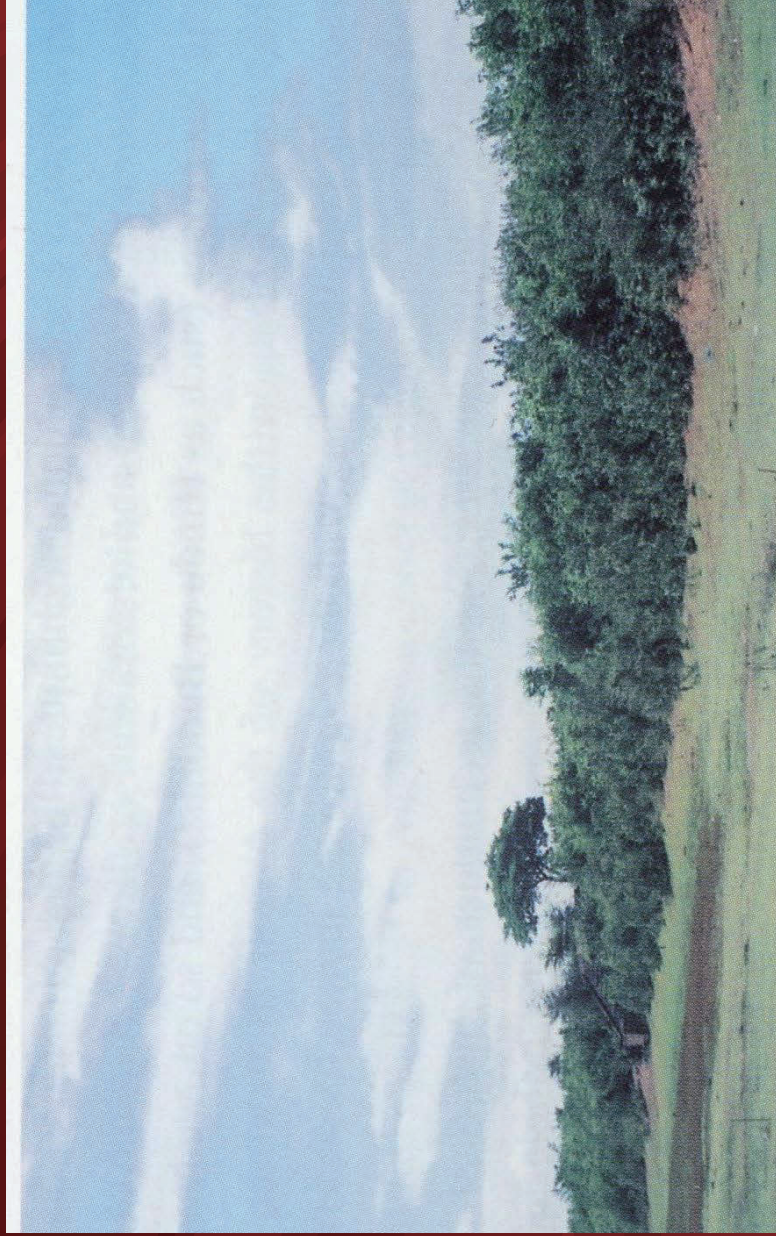
16. An ancient road from Angkor to Phimai (A road to Ta Muon
Thom, Khmer-Thai border)



17. A causeway to Ta Muon Toch temple, Khmer-Thai border)



18. The ancient royal earth-fortified road, Kralanh
district, Siem Reap.



19. What Sort of Era was the first Period of Peace in Angkor Empire (*Pax Angkorika*) (968-1050)

According to an inscription of that period, Jayavarman II who is known as the founder of the empire subdued several regional strongholds, and later established the capital city in the Angkor area in 802. If we were to consider the issue of the capital from a geopolitical angle, we see that it was landlocked, and it was centrally located within a granary wherein the cultivated land spread out as far as the horizon, a wide and fertile area. Yaśovarman I, who is known as the restorer of the empire displayed an active interest, and more or less succeeded in bringing about the unity of the nation till the beginning of the 10th century, within the limits of present-day Cambodia.

In the latter half of the 10th century began the reign of Jayavarman V, (from 968 to about 1000), who ascended the throne at a rather young age. The preceptor or minister Yajñavarāha established the young king on the throne, built in a variety of areas new temples in his name, and stimulated the increase of productivity in the regions. The minister even erected on his own a temple in the area of Banteay Srei located about 35 kilometers away from the capital of Angkor, and this temple, which is an exquisite and graceful structure, is often referred to as a Jewel among the temples of Angkor.

In the 11th century, regardless of the fact that a war of succession had arisen, Suryavarman I (1002-1050) who was of the next generation, left behind several of his imprints in the vast plains of the northwest areas of Cambodia. He went as far as the Chaophraya river valley on a mission of conquest, occupied Lopburi (1022-1025), which was to become a point of strategic importance in the west for the Angkor empire, and had it merged with his territory. In this period the Baphuon Temple, which was a temple for the nation's peace, was erected. Its many reliefs and statuary are works alluring and gorgeous, and the temple itself is famed for its elegant artistic style. If we were to tentatively refer to this era as the Period of the *First Pax Angkorika*, it would be so because during the years spanning roughly (968-1050), which works out to nearly 100 years, the nation enjoyed a long interval of peace.

20. Angkor Wat and the Second Period of Peace in Angkor Empire (*Pax Angkorika*) (from 1113 to about 1218)

Eventually Suryavarman II (from 1113 to about 1150), a person revered for his erection of Angkor Wat, made his appearance and re-unified the nation that had been split into two. He was a devotee of the god Vishnu who strove actively to expand his domains in the northeast of Thailand, and through busying himself with such activities over a period of 35 years and by utilizing the powers of the state, he ensured an era of peace within the Southeast Asian continent. Later, notwithstanding the fact that the armies of Champa had occupied Angkor for four years, Jayavarman VII (from 1181 to about 1218) ascended the throne.

Jayavarman VII was the first king who was devoted to Buddhism. He erected several temples and monasteries in various places, such as for instance the Bayon Temple. Within his territory he built 121 rest-houses (1191 A.D.) and 102 hospitals (1186 A.D.), and busied himself with erecting Buddhist temples, so that the compassion of the Buddha might traverse the length and breadth of his domain. Within the Angkor capital and the surrounding areas he set into operation a water-distribution system and a system of intensive rice-cultivation, and in this way he guaranteed the livelihood of the construction workers and their families.

The domain of Jayavarman VII developed even more, and he came to govern the Southeast Asian continent for about 37 years. Despite having a few ups and downs, *Second Pax Angkorika* was an era of peace that extended for about 110 years. In the international markets of Angkor goods introduced from India and China were on display, and foreign traders were constantly providing such goods by employing ox-carts or caravans. Special products from regional areas too were displayed in large quantities and sold

The area of governance of the Angkor Empire expanded to a level unprecedented in history. From the capital of Lopburi in the valley of the Chaophraya in the west it extended to the gulf of Thailand, in a westerly direction to the temple of Muang Singh, northwards to Vientian in Laos, northwest to Sukhothai in the regions of Thailand, and eastwards to Vijaya located in the central area of Vietnam. Goods from China that were brought over from the South China Sea were unloaded at the Mekong delta and transported to Angkor, and from the port city of Dawei in the Bay of Bengal, precious metals and high quality printed cotton from India and even luxury goods were transported by ox-carts.

21. The Peace of Angkor Empire Deepened Faith and Stabilized the Economy and Society

The era of the Peace of Angkor that had begun with Jayavarman V (968-1000) continued until the period of Suryavarman I (1002-1050). This was its first epoch, which lasted for about 100 years. Later, Suryavarman II (1113-1150) ascended the throne, and on hearing rumors of the erection of Angkor Wat, vast numbers of villagers assembled at the place, since it was possible for them to earn religious merit and accumulate virtue by engaging in such work.

The King forcefully extended his domain, and during his invasion of Dai Viet and Champa, his massive forces navigated the earth-fortified highway with its stone bridges and assailed the enemy. These sturdy forces also served to maintain the peace. In the succeeding era of Jayavarman VII (1181-1218), the political, economic, and cultural state of affairs developed to their highest point. This could be termed the Second Period of the Peace of Angkor and it lasted for roughly 110 years, for the astonishing affluence of the nation had progressed to such an extent that the Chinese called it (Ming Shi), or the rich and noble Cambodia.

The historical conditions for the Peace of Angkor lay first of all in the fact that during the first (968-1052) and second (1113-1218) epochs of Peace, there existed the earth-fortified highway that traversed the length and breadth of the nation. It was an ancient Asian highway linking the Bay of Bengal and South China Sea, and it was expanded to accommodate the traffic of commercial and other goods, besides people. Needless to say in the central area lay the capital of Angkor, with a population of about 400,000 people. It is my sincere hope that the issue of the Peace of Angkor that I have explained so far will serve to evoke a review of the History of Southeast Asia.

22. Religious Statues from the Angkor Era Discovered in Mandalay

Following a survey of cultural heritage in Myanmar in 1981, two big bronze statues and several statues of Simha were displayed behind metal bars in the Mahamuni Pagoda (also known as the Arakan Pagoda), in the city of Mandalay. On seeing them I was greatly surprised, since I did not expect to see sculptures from Angkor in Mandalay. In fact I touched them to see if they were real, and I also noticed local people visiting the pagoda touch the chest, neck, and legs of the statues. I asked an academic from Mandalay University who accompanied us about them, and he replied that all pilgrims to the pagoda touched the statues, because of their miraculous powers. He said that in particular people had a tendency to touch the part of the statue that corresponded to the portion of their own body that was not in good health, or where they suffered some pain.

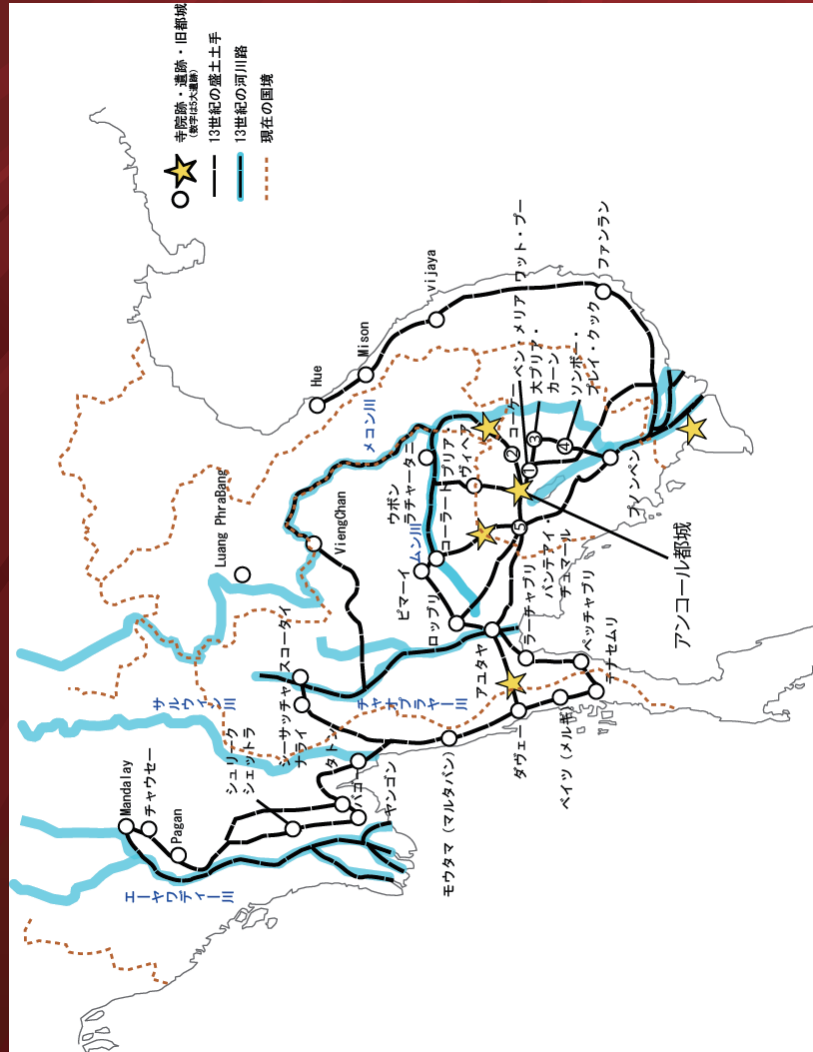
These statues from the Angkor era are of *dhvārapāla*, a deity who protects the entrance. At first I could not understand how the statues had come to Mandalay, but later I realized that they were part of the treasures that had been looted from the city of Angkor. They were probably taken away from the city when it fell to the armies of Ayutthaya around 1431.

The kingdom of Ayutthaya was itself attacked and occupied in 1569 by King Bayinnaung (1551-1581), the second ruler of the Burmese Toungoo Dynasty. The war was fought in order to seize the treasures of the wealthy Ayutthaya Kingdom, and also to take control of trading rights in the Bay of Bengal. The sculptures on display were taken from Ayutthaya as trophies of war and brought to the Burmese city of Bago (Pegu), but in 1599 naval forces of the Kingdom of Rakhine (Arakan) attacked Bago, and the statues were taken away once more.

We do not know if the looters were aware that those statues were originally treasures of the Khmer Empire, but the next place where the statues came to rest was the region of Sitetway (Akiyab). Later, King Badon (1782-1819), the 6th ruler of the Konbaung Dynasty sacked Sitetway, and in 1784 he brought the statues to Amarapura, which lies close to the city of Mandalay. In 1884, during the reign of King Thibaw (1878-1885), who was the 11th king of the dynasty, the statues were ultimately moved to the Mahamuni Pagoda. Hence, the people of Myanmar now venerate those statues, which were earlier revered by crowds of Khmer people when their empire was at its height, and they have at long last found a permanent resting place.

Like the treasures of other royal houses of mainland Indochina, the hidden treasures of the Khmer Empire were moved from east to west, and again from south to north, since the territories of all of those kingdoms were connected by land. Each kingdom had a capital city that played a significant role in its history, and since all of those cities were linked by land, they were hubs of trade and population movement. The treasures passed from the Khmers to the Siamese, and thereafter to the Hmong, the Arakanese, and finally the Burmese, who installed the statues permanently in Mandalay. What I have described so far is the trail of one set of precious statues from the Khmer Empire, but the trail reveals the history of the rise and fall of many of the kingdoms of Southeast Asia.

23. Distribution of Commercial Goods in the Angkor Empire, and the Path Utilized for the Traffic of People (13th century)



24. Dvārapāla (left) and Simha (right) in the Mahamuni Pagoda,
Mandalay



編 集

Editor

編集長 石 澤 良 昭

Editor in chief Dr. Yoshiaki ISHIZAWA

カンボジアの文化復興(32)

——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

発 行 者 上智大学アジア人材養成研究センター
所長 石 澤 良 昭

発行年月 令和 4 年(2022 年) 1 月

発 行 所 上智大学アジア人材養成研究センター
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
電話 (03) 3238-4136
Fax (03) 3238-4138

印 刷 所 株式会社プリントボーイ
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-24-13
電話 (03) 3309-0234